

00
320



始



60

320

上村行彰先生校閱
山本新梧編著
日本鍼灸學教科書
前編

訂正增補

日鍼灸學教科書

前編 大正

內交

大阪府技師正六位勲五等 上村行彰先生校閱
認可關西鍼灸學院々長 山本新梧編著

增訂再版

解剖學上編
生理學上編
鍼灸學上編

關西鍼灸學院出版部

第二版自序

本書第一版は世の要求非常に切なりしかば急遽版に上せし爲め著者の意に充たざるもの甚だ多かりしが今や茲に版を改むるの機運に遭遇したるを以て新に數項を加へ全編に亘りて遺漏を補ひ挿圖を増し殆んど改著の如き増補訂正を爲し且つ挿圖の不鮮明なるものは總て鮮明なるものご取更へたり然れども是を以て未だ完璧となすものに非らず版を重ねるに従ひ斯學の進歩に伴して倍々改善を加へ遺漏なきの域に達せしむるを期すべし

大正四年衆議院議員總選舉の日

著者誌

大正
4. 5. 7
内交

第一版自序

鍼灸治學ハ泰西醫學ノ東漸ニ伴ヒ一時不運ノ境涯ニ徜徉シ將
サニ世人ノ記憶ヲ脱セムトスルニ瀕セシト雖モ我國古來ノ醫
術ニシテ汎ク世ニ行ハレ一タビ隆盛ヲ極メタル鍼灸ノ眞理ハ
固ヨリ永ク地中ニ蟄伏シ居ルモノニアラサレハ茲ニ再ヒ巍然
トシテ其頭角ヲ顯ハシ今ヤ療屬トシテ有効缺クベカラザルモ
ノタルヲ認識セラレ亞フ之ヲ研究シ倍々其濫奧ヲ探ラントス
ルモノ歲月ト共ニ其多キヲ加フルニ至リ從テ其研鑽ノ資ニ供
スベキ著書世ニ行ハル、モノ少ナシトセズ然レドモ一長一短
未ダ執テ以テ後進者ノ教科ニ適スベキモノアルヲ見ザルハ著
者ノ竊カニ遺憾トセシトコロ也

而シテ著者ハ夙ニ志ヲ斯學ノ發達普及ニ注ギ其教育機關ヲ設
ケテ後進者ヲ育成スル茲ニ歲アリ此間成書ニ照ラン經驗ニ鑑
ミ説ケバ筆シ述ブレバ叙シタルモノ累積シテ遂ニ一編ノ書冊
ヲ成スニ至レリ關西鍼灸學院ノ教科書ハ即チ之ニ屬ス想フニ
斯學ハ研究其歩ヲ進ムルニ從ヒ益々深遠ニシテ廣汎ナルヲ覺
ユルノミ而カモ著者ガ自叙シタル教科書ニ據リ養成シタル後
進者ノ成績ニ徵スレバ結果良好ニシテ稍ヤ著者ノ理想ニ近カ
ラントスルノ曙光ヲ認メシヲ以テ他日之レヲ補正シテ公刊セ
ントスルノ意アリシモ如何セン身ハ日常業務ノ繁劇ニ苦メラ
レ素志ヲ貫クノ閑ヲ得ザルコト實ニ三春秋ニ涉リ荏苒今日ニ
至リシガ時運ノ要求ハ徒ラニ上梓ノ遷延ヲ容サズ止ムナク業

務ノ閑餘ヲ以テ之ガ編纂補修ニ暇メ遂ニ公刊スルノ運ビニ至
レリ而シテ著者ヲシテ本書ヲ公刊スルノ決心ト勇氣ヲ鼓舞セ
シメタル動機ハ蓋シ辱知上村行彰先生ノ指導ニ負フ處鮮少ナ
ラズ是レ先生ニ對シ虔テ感謝ノ意ヲ表スル處ナリ
顧フニ著者ハ淺學菲才素ヨリ著書ノ器ニアラズ此故ニ書中記
スル處敢テ眞理ノ全班ヲ盡シタリトハ信ゼズ異日大方ノ示教
ヲ俟テ更ニ訂正ヲ加フルコトアルベシト雖モ幸ニ鍼灸治學ヲ
研究セムト欲スルノ士ニ對シ庶幾ハ多少ノ參考ニ資スル處ア
ラハ當ニ著者ノ本懷ノミニアラザル也

明治四十五年五月十五日

山本新梧識

凡例

- 一、本書之ヲ分テ三編トシ解剖學生理學鍼灸學三科ヲ前編及ビ中編ニ分載シ經
穴學病理治療學ノ二科ヲ後編ニ載ス
- 二、本書ハ專ラ教科書ニ充ツルタメニ編述セルモノナルヲ以テ解剖生理二科ノ
如キハ可及的詳密ナランコトヲ欲シタリ世或ハ鍼灸術ニ於テカ、ル深遠ナル智
識ヲ要セズト曰ハン然レドモ鍼灸術タル素ヨリ疾病治療ノ一技術タルヲ以テ之
ガ適切ナル治方ヲ行フニハ人體基礎タル解剖生理二科ニ通ジ以テ之ヲ應用スル
ニ非ズンバヨク之ガ目的ヲ達スルコト能ハズ是レ吾人ガ本科ヲ殊ニ詳述セシ所
以ナリ
- 三、然リト雖モ解剖生理ノ二科ハ之ヲ教授スルニ當リ必ズシモ全編ヲ授ケント
スルモノニアラズ先ヅ其要ヲ摘ミテ之ヲ授ケ大綱ニ通ジタル後チ必要ニ應ジテ
之ヲ補充スルノ方針ニ據ルヲ可トス殊ニ解剖學ハ之ヲ系統的ニ敘述セルヲ以テ

局部ノ應用ニハ更ニ局處的ニ解説センコトヲ要ス

四、本書ハ教科書ノ傍ラ鍼灸術者研究上ノ參考ニ資スルノ目的ニ出ヅルヲ以テ挿圖ヲ多クシ電メテ理解シ易カラントセリ

五、經穴ノ如キ古來傳フルトコロハ其數徒ラニ多クシテ悉ク之ヲ記憶スルモ其効甚ダ鮮少シ故ニ本書ニ於テハ專ラ其必要ノ認ムル經穴ノミヲ擧ゲ且ツ之ニ解剖的部位ヲ附記シテ記憶並ニ應用ニ便セリ

六、鍼灸術ノ勃興ト共ニ之ヲ修メントスルモノ多キニ至リ從テ遠ク師ニ就ク能ハザルモノ、タメニ特ニ通信教授ノ便ニ當ツ然レドモ月々小冊子發行ハ讀者ニ却テ不便不經濟ニシテ且ツ紛失等ヲ慮リ(別ニ細則ヲ設ケ茲ニ本書ヲ編製セリ

鍼灸科沿革小史

抑も鍼科の治術的應用として遠く太古より我が國に行はれたるは「本草綱目」に古者以石爲鍼季世以鐵代石云々又允恭天皇紀に破身治病云々の記事あるを以て知るべし而して所謂鍼術として認むべきは人皇二十九代欽明天皇二十三年支那より輸入されたるもの其主にして同年秋八月吳の人知聰なる者藥書明堂圖等百六十卷を持して來朝す之れ外國醫書殊に鍼科典籍の我國に入るの始めなり以來此鍼術を考究する者多く其後人皇四十二代文武天皇大寶年中に定められし大寶令にも宮内省典藥寮の醫師醫博士醫士醫生に對し鍼師・鍼博士・鍼生等を置き鍼博士は鍼生を教育することを掌どり鍼

生は鍼を學ぶことを掌ごるごありて鍼科の専門茲に始めて基礎を置かれたり「醫心方」の著者たる丹波康賴氏も亦た鍼博士にして「醫心方」の第一卷に醫學の大體を論じ、其二卷に鍼灸の諸法を擧げ且つ用ゆる處の鍼に九種を區別し又病理的に人身體の刺點即ち孔穴を明かにせり、灸法も亦た支那にありては古代より行はれたるものにして鍼科と共に我が國に盛ごなり大寶令にも鍼灸の法ごし鍼科の中に入れ孔穴主治畧ご同一に行はれたり

爾後鍼灸術は旺に發展し平安朝時代にありては醫道の要部を占め鍼博士は醫博士ご相並び其術の秀でたる人之れに任ぜられしも鎌倉時代より室町時代に至りては逐次醫官の廢類ご共に鍼博士及び鍼師は名實共に消失し鍼科に名門を出

す能はず即ち當時鍼家の振はざりしや明なり但し鍼灸の術たる依然治方の一部ごして却て内外醫家に應用されしは諸家の著書に鍼治法の載せざるなきを以ても知らるべし斯くして織田豊臣氏時代に及べり此期に於て曲直瀬道三氏起りて醫學を中興するに當り「鍼灸集要」の一書を著して鍼灸治法を唱道せり但し丹波氏の如く鍼科は醫の本道ご認められず治病上の一部ごして記載せられたるに過ぎず又此期に應用せられたるは鈹鍼ご毫鍼にして甲は主ごして外科に屬し乙は専ら鍼科用ごせられ稍や鍼灸科の復興せられたるに従ひ漸次鍼灸科専門の名家を出すに至れり即ち入江頼明吉田意休匹地喜庵の諸氏及び京都に御園意齋氏起り金銀鍼を研究し小槌の扁平なるものを以て打鍼的に刺鍼する等大に鍼術

を以て名を成せり
次で徳川氏初世に入りては元和元年綱吉將軍令して鍼術の
振興を圖られ杉山和一氏起て鍼治講習所を設け諸生を教授
し大に勉むる處ありし結果門人三島安一氏に至り更に事業
を擴張し講堂を諸州に増設し病原的に經絡孔穴を究明し鍼
の運用を論じ旺んに門弟を養ひ所謂杉山流鍼科の發展を擧
げたり而して當時捻鍼打鍼管鍼の三法を用ひたるが如し其
捻鍼は即ち毫鍼を用ひ打鍼は御菌意齊氏の創始にして主
として腹部又は孔穴を論ぜず刺鍼せり又管鍼は杉山和一氏の
創始にして現今使用するもの即ち是なり故に管鍼打鍼は日
本獨得の發明にして支那より傳來せしものにあらざるなり
昔日支那より傳來せし支那流の鍼治法とは其趣きを異にし

我が國醫家の研究に因て鍼術は著しく進歩改發するに至り
しは明けし斯くの如くして徳川氏中世に入り益々鍼科の復
興を計らんとし攝津の人菅沼周圭氏の如き「鍼灸則」「鍼灸摘要」
「鍼灸治驗」等の書を著はし盛に鍼科の改發を唱道せり當時杉
山氏吉田氏の各流の外京都に御菌中渠氏あり父祖の傳を受
け打鍼を専門とせり
次で徳川季世に及んで鍼灸科を以て専門と後侍醫法眼に
任ぜられたる甲府の人石阪宗哲氏出で自家獨創の見を以て
斯術を研究し「骨經」「內景備覽」を著はし人體解剖を論じ更に「鍼
灸說約」「鍼灸知要」等の書を著はし刺鍼の方法を説き常に革新
を唱へ鍼科の面目大に一新せられ旺んに斯術の有効なるを
唱道する等斯術の復古漸やく色めくに際し維新の革命とな

り時の將軍政權を奉還し大政は帝室に歸し諸般の制度皆な其範を西洋に採るに至り西歐の文物盛に輸入せられ爲めに我が醫界の制度方針も一大變遷を受け三千年來の支那文化に伴ふ醫方は明治初年に於て西洋醫學の勢力に拮抗する能はず鍼灸科も皇漢醫道と共に逐次衰頽し明治十八年前後には殆んど識者の認むるものなく遂に下賤者又は盲人の業となり漸次衰頽するに至れり是れ恐らくは鍼灸科沿革史上最も萎靡せし時代と見て可ならん乎

然りと雖も勢ひ極まりて轉ずるは自然の理にして嘗て西歐技術の巧妙に心酔し本邦固有の文物を棄て亦顧みざりしものも再び之を研究採擇するの念を生ずるに至り殊に鍼灸術の如き永く我國固有の妙技として尊誦せられしものも二三

盲啞學校に於て之を養成するの他何等活動を見ることなかりしが醫學の進運と共に漸次指を此方面に染むるものを生じ故大久保適齋氏の如き之を學理的に研究し又三浦博士の如き夙に之を研鑽して廣く歐洲に報ずるに至り或は原田樞田兩醫學士の其研究成績の發表を見其他幾多斯道に關する著書出するに至り一般士民も亦之を要求するもの相踵ぎ從て鍼灸術者は徒らに舊法を墨守して時勢の進歩と相反戻するの非なるを悟り學理を應用して之を實地に施すこと斯道進歩に益あるを察し茲に再び蹶起するの時機到來して諸所に之れが養成處を設立し數多新進の斯業者を出すに至りたるを以て明治三十五年に大阪府を始めし各府縣に於ても各之れが免許に一定の制度を設け試験法を規定し新學問

の素養あるものにのみ之を許可するの方針を執りたる結果は斯業者向上發展の基礎を成し或は組合を設けて之を誘導し或は學人會を設けて之れが研究に従事するの機運に際會せしが遂に明治四十四年に至り内務省は永く懸案たりし鍼灸術營業に關する取締規則を發布し試験法を制定し同四十五年一月より實施せられ殊に該試験委員には民間の専門家を以てし從來區々なりしものも茲に始めて全國統一の基礎を確立するに至りたり古來四星霜幸に稍や發展向上の曙光を窺ふの機運に際會するに至れり

本日鍼灸學教科書
前編 目次

解剖學目次

第壹編 解剖學

序論	1
第一 系統解剖學	2
第二 局處解剖學	2
第三 組織學	2
第四 胎生學	3
第五 比較解剖學	3
細胞	3
組織	3
第一 上皮組織	5
第二 筋組織	5
第三 神經組織	6
第四 結締質	7
(一) 結締組織	7
(二) 彈力組織	8
(三) 脂肪組織	8

目次

第一章 骨學

(四) 色素組織	8
(五) 內皮組織	8
(六) 軟骨組織	9
(七) 骨組織	9
第一章 骨學總論	1
第一 骨髓	2
第二 骨膜	3
第三 骨の主成分	3
第四 骨の發生及び長育	4
第五 軟骨	5
第六 骨の形狀	5
第七 骨數及び骨格等	6
第二章 骨學各論	7
第一 軀幹骨	7
甲 脊椎骨	7
イ 眞椎	7

(一) 屈伸椎……………一九

(二) 廻旋椎……………二〇

第一頸椎(載域)……………二〇

第二頸椎(樞軸)……………二三

□ 假椎……………二三

(一) 薦骨……………二三

(二) 尾閭骨……………二五

乙 胸骨……………二六

丙 肋骨……………二七

肋軟骨……………二九

胸廓……………三〇

丁 舌骨……………三三

戊 頭蓋骨……………三三

1 腦頭蓋……………三三

(一) 後頭骨……………三三

(二) 蝴蝶骨或は楔狀骨……………三七

(三) 篩骨……………四〇

(四) 前頭骨……………四一

(五) 顛顛骨……………四四

(六) 顛頂骨……………四六

□ 顔面頭蓋……………五〇

(一) 上顎骨……………五一

(二) 口蓋骨……………五四

(三) 淚骨……………五六

(四) 下甲介骨……………五七

(五) 鼻骨……………五七

(六) 顴骨……………五八

(七) 鋤骨……………六〇

(八) 下顎骨……………六〇

腦頭蓋の縫合及び百會……………六二

頭蓋頂と頭蓋底との區別……………六五

顔面頭蓋の腔窩……………六七

第二 四肢骨……………六九

甲 上肢骨……………六九

1 上肢帶……………六九

(一) 鎖骨……………六九

(一) 肩胛骨……………七一

□ 固有上肢骨……………七三

(一) 上膊骨……………七三

(二) 前膊骨……………七五

1 尺骨……………七六

2 橈骨……………七七

(三) 手骨……………七六

1 腕骨……………七九

2 掌骨……………七九

3 指骨……………八一

乙 下肢骨……………八一

1 下肢帶……………八一

(一) 無名骨……………八二

1 腸骨……………八二

2 坐骨……………八四

3 耻骨……………八五

髌骨……………八五

腓骨……………八六

骨盤……………八六

□ 固有下肢骨……………八七

第二 韌帶學……………九六

甲 不動關節……………九六

(一) 縫合……………九六

(二) 接合……………九六

乙 可動關節……………九七

(一) 全動關節……………九六

(二) 鞍狀關節……………九六

(三) 橛狀關節……………九六

(四) 蝶番關節……………九八

(一) 大腿骨……………八七

(二) 下腿骨……………九〇

1 膝蓋骨……………九〇

2 脛骨……………九〇

3 腓骨……………九二

(三) 足骨……………九三

1 跗骨……………九三

2 跖骨……………九四

3 趾骨……………九五

第三筋學

第一章 筋學總論

隨意筋……………103

不隨意筋……………104

筋の起始停止及び形状……………104

筋膜……………105

筋と神経との關係……………106

第二章 筋學各論

第一 軀幹筋……………107

甲 背筋……………107

イ 淺層諸筋……………107

(一) 僧帽筋……………108

(二) 潤背筋……………109

(三) 菱形筋……………109

(四) 後上鋸筋……………109

(五) 後下鋸筋……………110

(六) 夾板筋……………110

□ 深層諸筋……………111

長背筋……………111

(一) 薦骨脊柱筋……………111

(二) 棘筋……………112

(三) 横棘筋……………113

短背筋……………113

○屈伸椎に屬するもの

(一) 横突起間筋……………114

(二) 棘間筋……………114

(三) 肋骨舉筋……………115

○後頭骨及び廻旋椎に屬するもの

(一) 後大直頭筋……………115

(二) 後小直頭筋……………116

(三) 下斜頭筋……………116

(四) 上斜頭筋……………116

(五) 側直頭筋……………117

腰背筋膜……………118

乙 腹筋……………118

イ 縱筋……………118

(一) 直腹筋……………119

(二) 三稜腹筋……………119

□ 横筋……………120

(一) 外斜腹筋……………120

(二) 内斜腹筋……………120

(三) 横腹筋……………121

プーパルト氏靱帶……………121

股輪……………121

鼠蹊管……………121

胸隔膜……………123

丙 胸筋……………124

イ 淺層……………124

(一) 大胸筋……………125

(二) 小胸筋……………125

(三) 鎖骨下筋……………126

(四) 前大鋸筋……………126

□ 深層……………126

(一) 内及び外肋間筋……………127

(二) 前及び後横胸筋……………128

丁 頸筋……………128

イ 淺層長筋……………128

(一) 潤頸筋……………129

(二) 胸鎖乳嘴筋……………129

(三) 二腹頸筋……………130

□ 淺層短筋(舌骨上筋)……………131

(一) 莖狀舌骨筋……………131

(二) 顎舌骨筋……………131

(三) 頤舌骨筋……………131

ハ 淺層短筋(舌骨下筋)……………132

(一) 胸骨舌骨筋……………132

(二) 胸骨甲狀筋……………132

(三) 甲狀舌骨筋……………133

(四) 肩胛舌骨筋	一三三
二 深層	一三四
外列	
(一) 前斜角筋	一三四
(二) 中斜角筋	一三五
(三) 後斜角筋	一三五
(四) 肩胛舉筋	一三五
內列	
(一) 長頸筋	一三六
(二) 前大直頭筋	一三六
(三) 前小直頭筋	一三六
戊 頭蓋筋	一三七
イ 頭蓋頂筋	一三七
(一) 前頭筋	一三七
(二) 後頭筋	一三八
(三) 耳前筋	一三八
(四) 耳後筋	一三八
(五) 耳上筋	一三八
帽狀腱膜	一三九

口 顏面筋	一三九
眼瞼筋	一三九
(一) 眼輪匠筋	一四〇
口裂筋	一四〇
第一層	
(一) 額骨筋	一四〇
(二) 笑筋	一四一
(三) 三角頤筋	一四一
(四) 方形上唇筋	一四二
第二層	
(一) 犬齒筋	一四二
(二) 方形頤筋	一四三
第三層	
(一) 頰筋	一四三
(二) 頤筋	一四三
口輪匠筋	一四四
鼻筋	一四四
(一) 鼻翼下掣筋	一四四
(二) 鼻壓縮筋	一四五

咀嚼筋	一四四
(一) 顳顬筋	一四四
(二) 咬筋	一四四
(三) 外翼狀筋	一四四
(四) 內翼狀筋	一四四
顳顬筋膜	一四七
耳下腺咬筋膜	一四七
第二 四肢筋	一四七
甲 上肢筋	一四七
イ 肩胛筋	一四七
(一) 三角筋	一四七
(二) 棘上筋	一四七
(三) 棘下筋	一四七
(四) 小圓筋	一四九
(五) 大圓筋	一五〇
(六) 肩胛下筋	一五〇
口 上膊筋	一五一
前側	
(一) 二頭膊筋	一五一

(二) 烏喙膊筋	一五一
(三) 內膊筋	一五一
(一) 三頭膊筋	一五二
(二) 小肘筋	一五三
後側	
ハ 前膊筋	一五四
前側淺層	
(一) 廻前圓筋	一五四
(二) 內橈骨筋	一五四
(三) 內尺骨筋	一五五
(四) 長掌筋	一五五
(五) 淺屈指筋	一五六
前側深層	
(一) 深屈指筋	一五七
(二) 長屈指筋	一五七
(三) 廻前方筋	一五八
橈骨側	
(一) 膊橈骨筋	一五九
(二) 長外橈骨筋	一五九

(三) 短外橈骨筋……………一五九

後側淺層

(一) 總指伸筋……………一六〇

(二) 固有小指伸筋……………一六〇

(三) 外尺骨筋……………一六一

後側深層

(一) 廻後筋……………一六一

(二) 長外轉拇筋……………一六二

(三) 短伸拇筋……………一六二

(四) 長伸拇筋……………一六三

(五) 固有示指伸筋……………一六三

二 手筋……………一六四

拇指側

(一) 短外轉拇筋……………一六五

(二) 短屈拇筋……………一六五

(三) 內轉拇筋……………一六五

(四) 對小指拇筋……………一六五

小指側

(一) 短掌筋……………一六五

(二) 外轉小指筋……………一六五

(三) 小指屈筋……………一六五

(四) 對拇小指筋……………一六五

中央部

(一) 蟲樣筋……………一六五

(二) 骨間筋……………一六五

乙 下肢筋……………一六六

1 腕部筋……………一六六

內腕部筋

(一) 方形腰筋……………一六六

(二) 腸腰筋……………一六七

外腕部筋

(一) 大臂筋……………一六六

(二) 中臂筋……………一六九

(三) 小臂筋……………一六九

(四) 梨子狀筋……………一六九

(五) 內鎖筋……………一七一

(六) 外鎖筋……………一七一

(七) 方形股筋……………一七二

口 大腿筋……………一七二

前側淺層

(一) 張股鞘筋……………一七三

(二) 縫匠筋……………一七三

前側深層

(一) 四頭股筋……………一七三

後側

(一) 二頭股筋……………一七五

(二) 半腱樣筋……………一七五

(三) 半膜樣筋……………一七六

內側

(一) 耻骨筋……………一七七

(二) 長內轉股筋……………一七七

(三) 薄股筋……………一七七

(四) 短內轉股筋……………一七八

(五) 大內轉股筋……………一七八

八 下腿筋……………一七九

前側

(一) 前脛骨筋……………一八〇

(二) 長伸跖筋……………一八〇

(三) 長總趾伸筋……………一八一

腓骨側

(一) 長腓骨筋……………一八一

(二) 短腓骨筋……………一八二

後側

(一) 腓腸筋……………一八三

(二) 比目魚筋……………一八三

(三) 蹠筋長足……………一八四

(四) 膝膈筋……………一八四

(五) 長總趾屈筋……………一八五

(六) 長屈跖筋……………一八五

(七) 後脛骨筋……………一八六

二 足筋……………一八六

足背筋

(一) 短總趾伸筋……………一八七

足蹠筋

躡趾側……………一八七

(一) 外轉跗筋	一六六	(七) 腋窩	一九一
(二) 短屈跗筋	一六六	(八) 肘窩	一九一
(三) 內轉跗筋	一六六	(九) 腸趾窩	一九二
○小趾側		(十) 膝膕窩	一九三
(一) 外轉小趾筋	一六六		
(二) 小趾屈筋	一六六		
(三) 對跗小趾筋	一六六		
○中部			
(一) 短總趾屈筋	一八九		
(二) 方形足蹠筋	一八九		
(三) 蟲樣筋	一八九		
(四) 骨間筋	一八九		
筋に由て構成せる凹窩	一九〇		
(一) 顎下三角部	一九〇		
(二) 上顎三角部	一九〇		
(三) 下顎三角部	一九〇		
(四) 鎖骨上窩	一九一		
(五) 胸骨上窩	一九一		
(六) 大胸三角筋窩	一九一		

解剖學前編目次 (終)

生理學目次

第二編 生理學

緒論	一	第三 心臟の神經機能	二四
生理學各論	三	心臟の制止神經	二五
第一章 血液生理	四	心臟の鼓動神經	二五
第一 血液	四	血液運行の原因	二六
甲 血球	五	血壓	二六
(一) 赤血球	五	血壓の測定	三〇
(二) 白血球	七	血壓の呼吸及び身體運動による變化	三〇
乙 血漿	九	血液流通の速力	三一
第二 血液凝固	一〇	脈搏	三一
第三 血液の量	一一	脈性及び脈數	三一
第四 動脈血及び靜脈血	一二	脈搏の感觸	三五
第五 血液の瓦斯	一三	血液の一循環時間	三五
第二章 血液循環生理	一四	血管の神經機能	三七
第一 心運動	一六	血管收縮神經	三七
第二 心尖搏動及び心音	一六	血管擴張神經	三九
		呼吸生理	四〇
		第一 呼吸の目的及び區別	四〇
		甲 外呼吸	四一
		(一) 肺臟呼吸の化學的作用	四一

(二) 皮膚呼吸 四
 乙 内呼吸 四
 第二 呼吸の原理 四
 第三 異類瓦斯的呼吸 四
 第四 呼吸運動 四
 (一) 胸廓の一横一縮 四
 (二) 呼吸気交換の分量 五
 (三) 肺活量 五
 (四) 呼吸の法式 五
 (五) 呼吸の員数 五
 (六) 呼吸音 五
 第五 呼吸時に於ける鼻腔の機能 五
 第六 室息 五
 第七 呼吸運動の變態 五
 第八 呼吸の神経機能 五
 (一) 直接興奮 五
 (二) 間接興奮 五
 第四章 淋巴生理 六
 淋巴液 六
 乳糜液併に其形成 六

淋巴腺 六
 第五章 分泌生理 六
 分泌作用 六
 分泌機能 六
 第一 唾液 六
 (一) 唾液腺の造構 六
 (二) 唾液の化學的成分 六
 (三) 唾液の消化作用 六
 (四) 唾液の分泌に神經機能の感應 六
 第二 胃液 六
 (一) 鹽酸 六
 (二) 「ムシツ」 六
 (三) 凝固醱酵素 六
 (四) 無機鹽 六
 (五) 胃腺の造構 六
 (六) 胃液の分泌に神經機能の感應 六
 第三 胆汁 六
 (一) 膽汁の分泌に神經機能の感應 六
 (二) 「トリプシン」及び「マルターゼ」 六
 (三) 「ロ」 六

(八) 「ステアブシン」 七
 胆汁の分泌作用 七
 第四 膽汁 七
 (一) 兩種の膽汁酸 七
 (二) 膽汁色素 七
 膽汁の分泌 七
 膽汁の排泄 七
 第五 腸液 八
 第六 尿 八
 尿の集成 八
 (一) 腎中の尿分泌管 八
 (二) 尿中に分泌する物質 八
 (三) 腎血管に於ける神經の作用 八
 (四) 腎臓より尿の排泄 八
 第七 汗 八
 汗の分泌に神經機能の感應 八
 發汗神經の経路 八
 第八 皮膚 八
 皮膚の作用 八
 耳聾 八

第九 涙液 八
 涙液の分泌に神經機能の感應 八
 第九 乳汁 九
 乳汁の分泌 九
 第十一 精液 九
 精蟲 九
 第六章 消化生理 九
 第一 飲食物 九
 甲 營養物 九
 (一) 無機性營養物質 九
 (二) 有機性營養物質 九
 乙 嗜好品 九
 第二 營養物の消化 九
 甲 口腔の消化 九
 (一) 口腔の理學的消化 九
 (二) 口腔の化學的消化 九
 (三) 嚥下運動 九
 乙 胃の消化 九
 (一) 胃の理學的消化 九
 (二) 胃の運動を主宰する神經 九

胃の異常運動 一〇四

(一) 胃の化学的消化 一〇四

(イ) 蛋白質に致す作用 一〇五

(ロ) 蔗糖 一〇七

(ハ) 乳汁 一〇七

(三) 胃中に於ける食物滞留時間 一〇七

丙 腸の消化 一〇八

(一) 理學的消化 一〇八

(二) 化学的消化 一〇九

(イ) 胆汁 一一〇

(ロ) 膽汁 一一〇

(ハ) 腸液 一一一

(三) 腸中に於ける食物滞留時間 一一三

第三 腸中の醗酵及び腐敗分解 一一二

第四 大腸の作用及び糞便形成 一一三

脱糞機能 一一五

第七章 吸収及び同化生理 一一六

一一 吸収及び同化 一一六

吸収の原理 一一七

第二 胃及び小腸内に於ける吸収 一二七

小腸及び大腸内に於ける吸収部 一二八

(一) 蛋白質の吸収及び同化 一一九

(二) 脂肪の吸収及び同化 一二〇

(三) 含水炭素の吸収及び同化 一二二

第三 新陳代謝の現象及び飢餓 一二二

(一) 攝收不全 一二三

(二) 攝收過剰 一二六

(三) 働作及び體温放散の影響 一二六

(四) 體質代謝 一二七

附 特殊の臓器中に於ける血液の變化(内分泌) 一二八

(一) 肝臓 一二九

(二) 腎臓 一二九

(三) 脾臓 一三〇

(四) 副腎 一三〇

(五) 甲状腺 一三〇

(六) 胸腺 一三三

(七) 腺 一三三

(八) 卵巣 一三三

(九) 卵巣 一三三

(十) 大腸下垂體 一三三

生理學目次 (終)

鍼灸學目次

第三編 鍼灸學

總論 一

第一章 鍼術 三

第一 鍼の材料 三

第二 鍼の種類 四

第三 鍼の區別及び名稱 六

第四 鍼科の流派と鍼の構造 八

第五 刺鍼の法式 一三

(一) 燃鍼 一五

(二) 打鍼 一六

(三) 管鍼 一七

第六 鍼治の目的 二三

(一) 制止法 二三

(二) 興奮法 二四

(三) 誘導法 二四

第七 鍼術手技 二七

(一) 單刺術 二六

(二) 旋刺術 二六

(三) 雀啄術 二六

(四) 置鍼術 二八

(五) 間歇術 二九

(六) 振蕩術 二九

(七) 廻旋術 二九

第八 刺鍼に於ける刺戟の強弱 三〇

刺戟刺戟の度 三〇

異常の刺戟 三三

第九 鍼の細大長短 三五

第十 術者被術者及び鍼器消毒の目的 三七

傳染病の種類 三八

鍼治家と化膿性疾患 三九

第十一 消毒の方法 四〇

甲 理學的消毒法 四一

乙 化学的消毒法 四一

第十二 消毒薬の調製 四四

(一) 五十倍石炭酸水 四七

(二) 五十倍「ヨソール」液 四八

(三) 百倍「フォルマリン」水……………四

(四) 通常「アルコール」……………四

第十三 施鍼時に於ける術者の注意……………四

鍼灸學前編目次 (終)

日本鍼灸學教科書前編

(增訂再版)

大阪府技師防疫官衛生課長
大阪府鍼灸術試驗委員 正六位勳五等

上村行彰先生校閱

大阪府奈良縣和歌山縣各鍼灸術試驗委員
大阪組合鍼灸會々々長關西鍼灸學院々々長

山本新梧編著

第一編 解剖學

序論

解剖學は是を大別して動物解剖學及び植物解剖學とす而して醫學並に鍼灸術に必要なるは動物解剖學中の人體解剖學にして人體解剖學は更に亦た系統解剖學・局處解剖學・組織學・胎生學及び比較解剖學に區別す

第一系統解剖學(或は解剖各論)は身體を構成する體部の類別即ち骨・靱帶・筋肉・内臓・感覺器・血管・神經等の系統を逐ふて是を論ずるものなり

第二局處解剖學は系統解剖學中特に局處に就て臓器の位置の關係を論ずるものにして、殊に諸般の外科的・手術上缺くべからざるものなり、故に亦外科的解剖學とも云ふ

第三組織學(或は解剖總論)は顯微鏡を用ひて諸臓器を構造する組織及び是を構成する成形原素を究明し以て是を論ずるものなり故に亦顯微鏡的解剖學とも云ふ

例へば筋系統・心肺の臓器は是を系統解剖學に於て説き筋組織・脂肪組織及び是等の組織を成形する細胞は是を組織學に於て説くが如し

第四胎生學 身體は其初め唯一の卵子なれども時期の移るに伴ふて絶へず變化し種々の状態を経歴し來るものにして即ち胎生學は此の發育の歴史なり

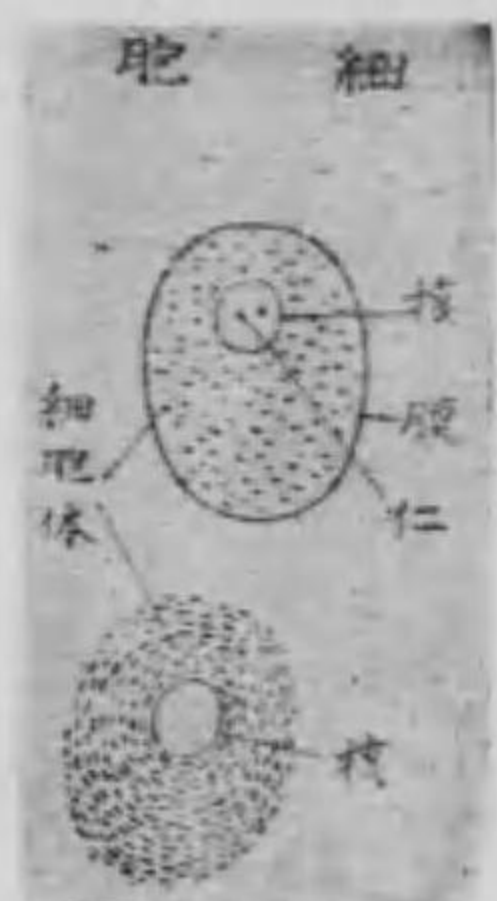
第五比較解剖學は人體及び種々の動物の構造を比較して其異同を觀察し以て其理を推究するものなり

以上の諸學は各一科として講究すべきものなるも今茲に講ぜんとするものは即ち系統解剖學なり、而して是を學ぶに當りては豫め人體組織の如何なるものなるやを知るの必要あるが故に系統解剖學に入るに先ちて組織學の大要を記せんを欲す

細胞

細胞は顯微鏡下にあらざれば見得べからざる軟弱么微の微小體

第一圖



にして其形も圓く内容は原形質(プロトプラ
スマ)顆粒及び核を有し成育すれば更に周圍
に膜を有す又細胞は獨立の生活機能(メタボ
リズム)を営み

得るが故に運動蕃殖(増殖)生育物質交換等の機能を具有す即ち運動は
種々の突起を顯はし是に因て徐々に其形状及び位置を變化し其
状態恰かも「アメーバ」(動物を云ふ)の運動するに似たるを以て是れを

第二圖

細胞の形状



「アメーバ」様運動云へり蕃殖
は核の複雑なる固有の機能に
由て是を營み而して其生育變
化も自から差異を生じて圓形
多角形柱状扁平星状紡錘状等
の形態を有するに至る又物質

組織

交換は營養物(固體あり又液體あり)を外より體內に取り其營養
分を吸収し後ち是を體外に排泄するの作用を謂ふ

組織とは同種の細胞固有の原素相集合して形成するもの、謂ひ
にして是を分ちて上皮組織・筋組織・神經組織及び結締質となす

第三圖



鼻腔・氣管等の内面を被包するものにし
て上皮細胞の形状に従ひ扁平上皮・柱状
上皮・毳毛上皮等に區別す

第二筋組織を分ちて二とす、一は横紋筋組織にして一は滑平筋
纖維なり、而して此兩筋纖維は其細胞の形状を異にす(筋學總論参照)

圖 四 第

胞 細 及 維 織 全 神



一 有髓神經纖維
 二 無髓神經纖維
 三 神經細胞
 四 神經末梢
 五 神經纖維
 六 神經鞘
 七 神經細胞
 八 神經纖維

二種あり、即ち有髓神經纖維及び無髓神經纖維是なり

(一) 有髓神經纖維は中央に軸あり是を軸索と云ひ其周圍に爛光ある粘液状の物質あり是を神經髓と云ふ、神經髓の外圍には菲薄透明なる膜あり是をシユワン氏鞘と云ふ

(二) 無髓神經纖維は神經髓なくして直にシユワン氏鞘を以て

第三神經組織は

神經細胞神經纖維より成るものにして即ち神經の中樞部及び末梢部を組織せるものなり而して神經纖維には

被包せらるるものなり

第四結締質 此は結締組織弾力組織脂肪組織色素組織内皮組織軟骨組織及び骨組織を云ふ

(一) 結締組織に二種あり即ち一は纖維様結締組織にして一は網狀結締組織なり而して甲の細胞は僅少にして紡錘状を呈し乙

圖 五 第



の細胞は星状にして突起を生じて互に相連接す是等の細胞は遍なく體の諸部を充填する組織と

圖六第

色素及皮膚組織

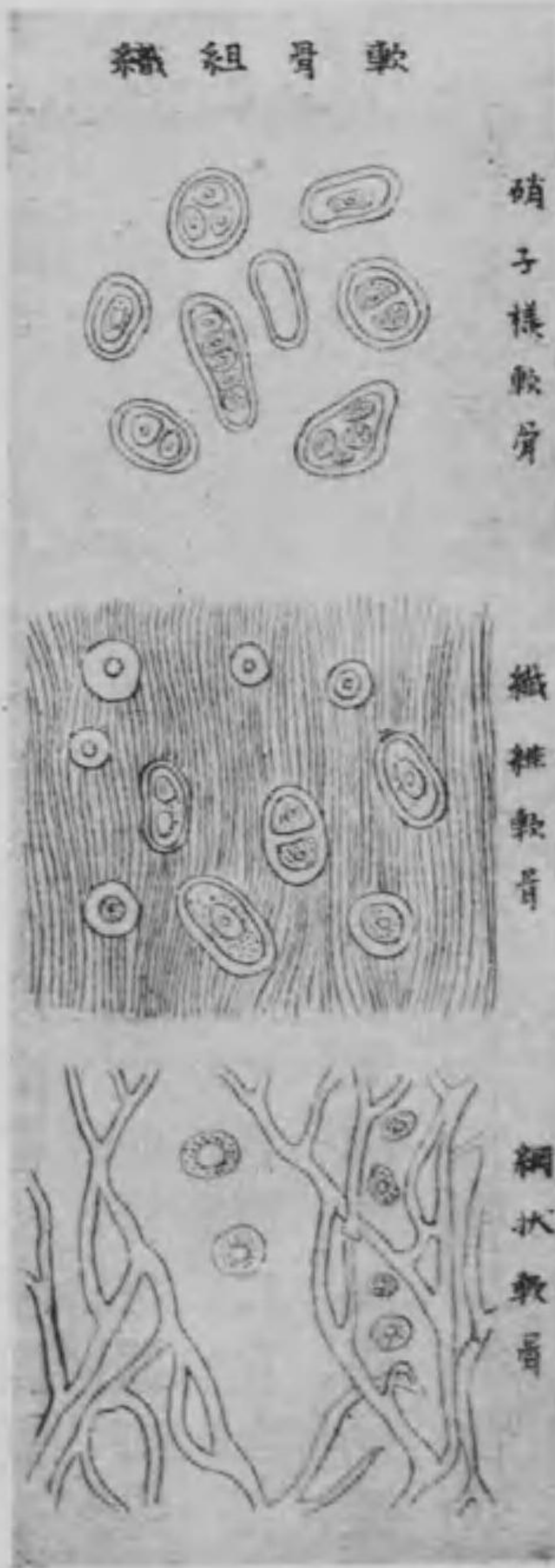


なり體中殆んど存せざる處なし
 (二) 彈力組織は細胞なく唯だ纖維のみにして結締組織中に存在し大小ありて其性非常に彈力を有す
 (三) 脂肪組織は圓形の細胞にして核を有し脂肪を以て充滿し次第に集合して葡萄狀の塊を爲し結締組織に由りて包裹せらるるものなり
 (四) 色素組織は星狀及び六角形を有する細胞にして眼球の脈絡膜・虹彩等にありて黒色の色素を含有す

(五) 内皮組織は心臓及び血管等の内面を包裹せるものにして其細胞は極めて扁平且つ菲薄なるものなり

圖七第

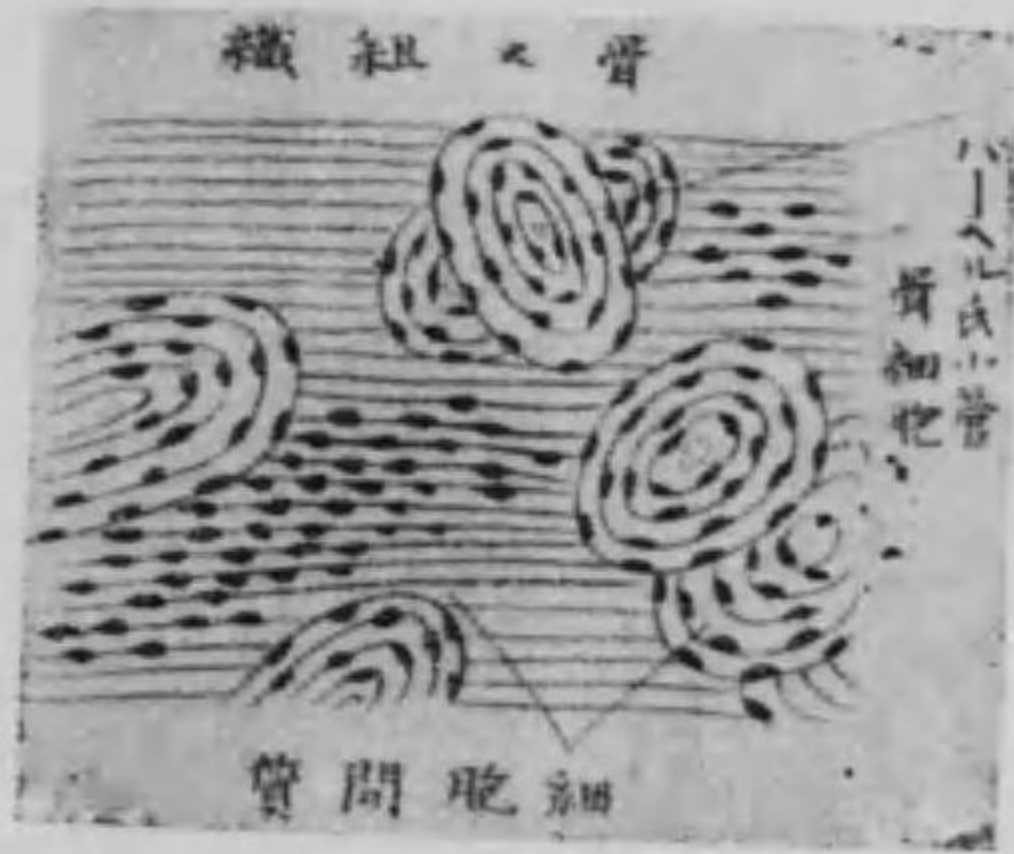
軟骨組織



(六) 軟骨組織軟骨は其質強固にして彈力性を有し表面は膜を以て被はる是を軟骨膜と云ふ軟骨膜は血管・神経を具し軟骨を營養するも敢て骨質を發生するこごなし又軟骨を分ちて硝子樣軟骨・網狀軟骨・纖維樣軟骨の三種とす
 (七) 骨組織は即ち骨細胞・ハール氏小管及び細胞間質より成る而して骨細胞は細胞間質中に布曼し其形狀は多角形にして多數の突起を以て自他互に相交しハール氏小管或は髓腔に交通す

九

第八圖



なすものなり

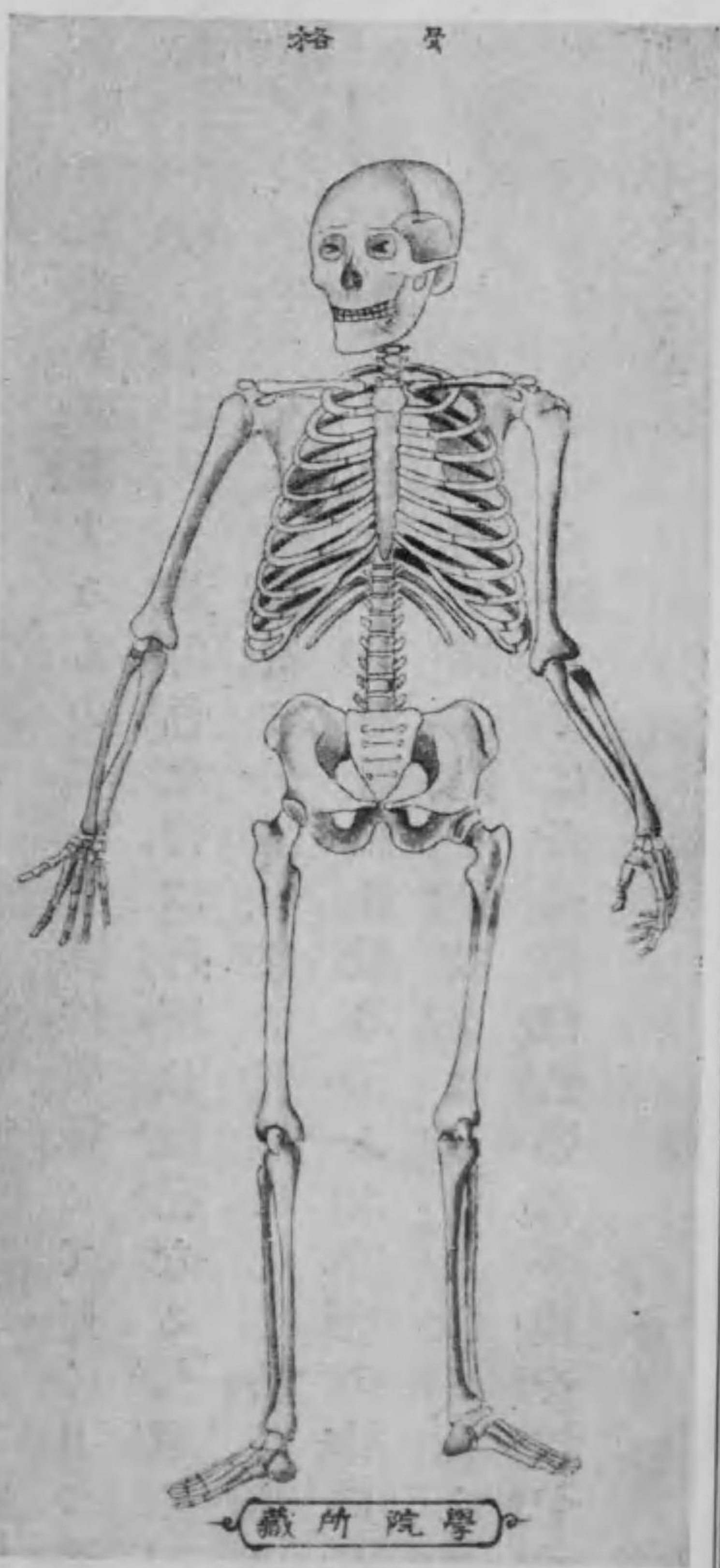
ハーベル氏小管は硬固質を穿通する無数の小管にして血管を通じ骨の表面或は髓腔に開口し経過間に在りては横管を以て互に交通す又細胞間質は透明無組織の物質にしてハーベル氏小管或は骨の表面又は髓腔面等を各々鞘状に圍擁して數層を

第一骨學

第一章 骨學總論

骨は身體の基礎を構成するものにして其性質極めて堅く且つ彈力を有し不朽の性を具へ黃白色を帶ぶ、外圍は緻密なる骨質の層を有す是を皮質又は緻密質と云ふ、内部は粗糙にして恰かも海綿の如く大小無數の腔あり是を海綿樣質と云ふ、又管狀の骨に在りては中心に大なる腔洞を存す是を髓腔又は髓管と云ふ、而して其未だ乾晒せざるものに在りては表面に白色強韌の膜を被包すべし是を骨膜と云ふ

第九圖



第一 骨 髓

骨髓は柔軟なる物質にして其色に依り赤色骨髓及び黄色骨髓の二種に區別し大人に在りては赤色骨髓は長骨の骨端・肋骨及び頭

蓋骨の海綿様質中に存し黄色骨髓は長骨の髓腔内を充填し皆な血管・神経に富む

第二 骨 膜

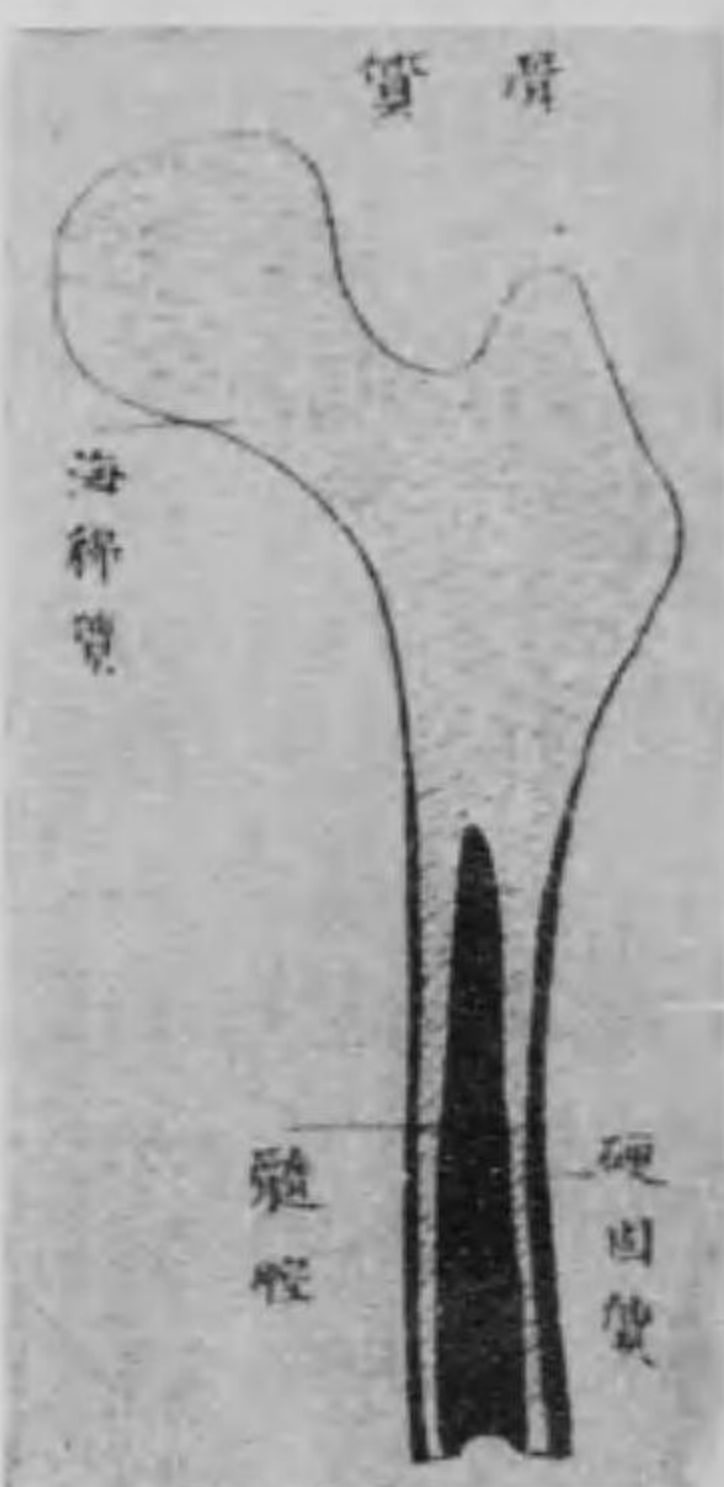
骨膜は關節面のみを除きて骨の表面を被包せる白色強靱の纖維膜にして血管・神経に富み骨の營養・新生及び再生に關し最も緊要なる關係を有するものにして骨が損傷を受け或は疾患に罹りし

際治療するは皆な此骨膜の作用に因るなり

第三 骨の主成分

骨の主成分は有機及び無機の

第十圖



二成分より成り有機成分即ち膠質は骨に弾力腐敗及び燃焼の性を與へ無機成分即ち石灰質は骨に硬固不朽及び不溶解の性を與ふるものなり而して老人の骨は硬固にして弾力に乏しく挫折し易きは有機成分の減少に因り小兒の骨の軟弱にして弾力に富み容易に挫折せず且つ骨折の癒着し易きは有機成分の多きに因るが故なり

第四 骨の發生及び長育

骨は始め軟骨及び結締組織より發生し身體の發育と共に軟骨の一部消滅し骨質是に代り漸次に硬固なる此變化を名けて化骨作用と云ひ其硬固を始むる處を化骨點と云ふ而して短骨に於ては通常一個なるも扁骨及び長骨に於ては數個の化骨點を有する

ものなり然れども骨端の關節面は永久に化骨せざるものなり

第五 軟骨

軟骨は帶黃白色にして大に彈力に富み鼻翼・耳殻・眼瞼・喉頭・氣管・肋骨端・其他總ての關節間に存在し常に骨端の衝突を防ぎ且つ關節の運動を補助するものなり

第六 骨の形狀

骨の形狀は種々あり之雖も先づ是を長骨・短骨・扁骨の三種に大別す
長骨は其縱徑は横徑より

第十圖 骨の形狀



長くして管状を爲すものを云ふ、即ち四肢骨の如きは是に屬し一體・兩端を有す
 短骨は圓形又は不等なる多くの面を有せるものを云ふ、脊椎・手根・足根等に存する諸骨は皆な是に屬す
 扁骨は板状にして二面を有するものを云ふ、頭蓋諸骨の如き即ち是に屬す

第七 骨數及び骨格等

骨の人體にあるものは其數通例二百餘個なり其互に連接して一體となりたるものは是れを骨格と云ひ其相連りて動く處を關節と名け又頭蓋骨の如く其相合して動かざる處を縫合と云ひ椎骨の如く軟骨によりて以て連接し僅かに動くを軟骨接合と云ふ

第二章 骨學各論

全身の骨格を軀幹骨及び四肢骨に大別す

第一 軀幹骨

軀幹骨を更に分ちて脊椎骨・胸骨・肋骨・舌骨及び頭蓋骨とす

甲 脊椎骨

脊椎骨は軀幹の後壁にして三十三個の椎骨相重疊して其基柱をなし一定の運動をなすものにして是を眞椎及び假椎に分つ

イ 眞椎

眞椎は各個に分離すべきものを云ひ其數二十四個にして上位の七個を頸椎とし次の十二個を背椎又は胸椎とし下方の五個を腰椎と云ふ亦運動に依り更に分ちて第一及び第二頸椎を廻旋椎と稱へ第三頸椎以下第五腰椎に至るを屈伸椎と總稱す

第二十圖
脊柱側面



(一) 屈伸椎

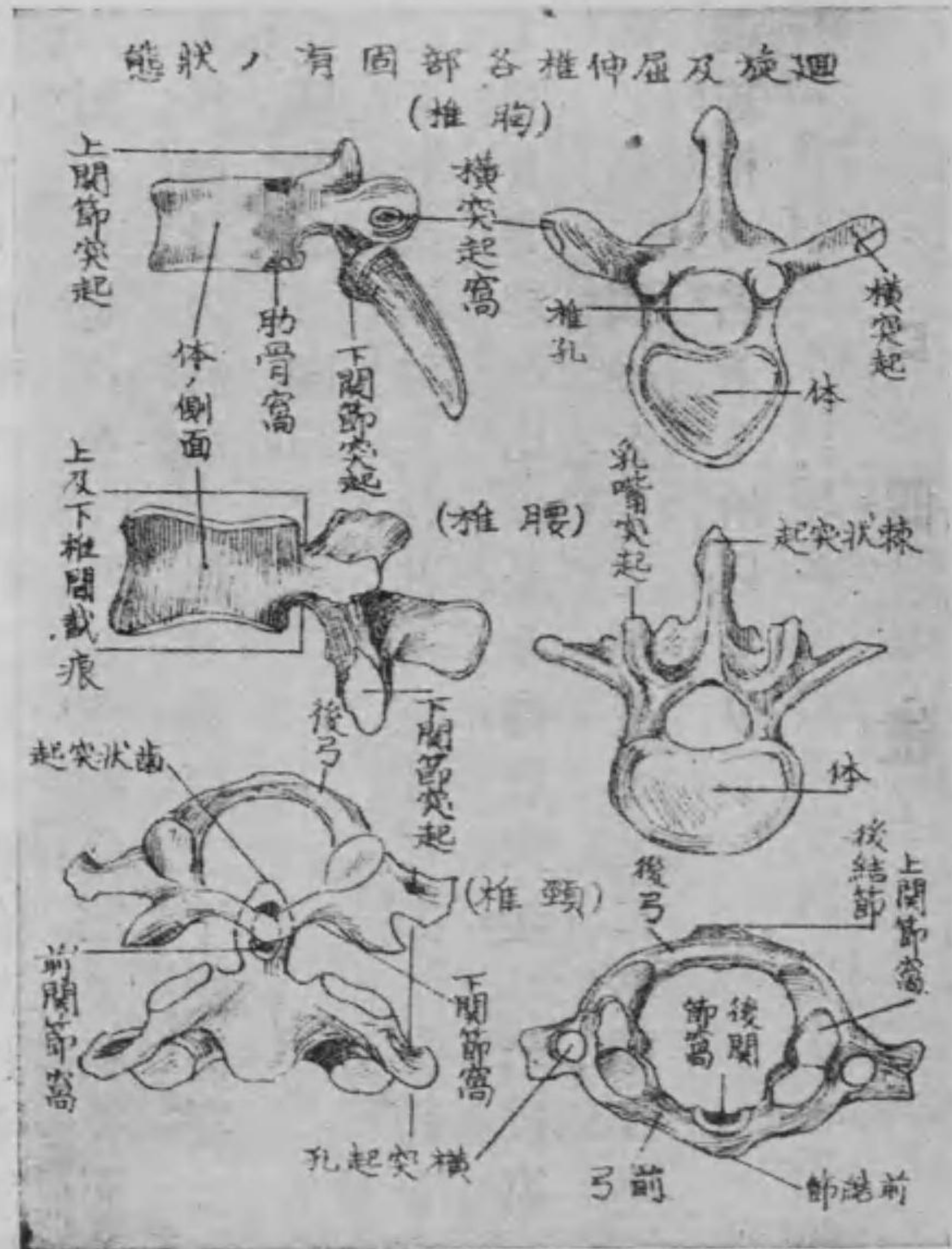
椎骨は體弓より成り體は弓の前大部にありて稍や扁圓なり弓は後半部を形づくり體の後側に癒着し其間に大なる一孔を呈す是を椎孔と云ふ各椎相互に重疊するときは此孔は連接して管を爲す是を脊髓管と云ふ即ち脊髓及び其被膜を包蔵するものなり又弓の體に癒着する部は弓根にして上下ともに截痕をなす上を上椎間截痕と云ひ下を下椎間截痕と稱し椎骨の互に疊積するに由りて下椎間截痕は下位にある椎骨の上椎間截痕と合して各椎間孔を形成す是れ脊髓神經及び脊髓動靜脈の通ずる處なり弓より出づる突起は其數七個ありて中央の癒合部より後方に突出する一個を棘狀突起とし弓根より左右に突出する二個を横突起と

し更に又弓根の上方及び下方に向つて上下各一對の突起を出す
 其上なるものを上關節突起と云ひ下なるものを下關節突起と云
 ふ此突起は上位の下關節突起と下位の上關節突起と相關節し上
 記の椎間截痕に依りて椎間孔をなす而して屈伸椎各部の特徴は
 上七個の頸椎に在りては横突起に横突起孔と名くる一孔を有し
 て血管の通路をなし其尖端は分岐す胸椎に在りては體の兩側に
 肋骨と關節する肋骨窩を具有し尙ほ横突起の尖端に横突起窩を
 現はす又腰椎に在りては横突起根の後側に副突起及び上關節突
 起の外側に乳嘴突起を有すべし

(二) 廻旋椎

第一頸椎(又載域)は脊椎骨の最も上位にありて他の椎骨と異な

第三十圖



り輪狀にして體を具有せず
 輪の前半を形成する部を前弓と云ひ後半を形成する部を後弓と

云ふ前弓の前面中央の結節を前結節と名け同内面中央の凹關節面を後關節窩と名く後弓は中央の後面に結節あり是を後結節と云ひ當に棘状突起の痕跡を露は

すものなり、側部は前後二弓の會合部に於て横突起を出し上下に關節面あり是れを上及び下關節窩と名く而して上關節窩は凹くして後頭骨の髁状突起と關節し下關節窩は平坦にして第二頸椎の上關節窩と關節す

第二頸椎(又樞軸)は其第二片にして一體を有し體より上方に向ひて圓き突起を出す是を齒状突起と名け第一頸椎の後關節窩と關節し第一頸椎をして頭蓋と共に右顧左眊の自由を得せしむ是れ廻旋椎の名ある所以なり

口 假 椎

假椎は幼時に在りては其數九個にして上の五個を薦骨椎と名け下の四個を尾閭骨椎と稱し成長の後には互に相癒着して薦骨尾閭

骨の二骨となり各々骨盤の後壁をなす

(一) 薦 骨

薦骨は脊柱の下部、第五腰椎の下に位して骨盤の後壁にあり形

第 十 四 圖



は三角にして恰かも鋏状の如し薦骨の上端を基底と云

ひ關節面を具へて第五腰椎と關節す其兩側は外方に擴がりて三角をなす是を薦骨翼と云ふ又關節面の後方に三角形の大孔を有す是れ薦骨管の上孔なり其兩側の上方へ突出する突起は上關節突起と名け第五腰椎の下關節突起と關節す
 尖端は小なる關節面を具へて尾閶骨に接す
 前面は陷凹し其面滑かにして四對の孔を有す是を前薦骨孔と云ひ各薦骨管と交通す又中部に四個の横線を現はし五骨の癒着したる痕跡を證せり
 後面は穹隆にして其面不等なり後面にも亦た四對の孔あり後薦骨孔と稱す其中央に縦徑に走る不等の線を假棘狀突起と云ひ此兩側の不等の縦線を假關節突起と名く此假關節突起の下端は角狀を爲して下方に向ひ薦骨管裂孔を左右より境す是を薦骨角と

云ふ又後薦骨孔の側部は肥大して相癒着す是を假横突起と云ひ凹凸不等なり而して假棘狀突起下端の一裂孔を薦骨管裂孔と云ひ靱帯を以て覆はる
 側部は其面粗糙にして上部は厚く下部に至るに従ひ狭少となる此面の上方は耳狀を呈せるを以て耳狀面と名け腸骨の耳狀面と相關節す

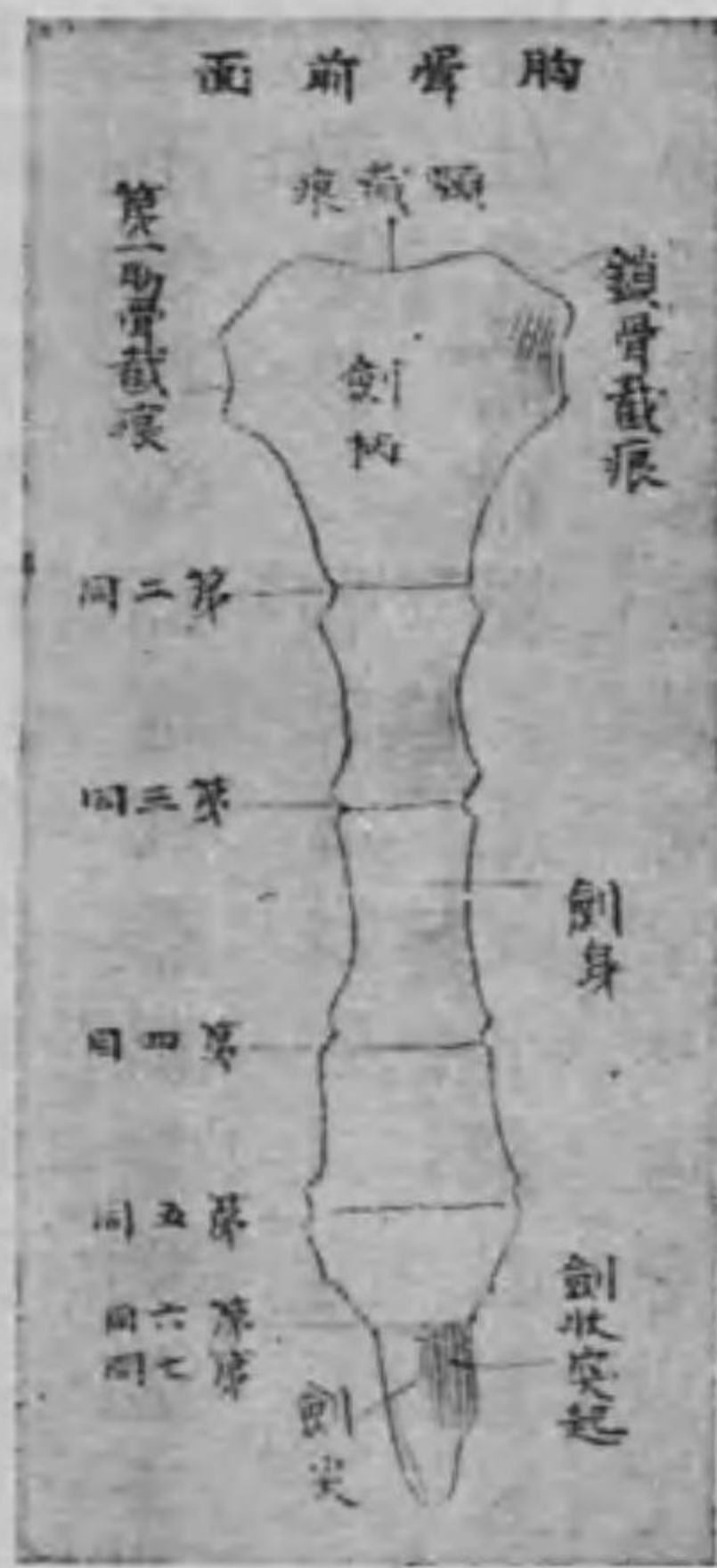
(二) 尾閶骨

尾閶骨は脊柱の最下端に在る上大下小なる一小骨にして素と四個の尾閶骨椎の癒着したるものなり第一椎の上面は薦骨の尖端と連接し上方に一對の突起を出す是を尾閶骨角と名く又第一椎の兩側は横突起の痕跡を呈す

乙 胸骨

胸骨は胸廓前壁の中央に位し、上は第二胸椎、下は第十胸椎の高さにあり、形状は長方形にして、上端は厚く、且つ廣く、下端は狭く、恰かも羅馬古代の劍に似たり。是れを區別して三とし、其上強部を劍柄、又手柄、中大部を體、又劍身、下小部を劍狀突起、又劍尖と云ひ、此三部は皆な軟骨に由りて、各々相癒着す、而して劍狀突起は鈍圓、或は

第五十圖



銳尖に分れ、稀に孔を有するものあり、聯接は七個の肋軟骨と鎖骨にして、前後の二面と側縁を有す。上部は擴張して三個の截

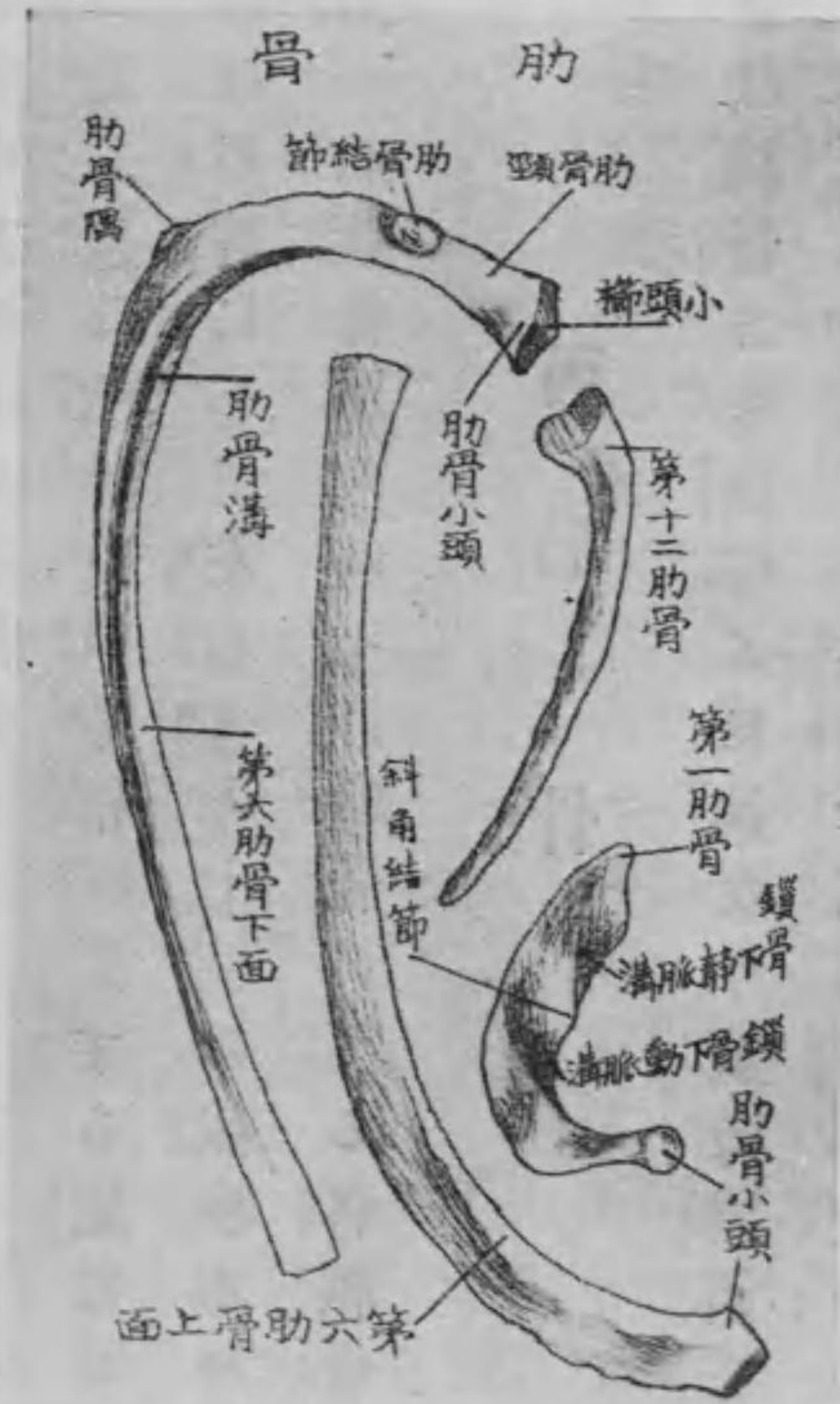
痕あり、中央のものを頸截痕と云ひ、其兩側の大なるものを鎖骨截痕と云ふ。是れ鎖骨の内端、相關節する處なり。側縁は不等にして、左右各々七個の截痕あり、是れを肋骨截痕と名け、第一肋軟骨より第七肋軟骨に至る各軟骨の前端と相接合す。

丙 肋骨

肋骨は胸骨と全胸椎とに連なり、胸の周側を圍みて、胸廓壁を爲すものにして、其數左右各々十二個あり、上のものを第一肋骨と云ひ、以下順次に是を數ふ、各個の形状は細長扁平にして、弓形に彎曲し、各片共に一體、兩端を有す。上七對の肋骨は各肋軟骨を以て、前端胸骨に連なれ、さも次位の三對は肋軟骨を以て、共に第七肋軟骨に連繫す、而して其胸骨に達す。

る七對を眞肋骨と云ひ以下五對を假肋骨と稱すれども最下の第十一第十二對は最も短かくして其前端は全然遊離す故に假肋骨中特に此二對を浮肋骨と云へり
 前端は體の續きにして少しく廣く且つ扁平なり肋軟骨と結合す

圖六十第



後端は小頭と云ひ少しく膨大す此末端を以て各胸椎體兩側の肋骨窩と關節す呼吸の際に胸廓の運動するは常に此關節に於て動

くものなり

體は細長にして扁平なり弓の如く彎曲し後端に近き處著しく屈曲す是れを肋骨隅とす、小頭より僅か距たりて一の小結節あり肋骨結節と云ひ胸椎の横突起窩に關節す(但し終末の二肋は是を除く)

特に第一肋骨は鎌状にして幅廣く體の上面中央に淺溝を呈す、鎖骨下動脈溝と云ふ是れ鎖骨下動脈の通ずる處にして其前方上縁に近く一結節あり斜角結節と云ひ前斜角筋の附着する處なり

肋軟骨

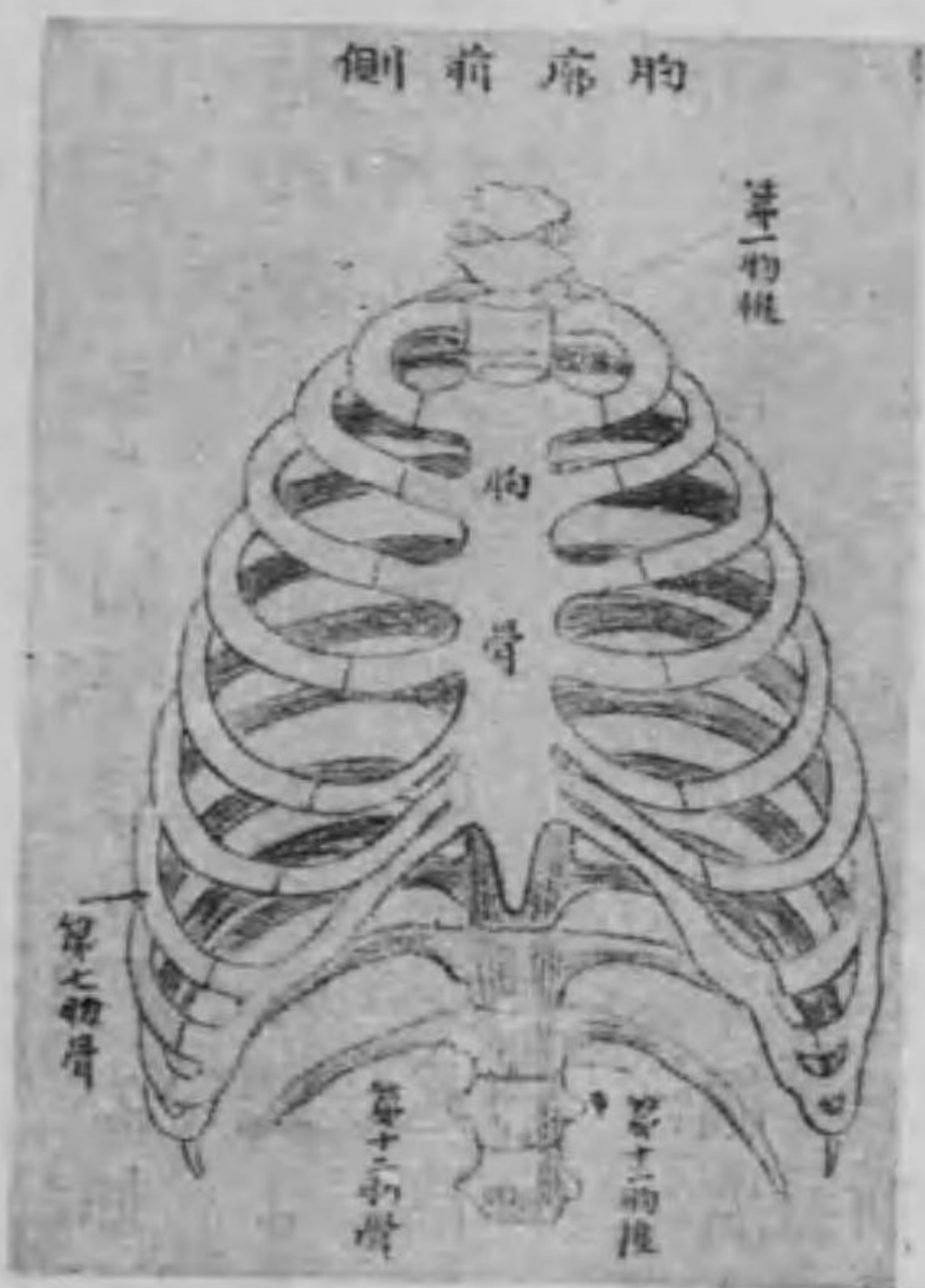
肋軟骨は肋骨と同じく長扁平にして彈力に富み第一より第七に至るまでは漸々其長さを増加し以下第十二肋骨まで再び短縮す

而して胸骨と共に胸廓の前壁をなし肋骨の前端と接續し以て肋骨と胸骨との結合の媒介をなす

胸 廓

胸廓は頸部の下際、軀幹の中央にして形状は畧ぼ西洋の樽に似たる形を爲し脊柱の兩側に於ては肋骨隅の強く後方に彎曲せるが故に各一溝を造る是れを肺溝と稱し肺臓の一部を容る而して其構造は胸骨全胸椎全肋骨及び肋軟骨の相結合關節したる骨腔に

第七十圖



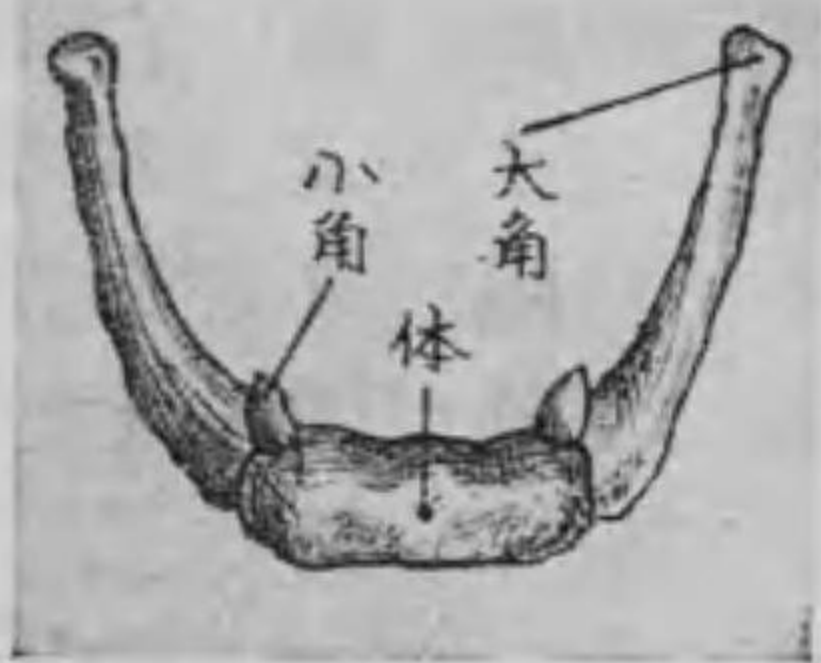
して而かも著明なる境界を存せず、雖も通常是れを前壁後壁兩側壁に區別す

前壁は胸骨肋軟骨及び肋骨前端より成り其長さは後壁及び側壁よりも遙かに短かく、後壁は全胸椎及び肋骨後端より成り側壁よりも少しく短かし、側壁は肋骨の體部より成り強く側方に穹隆して最も長し但し後壁とは肋骨隅を以て境界とす

上口は狭くして横卵圓形なり第一胸椎左右の第一肋骨及び胸骨の上端より圍繞せられ、下口は廣くして其形状は不齊なり第十二胸椎左右の第十二肋骨左右の假肋骨に屬する肋軟骨及び胸骨の劍狀突起より圍繞せらる而して此下口は横隔膜を以て是れを閉ざし腹腔と隔絶す

圖八十第

舌骨前部



丁 舌骨

舌骨は前頸部喉頭の上方に於て舌根にあり馬蹄鐵形に彎曲したる小骨にして是れを體大角及び小角に分つ體は中央の稍や大なる部に於て大角は體の兩端より後方に突出し小角は圓錐形の軟骨にして體の大角との間より出づ又此骨は骨格として他に聯接する處なく唯だ僅かに靱帶によりて顛顚骨に連なるものなり

戊 頭蓋骨

頭蓋骨は軀幹の最も上部にあり神經系の上端部即ち腦髓及び感覺器并に消化器の初部の在る處にして數多の骨片の縫合に因り

て腦髓を擁護する骨囊を構成する部分を頭蓋骨と云ひ其前下方に於て感覺器及び消化器の初部を容るべき腔窩の存する部分を顔面頭蓋と云ふ共に樞要のものなり

イ 腦頭蓋

腦頭蓋を構成するものは八個の頭蓋骨にして後頭骨一個、蝸蝶骨一個、篩骨一個、前頭骨一個、顛顚骨二個、顛顚骨二個にして頭蓋骨及び頭蓋底の二部に分ち其骨多くは扁平にして内面は凹陥、外面は凸隆す

(一) 後頭骨

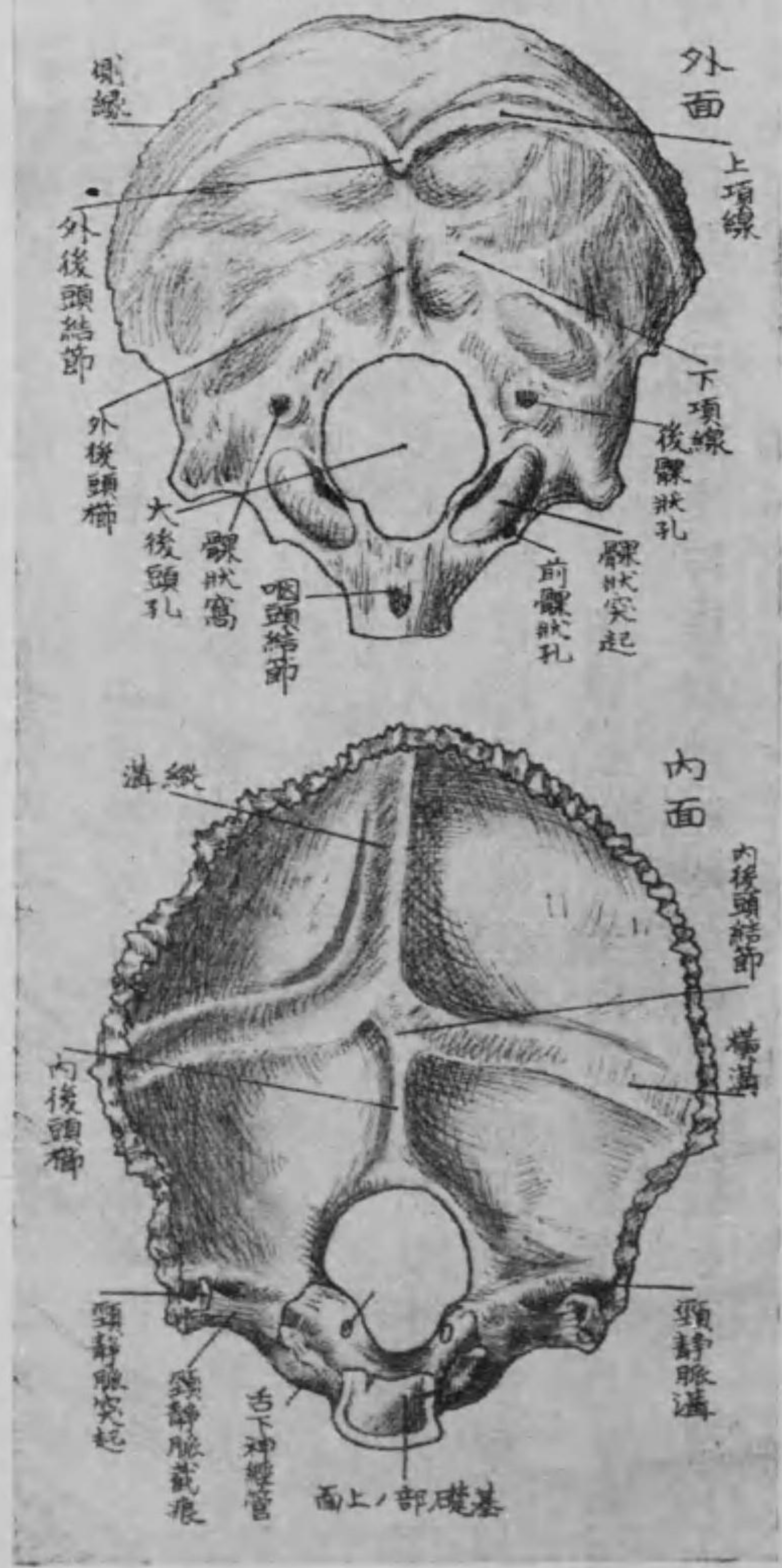
後頭骨は頭蓋の後下部を形成し頭蓋と脊柱とを結合するものに

して形も稍や柏葉に似たり、其聯接は顛顛骨・顛項骨・蝴蝶骨及び第一頸椎なり、是れを鱗狀部・基礎部及び左右の關節部の三部に區別す而して此骨の前下部に大なる一孔あり、大後頭孔と云ふ、此孔は頭蓋腔と脊髓管との交通孔にして、延髓動靜脈及び神經等を交通せしむ

鱗狀部は後部の大部を占め鱗狀にして、外凸隆、内凹陷の二面及び側縁を有す

外面の上半部は滑澤にして、下半部は不等なり、其中央に隆起あり、外後頭結節と稱す、而して此結節より下方に走れる縦線あり、外後頭櫛又は中項線と云ふ、又外後頭結節の左右に在る横線は上項線と名け、此下部に當り殆んど、上項線を並行に走る線あり、下項線と云ふ

第十圖
後頭骨



内面は滑澤にして中央の結節を内後頭結節と稱し、夫れより上下左右に向て走れる隆線又は溝を見る、其左右に走れるは横溝にし

て上部の縦溝は是を矢状溝と稱し下部の縦線は内後頭櫛と名く
 側縁は不等の弓形にして上大部は顛項骨の後縁と接合し其状鋸
 齒の相吻合したるが如きを以て鋸齒状縫合と云ふ下小部は鈍縁
 にして顛顛骨の乳様部に接合す
 基礎部は方形にして大後頭孔の前部なり尖端は稍や方形にして
 軟骨を以て蝴蝶骨の體に接合し斜臺をなす下面は不等にして其
 中央に一結節あり咽頭結節と云ふ
 両側の關節部は不齊形にして大後頭孔の左右にあり上下の二面
 及び側縁を有し上面は側縁に近く一の截痕を現はす是を頸靜脈
 截痕と云ひ顛顛骨岩様部の頸靜脈窩と共に一孔を作る是を頸靜
 脈孔と云ひ舌咽神經迷走神經副神經及び内頸靜脈を通ず而して
 頸靜脈截痕の外端には小突起ありて上方に向ふ是を頸靜脈突起

と云ふ又下面は大後頭孔の前側部に突起あり髁状突起と云ひ第
 一頸椎と關節す此突起の後方にある凹窩は髁状窩と稱し屢々小
 孔を見る是を後髁状孔と云ふ又髁状突起の前外方に一孔あり前
 髁状孔と名く是れ舌下神經管の前端なり

(二) 蝴蝶骨或は楔状骨

蝴蝶骨は頭蓋底の中央にあり其形状蝴蝶の翅を張るに似たり其
 联接は全頭蓋骨と顛骨口蓋骨上顎骨及び鋤骨の四顔面骨にし
 て頭蓋の基底を作る是を一體大小の二翼及び翼状突起の四部に
 區別す
 體は中央部にして骰子形なり即ち上下前後及び左右の六面を有
 す上面は中央凹陷し恰かも鞍状に似たるを以て是を土耳其鞍と

ご合して翼狀口蓋管を造り翼狀口蓋動靜脈及び口蓋神經を通ず
 又翼狀突起の起根には一小管ありウイデアン氏管と云ひウイデア
 アン氏動靜脈并に淺大及び深大岩様部神經を通ず

(三) 篩骨

篩骨は蝴蝶骨の前部に於て頭蓋底并に左右兩眼窩の間に位し前
 頭骨・蝶骨・上顎骨・鼻骨・涙骨・鋤骨及び下甲介骨と相連接す形状は
 骰子形にして是を地平板・鉛直板及び左右の側部に區別す
 地平板又は篩板は長方形にして前頭骨の眼窩部と蝴蝶骨體との
 間に箱入し數多の小孔を有し恰かも篩狀を爲す故に是を篩孔と
 名く即ち嗅神經の通ずる處なり又板の中央に櫛狀の突起あり鷄
 冠と云ふ其前方前頭骨に接する部に於て一小孔あり盲孔と稱し

圖一十二第



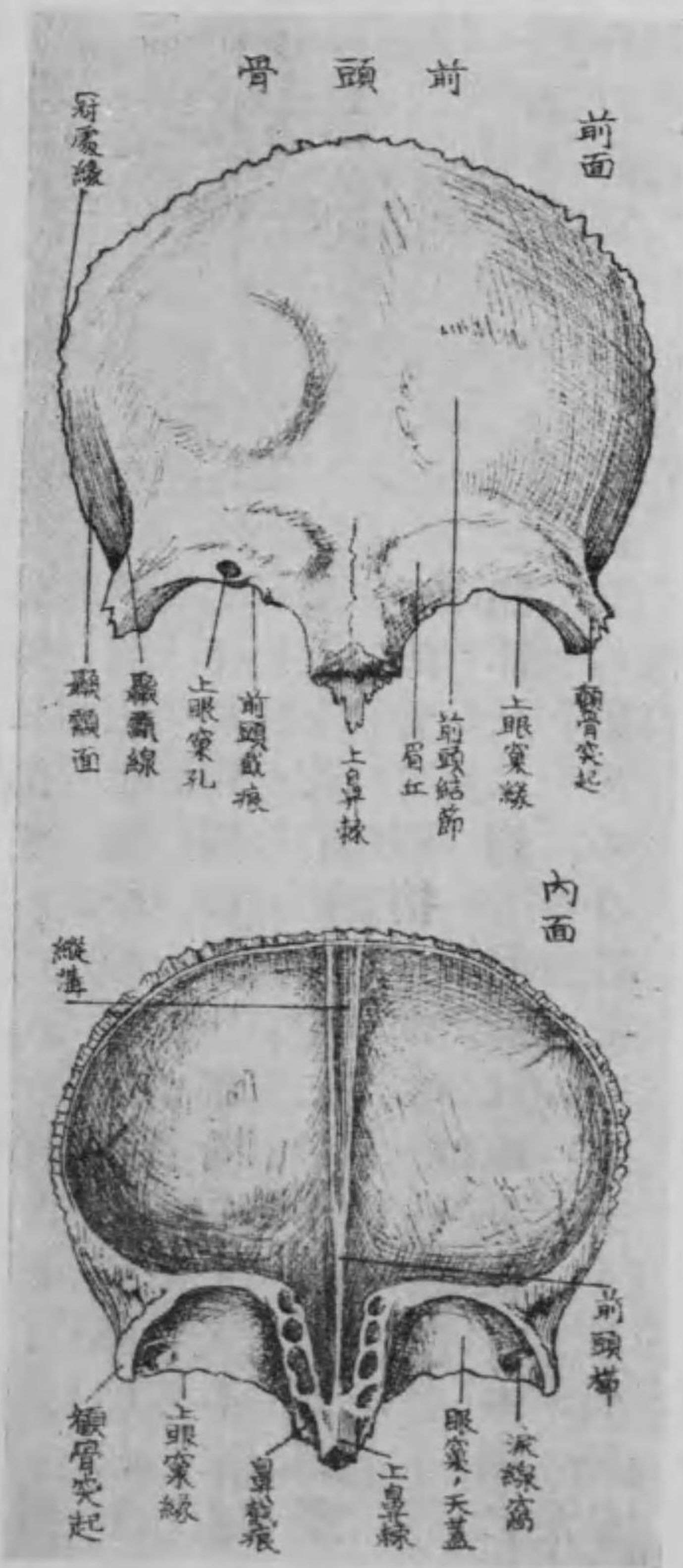
鼻腔に通ず
 鉛直板は地平板の下面より鼻腔に下垂
 して鼻中隔の前上部を爲し是れに由り
 鼻腔を左右の二腔に分ち鼻骨・蝴蝶骨及
 び鋤骨と連接す

側部又は篩骨回廊は地平板の兩側に懸
 り内外の二壁より成り其間に數多の小腔を有す是を篩骨蜂窩と
 云ひ其外壁は眼窩内壁の大部をなし又内壁は鼻腔の外壁をなす
 而して茲に上下二個の膨隆を呈す其上を上甲介其下を中甲介と
 云ふ

(四) 前頭骨

前頭骨は頭蓋の前面を圍み其形ち帆立貝の如くにして前縁は上顎骨・鼻骨・涙骨・顴骨の四顔面骨と、後縁は顛頂骨・蝶骨・篩骨の三頭蓋骨に聯接す是を分ちて前額部・眼窠部及び鼻部とす
前額部は内外の二面及び一縁を有す

圖二十二第



外面即ち前面は凸隆にして滑澤なり、稍や中央の兩側に大なる結節あり前頭結節と名け其下際に半月形の鈍隆起あり眉弓と名く眉弓の下際に眼窠部と境界せらるゝ縁あり是を上眼窠縁と云ふ其部に二個の截痕或は孔あり其外方にあるを上眼窠孔或は截痕と名け内方の淺きものを前頭截痕と名く前者は上眼窠動靜脈及び同名神経を通じ後者は鼻前頭動脈及び前頭神経を通ず内面即ち脳面は凹陥にして指狀壓痕及び腦隆起を現はし中央を矢狀徑に走る隆線を前頭櫛と云ふ縁は上部は弓形の鋸齒状を有し顛頂骨と冠處縫合を形造り下部は蝴蝶骨の大翼と縫合す、上眼窠縁の外側に於て顴骨と縫合する處を顴骨突起と云ふ
眼窠部は甚だ薄く上面は腦面にして著明なる指狀壓痕及び腦隆

起を呈す下面即ち眼窠面は凹陥にして滑澤なり、顴骨突起に近く
淺窩あり是を涙腺窩と稱し、涙腺を容るゝ處なり
鼻部は两眼窠部の間及び鼻骨の後方にして其端鋸齒狀の縁をな
す是を鼻截痕と云ふ

(五) 顛顛骨

顛顛骨は頭蓋の外下壁にして形状は不齊なり、其联接は蝴蝶骨・顛
頂骨・後頭骨・顴骨及び下顎骨の五骨なり是を分ちて鱗様部・岩様部
及び乳様部の三部とす
鱗様部は魚鱗の如く扁平にして外面は滑澤なり、前下部より前方
に向て長突起を出す是を顴骨突起と稱し、其端は顴骨の顛顛突起
と联接して弓形を成す是を顴骨弓と云ふ、其起根部は二脚に分れ

第三十二圖 顛顛骨



其脚間に一窩を造る是を下顎關節窩と稱し、下顎骨の髁狀突起と
關節す而して其一脚は外聽道孔の上際に、他の一脚は内下方に走
りて窩の前方に一結節を現はす是を關節結節と云ひ、開口すれば

下顎骨の髁
狀突起は此
上に乗る
内面は凹陥
して指狀壓
痕・腦隆起及
び硬腦膜動
脈を通ずる
溝を現はす

乳様部は稍や圓錐形にして鱗様部の後下部にあり、外面は不等にして下方に乳状の突起あり是を乳嘴突起と名く其内側に深溝あり乳嘴截痕と云ひ其内方の淺溝を後頭動脈溝と云ふ、又乳嘴突起の實質は海綿状にして大小不同の數腔に分る是を乳嘴蜂窠と稱し鼓室に交通す

内面は凹くして深溝ありS字状窩と稱す

縁の上部は顛頂骨の後下隅と下部は後頭骨と各接合す

岩様部は本骨中最も複雑なる處にして聽器を藏し其形も三角錐體に似たり分ちて基底・尖端・三面・三縁とす

基底は顛骨突起と乳嘴突起との間に於て外聽道孔所謂外耳門のある處なり深く内聽道に通ず而して外聽道の最下壁をなすを名けて鼓膜部と稱す即ち後方は乳嘴突起前下方は下顎關節窩と境

第二十四圖



通ず其後外方に前庭導水管孔と稱する裂孔あり内耳の前庭導水管の通路なり

前面は其面前上外方に傾き上縁に由て後面と境し前下部の鱗様部内面に移る處に小破裂あり岩鱗破裂と云ふ、又尖端に近く凹窩

し茲に破裂を現はす、甲を鼓乳破裂と云ひ乙をグラツセル氏破裂と云ふ、共に鼓室に交通すべし

尖端は内方蝴蝶骨體と相對し一の孔を現はす是れ内頸動脈管の内孔なり、後面は鉛直にして中央に大孔あり是れ内耳門にして内聽道孔と名け内聽道に通じ聽神經・顏面神經及び血管を

あり三叉神經節壓痕云ひ三叉神經半月狀節の乗る處なり
 下面は不等にして中央に大なる一孔あり内頸動脈管の外孔なり
 内頸動脈管の内孔と通ず此後外方に細長の突起あり莖狀突起と
 云ふ其後外側の一孔を莖乳孔と名け顔面神経の出づる處なり又
 内頸動脈管外の後側に大なる深窩あり頸靜脈窩と云ひ後頭骨關
 節部の頸靜脈截痕と合して頸靜脈孔を造る而して頸靜脈窩の内
 前方に亦小陷部あり是を蝸牛殼導水管孔と云ふ

(六) 顛頂骨

顛頂骨は前頭骨と後頭骨との間にありて頭蓋の上側壁を形成す
 其形扁平方形にして前頭骨後頭骨顛顛骨及び蝴蝶骨の四頭蓋
 骨と聯接す是を區別して内外の二面及び四縁四隅とす

第二十五圖



明にして即ち化石點を徴するものなり其下部に弓状を爲せる幽
 微の二縁あり上及び下顛顛線と云ひ又上縁に近く小孔あり顛頂
 孔と云ふ
 内面は凹にして亦滑澤なり指狀壓痕・腦隆起及び硬腦膜動脈溝あ

外面は凸に
 して滑澤な
 り中央に一
 の豊隆あり
 是を顛頂結
 節と云ふ此
 結節は若年
 には殊に著

り、又上縁に沿ふて淺き半縱溝ありて走る此半縱溝は左右の顱頂骨相合して一の縱溝を構成す是を矢狀溝と云ふ此矢狀溝は長くして顱頂骨を外れ尙ほ前後に延長して前は前頭骨後は後頭骨に移行す

上縁は左右相吻合して鋸齒狀縫合をなす是を矢狀縫合と云ふ下縁は薄くして廣く顱骨の鱗部と鱗狀縫合を營む前縁は前頭骨の上縁と鋸齒狀縫合をなす是を冠處縫合と云ふ後縁は後頭骨の顱頂縁と三角縫合をなす是を後頭縫合と云ふ而して隅は前頭隅即ち前上隅蝴蝶隅即ち前下隅後頭隅即ち後上隅乳様隅即ち後下隅なり

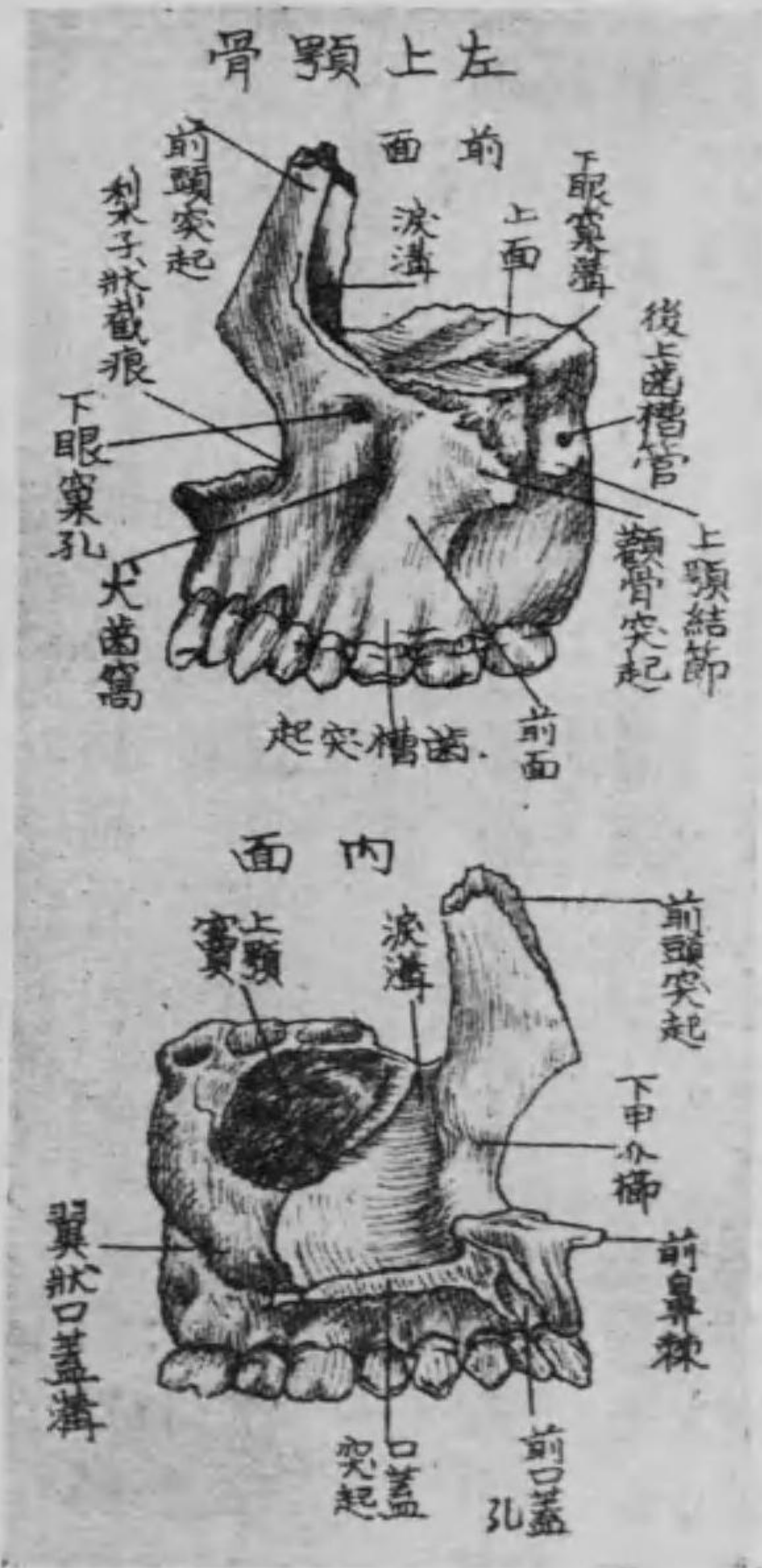
口 顔面頭蓋

顔面頭蓋は上顎骨二個、口蓋骨二個、涙骨二個、下甲介骨二個、鼻骨二個、顴骨二個、鋤骨一個、下顎骨一個の十四骨より成り種々の腔竅を構成するものなり

(一) 上顎骨

上顎骨は顔面の中央にありて左右相接合す、形状は不齊にして其联接は蝴蝶骨前頭骨及び篩骨の三頭蓋骨と鼻骨、顴骨、涙骨、鋤骨、口蓋骨及び下甲介骨の六顔面骨なり是を一體及び前頭骨、齒槽口蓋の四突起に區別す
體は楔狀にして四壁を有する處の空洞骨なり其壁薄く此空洞を上顎竇又はハイモル氏洞と云ふ
前面は穹隆にして上縁を下眼窠縁と云ひ此縁の下方に小孔あり

圖六十二第



下眼窩孔に云
ひ眼窩に通ず
此孔の直下に
凹窩あり犬齒
窩に云ふ又前
面には其内縁
に鋭利なる截

痕あり梨子狀截痕に名け前鼻孔の側縁をなすものなり
後面は少しく穹隆し中央に粗糙なる部あり是を上頤結節に名く
茲に二三の小孔あり後上齒槽孔に云ふ此孔は管となりて骨中に
穿入し下りて齒槽に達し同名神經及び血管を通ず
内面即ち鼻腔面は其後上部に一大孔あり是を上頤竇孔に云ふ此

圖七十二第



孔の前方に深溝あり涙溝に云ふ下甲介骨及び涙骨との聯接によ
り鼻涙管を構成す又上頤竇の後下方に縦徑の淺溝あり翼狀口蓋
溝に云ひ蝴蝶骨の翼狀突起及び口蓋骨と合して翼狀口蓋管を造
る而して其下口を後口蓋孔に云ふ
上面即ち眼窩面は滑澤にして不齊三角形をなし其中央に一溝あ
り下眼窩溝に云ふ此溝の前端は骨質中に穿入して下眼窩管を作
り下眼窩孔に終る管中更に一二の小管を
生ず是を前上齒槽管と稱し骨中を穿ちて
齒槽に達し同名神經及び血管を通ず
前頭突起は長扁平にして體の上内隅より
突出し上端は前頭骨の鼻部に接す
額骨突起は短にして體の上外方に突出し

顚骨と聯接す
 齒槽突起は體の下部より下方に向て突出し八個の齒根を受容す
 口蓋突起は體の内面の下部より内方に向て水平に突出し上面は
 鼻腔底となり下面は硬口蓋の前大部を爲し口腔の上壁をなす、内
 縁は對側の同名縁と縫合す、而して其後縁は口蓋骨の地平部と接
 合す

(二) 口蓋骨

口蓋骨は鼻腔の後側壁に位し口腔の天蓋を爲す、其形狀はr字形
 にして聯接は蝴蝶骨篩骨の二頭蓋骨と上顎骨下甲介骨及び鋤骨
 の三顔面骨にして是を地平部及び鉛直部に分つ、然れども離解し
 たる骨に非らざれば充分其形を検し難し

地平部は方形板にして硬口蓋の後部を形成し上面は鼻腔底の後
 部をなし下面は口蓋の後部を爲す、而して前縁は上顎骨口蓋突起
 の後縁と接合し後縁は遊離して硬口蓋の後縁をなし内縁は左右
 互に縫合す

又地平部と鉛直部との間より出づる錐體突起は三角形にして後
 下方に向ひ蝴蝶骨翼狀突起の兩板間に箝入す、其前側に一孔あり
 後口蓋孔又は翼狀口蓋孔と稱す

鉛直部は扁平長方形にして内面は鼻腔の
 後側壁をなし此面に二個の並行に走る隆
 起あり上のものを篩骨櫛と云ひ下のもの
 を下甲介櫛と云ふ、外面は後方に一縱溝あ
 り翼狀口蓋溝と稱し蝴蝶骨翼狀突起及び



第二十八圖

上顎骨體と合して翼狀口蓋管を構成す、又前縁は薄く上顎骨鼻腔の後面に連接し、後縁は翼狀突起の前縁に接合す、上縁は分れて前後の二突起となる、即ち前方を眼窩突起と云ひ、後方を蝴蝶突起と云ふ、而して二突起の間は截痕を呈す、是を口蓋截痕と云ふ。

(三) 涙骨

涙骨は眼窩内壁の前部に位し、甚だ菲薄なり、形状は扁平形にして頗る爪甲に類す。外面は眼窩に面し、其内壁前部の一部をなし、茲に深溝を現はす、是を涙溝と名く、内面は粗糙にして篩骨蜂窠の前部を掩ふ。前縁は上顎骨前頭突起の後縁と聯り、後縁は篩骨篩板の前縁と聯接す、上縁は前頭骨眼窩部内縁の前部と聯り、下縁は即ち下端にし

て下甲介骨に連接す

(四) 下甲介骨

下甲介骨は鼻腔の外側壁より鼻腔内に懸垂し、形状は貝殻に似たる小骨なり。内面は凸隆して鼻中隔に相對し、外面は凹陷にして鼻腔の側壁に向ふ。中央部は上顎骨涙骨及び篩骨の三突起に由りて上顎骨涙骨及び篩骨に連接す。

第二十九圖



(五) 鼻骨

鼻骨は顔面の上中央部にして、左右上顎骨前頭突起の間に位し、形

狀は畧ぼ扁平方形なり然れども上部は狹厚にして下部は廣薄なり其联接は前頭骨上顎骨及び篩骨にして内縁は對側の同名骨と相合す

(六) 顴骨

顴骨は上顎骨の上外側に位し形状は稍や菱形に近し而して前頭骨蝴蝶骨顴骨及び上顎骨に联接し三面三突起を有す
眼窩面は陷凹にして滑澤なり半月形をなして眼窩の外壁及び底の一部を爲し前縁即ち下眼窩縁を以て顔面と境す此面に一個の小孔あり(時として二個) 顴骨眼窩孔と云ひ、顴骨管となりて骨中に入り二枝に分れて一は顴骨顴管に開き他の一は顴骨顔面に開く而して前者は眼窩神経の顴管を通じ後者は同神経の顔面枝

第三十圖



を通ず

顴管は深く陷凹して顴窩に向ひ此面の小孔を顴骨顴管と云ふ
顔面は豊隆にして頬の高部をなす此面の小孔を顴骨顔面管と云ふ
前頭骨突起は上隅より突出し粗糙縁を以

て前頭骨の顴骨突起及び蝴蝶骨の大翼に接合す

顴骨突起は後隅より突出し顴骨の顴骨突起と聯りて共に顴骨

弓を構成す

上顎突起は内方に向ひ三角形の鋸齒面を以て上顎骨の顴骨突起に接合すべし

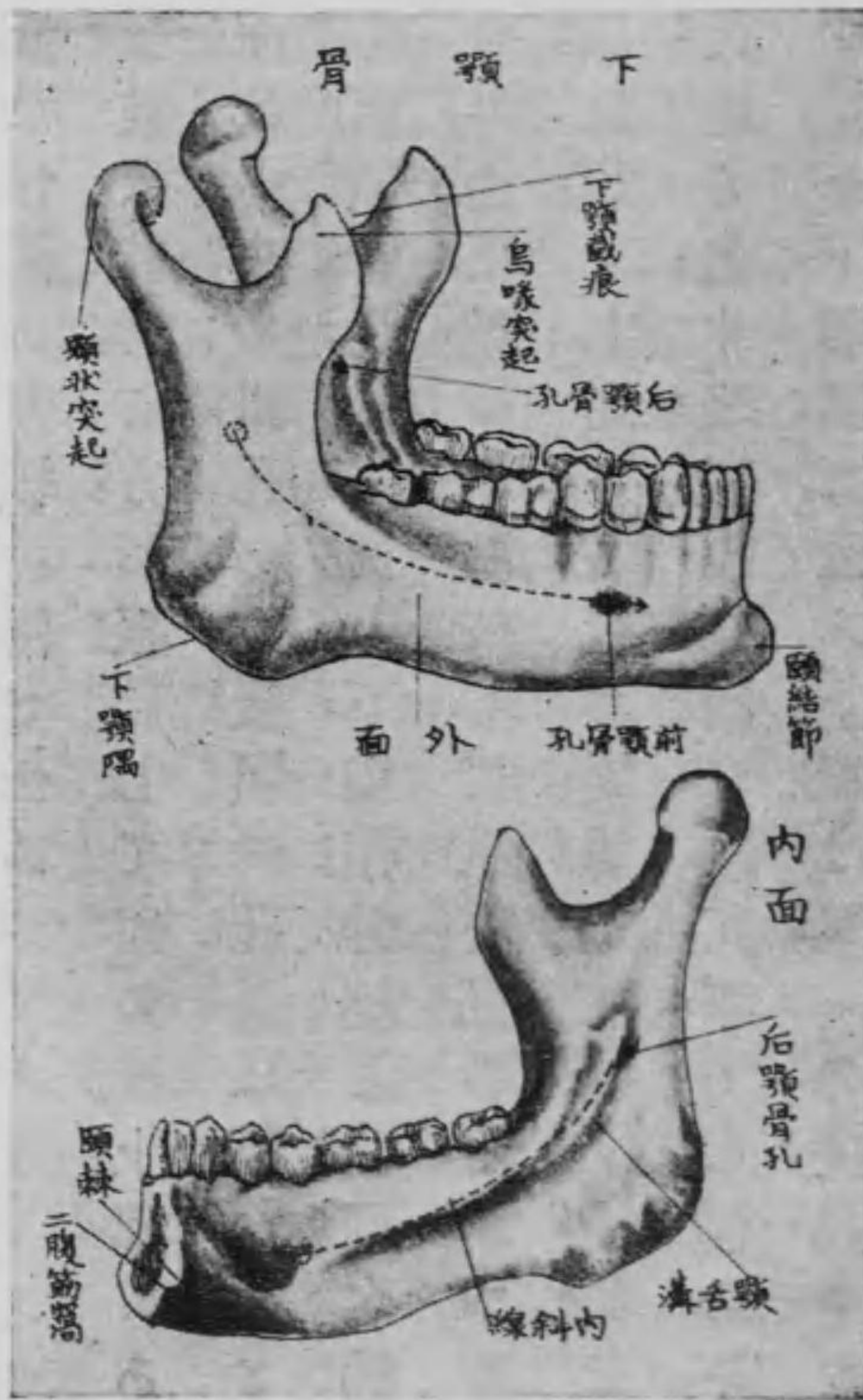
(七) 鋤骨

鋤骨は鉛直に鼻腔の中央にありて其中隔をなす形状は稍や菱形にして菲薄なり而して蝴蝶骨篩骨口蓋骨及び上顎骨の四骨と接合す又其左右側面は稍や平滑にして不齊の溝状を呈し上縁は左右の二部に分れて鋤骨翼を成し其間に蝴蝶骨嘴を挟む

(八) 下顎骨

下顎骨は顔面の最下部にあり形ちは馬蹄鐵状にして其聯接は顛顛骨と可動關節を營む是を區別して一體二枝とす體は弓形にして内外の二面及び上下の兩縁を具ふ而して上縁には十六個の齒牙を保有し下縁は圓滑にして皮下に位す

第三十三圖



外面は豊隆にして中央に結節あり頤結節と云ふ其外側の第二小臼齒の下部に一孔あり前顎骨孔又は頤孔と名く是れ齒槽管に通ずるものなり孔の下部より後外方に走る線あり外斜線と云ふ内面は陥凹にして中央に一の棘状の突起あり是を頤棘と名く其兩側に指壓したるが如き淺窩あり是を二腹筋窩と稱し二腹筋の停止部なり此部より後上方に走る銳線あり内斜線と云ふ又此

下際に淺溝あり顎舌溝と云ふ
 下顎枝は其形ち方形板にして體の後上部にあり二面三縁を具ふ
 内面は中央に斜孔あり後顎骨孔又は下顎孔と云ふ是れ齒槽管を
 經て前顎骨孔に交通し下齒槽神經及び同名動靜脈を通ずるもの
 なり外面は稍や粗糙にして咀嚼筋の附着する處となる
 前縁は短くして下方は外斜線に移行し上端は突起をなす是を鳥
 喙突起と名く後縁は圓滑にして下方は體の下縁と會して鈍角を
 なす是を下顎隅と云ふ上端は又一の突起をなす是を髁狀突起と
 稱し顛顚骨の下顎關節窩と關節す而して此兩突起の間には一の
 大なる半月狀の截痕を呈す是を下顎截痕と云ふ

○ 腦頭蓋の縫合及び百會

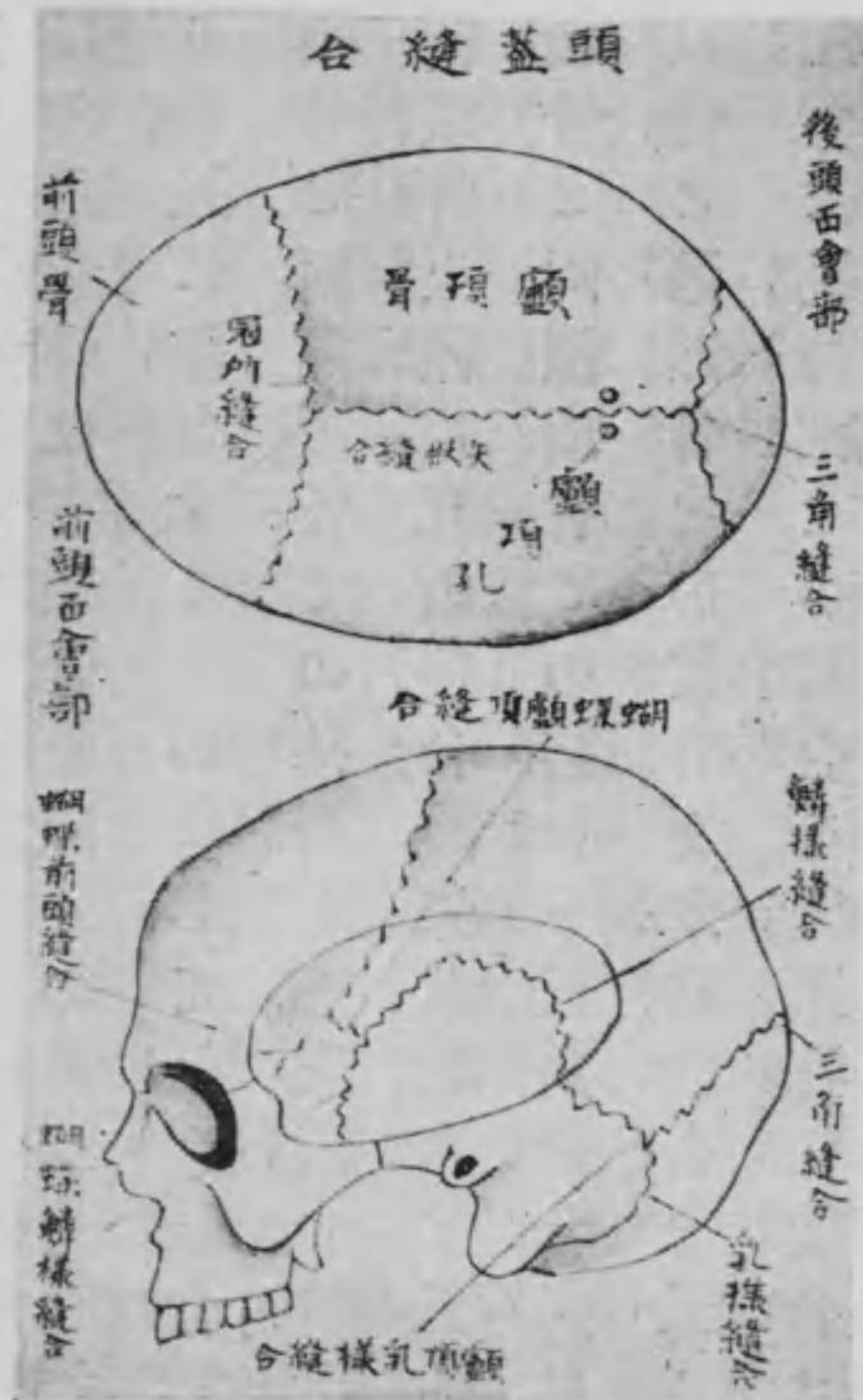
此條下に於ては頭蓋諸骨の相互の關係を明かにし且つ許多の骨
 縁が各其一部を以て構成せる處の緊要なる部位を講ぜんとす素
 より重複する處あるべきが故に前後對照すべし

縫合

凡ての頭蓋骨は下顎骨を除くの外は皆な鋸齒狀又は鱗狀の縁に
 より相互に結合するものにして是を縫合と云ふ
 前頭骨と兩顛顚骨との接合を冠處縫合と云ふ
 兩顛顚骨上縁相互の接合を矢狀縫合と云ふ
 後頭骨と兩顛顚骨との接合を三角縫合又はハ狀縫合と云ふ
 顛顚骨と顛顚骨との接合を鱗狀縫合と云ふ
 後頭骨と乳樣部の接合を後頭乳樣縫合と云ふ

圖二十三第

合縫蓋頭



接合を蝴蝶鱗様縫合と云ひ、大翼と前頭骨との接合を蝴蝶前頭縫合と云ふ

百會或は顱門

初生兒に在りては骨の發育未だ完備せざるを以て顱頂骨の四隅

その他骨との接合すべき處に空隙を存し單に柔軟なる結締組織のみに由り被はれ内部にある大脳動脈枝の脈波を視或は觸るゝことを得べし、是を名けて百會又は顱門と稱す、其漸次發育するに従ひ次第に狭少し遂に閉鎖するに至る

後頭骨と兩顱頂骨との間に存する小なるものを後頭百會又は小顱門と云ふ

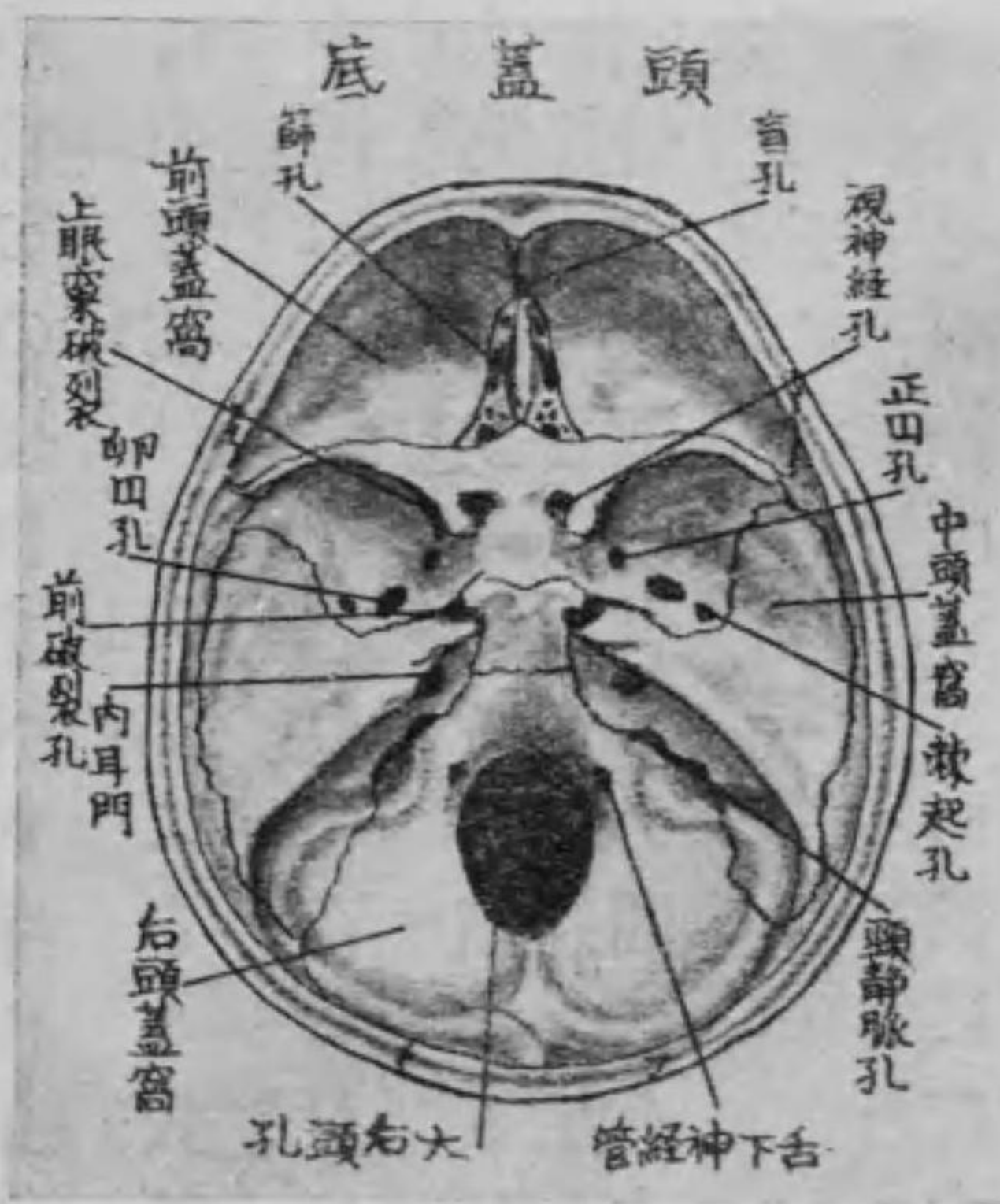
前頭骨と兩顱頂骨との間に存する大なるものを前頭百會又は大顱門と云ふ

顱頂骨の前下隅に存するものを蝴蝶百會と云ふ
顱頂骨の後下隅に存するものを乳様百會と云ふ

○頭蓋頂と頭蓋底との區別

頭蓋頂は前頭骨・顛頂骨及び後頭骨より成り内外の二面をなす
 外面は數多の縫合を有すれども穹隆滑澤なり而して前部を前額
 と名け上眼窩縁を以て顔面と境し後部を後頭と云ひ其左右の上
 項線を以て下境となし頭蓋底を境界せり側部を顛顛面と稱し
 顛顛線に由りて上界をなし最高部を顛頂と云ふ
 内面は凹陷して畧ぼ滑澤なり此
 面を以て頭蓋腔に向ひ腦の上部
 を掩ふ
 頭蓋底は前頭骨・後頭骨・颞骨・篩
 骨及び顛顛骨より成り亦内外の
 二面をなす
 内面即ち上面は陥凹にして腦の

第三十三圖



基底を支ふ故に腦髓下面の形状に従ひ階段状をなし前中後の三
 窩を呈し而して最高位の窩を前頭蓋窩と云ひて大腦の前葉を受
 容し交通孔數個あり中央を中頭蓋窩と云ひて大腦の顛顛葉を受
 容し又交通孔數個を有す最底位の深大なる窩は後頭蓋窩にして
 其中央の一大孔を大後頭孔と名け其他交通孔數個を存す
 外面は凹凸不等甚だしく且つ複雑なり而して前部は顔面頭蓋の
 所領となる

○顔面頭蓋の腔窩

眼窩は顔面の上部鼻根の兩側に位し形は四側錐體にして一大
 深窩を呈す其構造は前頭骨・上顎骨・顛顛骨・淚骨・颞骨・篩骨及び口蓋
 骨の七骨より成り視器を藏する處となる

鼻腔は顔面の中央にして兩眼窠の下方、口腔の上方にある一大深洞なり、上部は嗅官器を藏し下部は呼吸器の一部となる、而して鼻軟骨は骨格の鼻部を補ひ以て外鼻を形成す

口腔は鼻腔の直下にありて其形狀は下顎骨の運動に依りて變化す、而して内に味官器を藏し又消化器の一部をなす

顚顚窩は頭蓋兩側部の淺窩にして顚顚筋の起始部なり、其下部を下顚顚窩と云ふ

翼狀口蓋窩は上顎骨の後部と蝴蝶骨翼狀突起と口蓋骨鉛直部の間にある狹隘なる不齊の小窩にして下眼窠破裂に由りて眼窠と交通す

第二 四肢骨

甲 上肢骨

上肢骨は上肢帶及び固有上肢骨を云ふ

イ 上肢帶

上肢帶或は肩胛帶は鎖骨及び肩胛骨の二骨よりなる

(一) 鎖骨

鎖骨は胸廓前側の上部にありて地平の位置を取り前頸部の下境

圖四十三第



をなす處の管狀骨にして形狀はS字狀に彎曲し肩胛骨と胸骨との連鎖をなす是を區別して一體兩端とす體は圓柱形にして上面は直ちに皮下にあり下面は第一肋骨と相對し一淺溝を有す鎖骨下筋の附着部にして是を鎖骨下溝と云ふ

内端は肥厚して關節面を具へ胸骨の鎖骨截痕と關節す而して其下面の小結節を肋骨結節と云ふ外端は扁平にして上下の二面をなし末端の關節面と肩胛骨の肩峰突起の末端と相關節す

(二) 肩胛骨

肩胛骨は胸廓の後上方の兩側にあり而して上は第二肋骨下は第七肋骨の高さにあり形狀は不等邊三角形にして扁平廣潤なり鎖骨及び上膊骨と連接す是を區別して二面三縁三隅とす前面は陷凹にして肋骨に向ふ是を肩胛下窩と云ふ

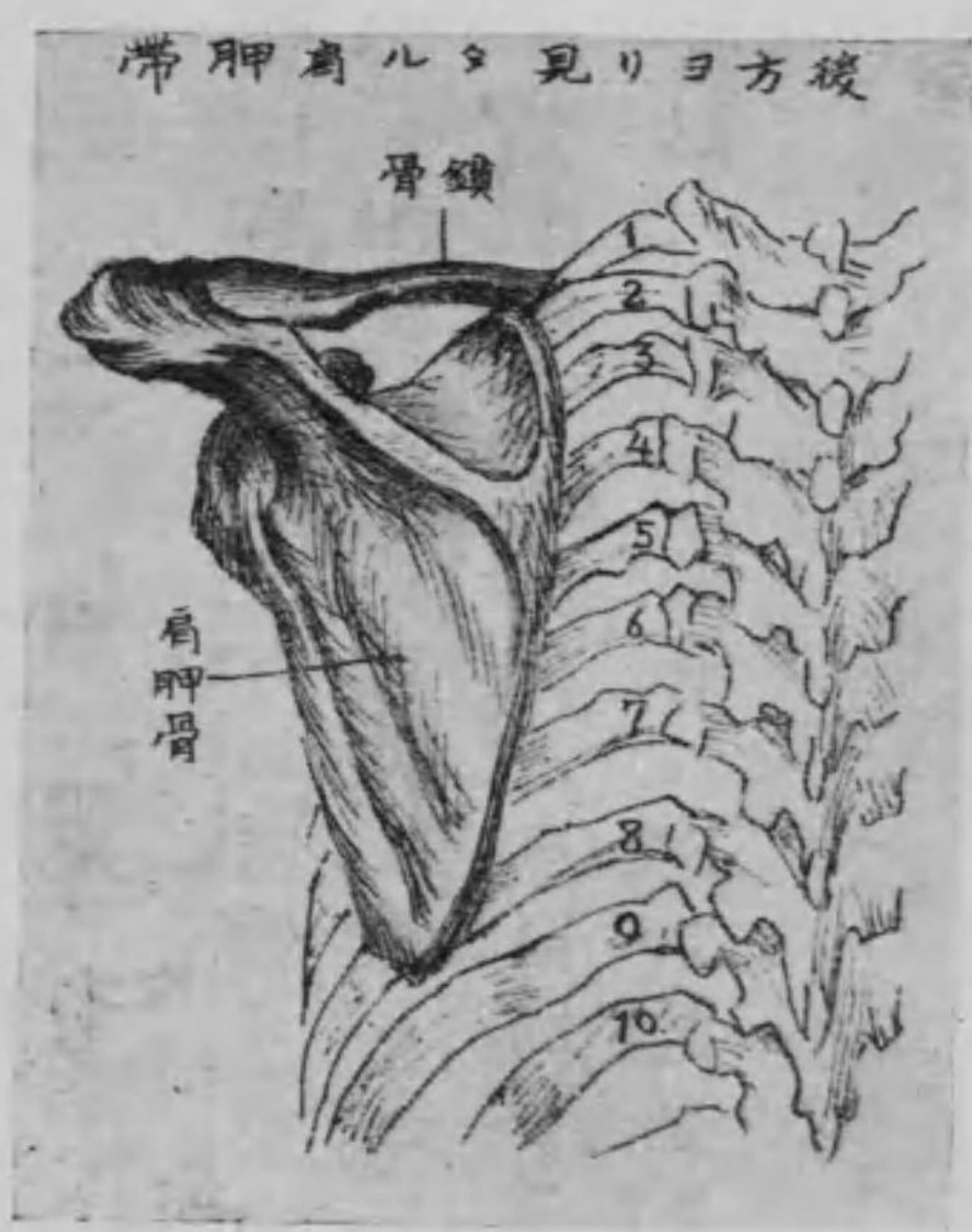
圖五十三第



後面は上部に横徑の隆起あり肩胛棘と名け是に由りて上下の二窩に分たる即ち上

小部を棘上窩と云ひ下大部を棘下窩と云ふ而して肩胛棘端は上
 外方に突出す是を肩峰突起と稱し鎖骨の外端と連接す
 上縁は最短にして薄く外端は強厚の突起あり是を烏喙突起と云
 ひ其内側の截痕を肩胛截痕と云ふ外縁は内縁よりも短くして肥

圖六十三第



厚し内縁は基底と稱し
 最長にして稍や弓形を
 なせり
 上外隅は外方に向つて
 卵圓形の關節面あり關
 節窩と稱し上膊骨と關
 節する處にして此窩の
 上下縁に關節あり窩上

及び窩下關節と云ひ筋の起始部なり又關節窩と肩峰突起との間
 に一截痕あり是を頸截痕と云ふ

□ 固有上肢骨

固有上肢骨は上膊骨・前膊骨・尺骨及び橈骨・手骨・腕骨・掌骨及び指
 骨とす

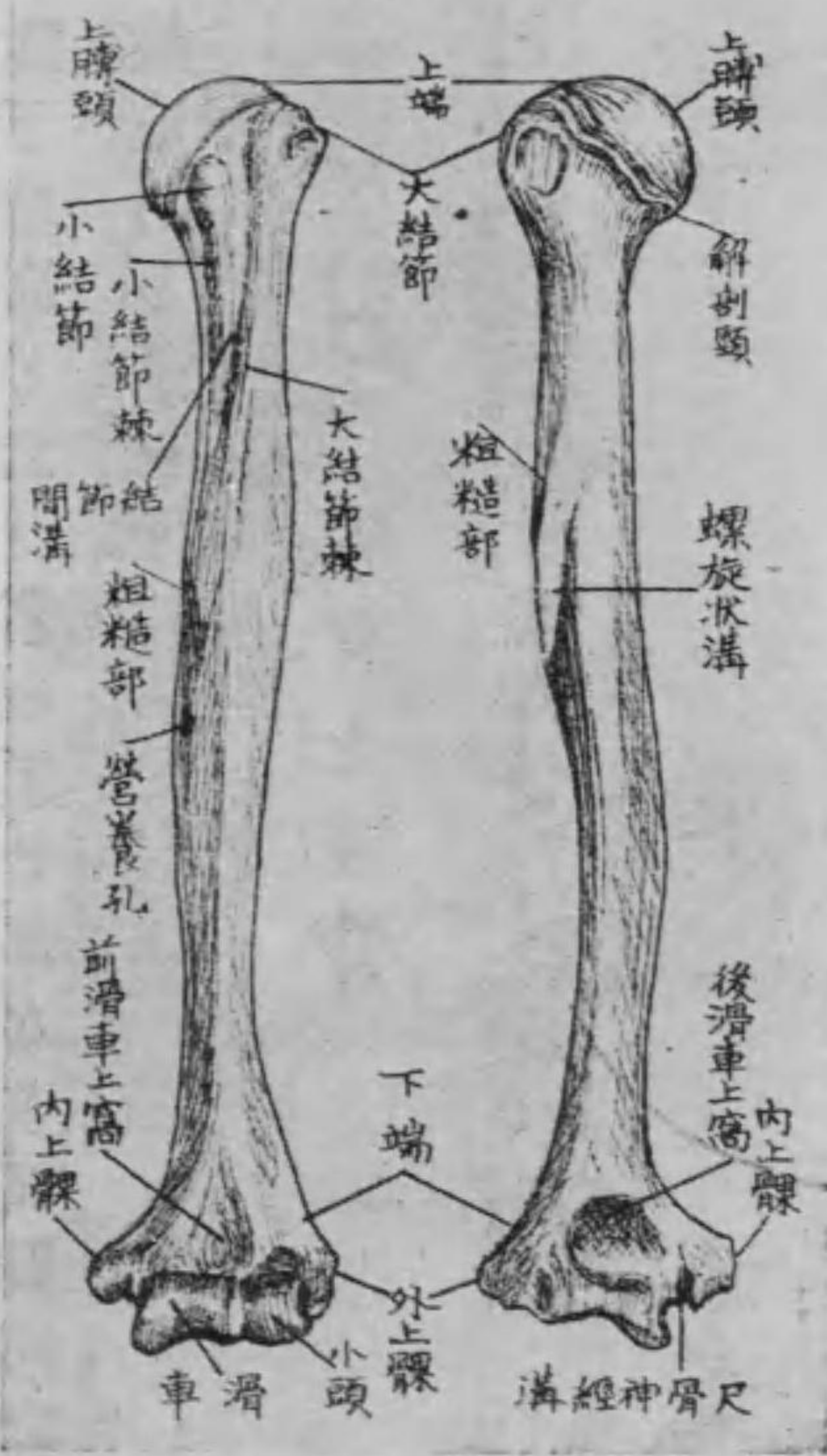
(一) 上膊骨

上膊骨は胸廓の側部にして肩胛骨と前膊骨との間にある管狀の
 長骨なり是を區別して一體兩端とす
 上端は膨大して半球形をなし上内方に向ひて肩胛骨の關節窩と
 關節す是を上膊頭と云ふ頭の周圍は少しく狹隘す是を解剖頸と

名く、又頭の前内方の結節を小結節、前外方の結節を大結節と稱し、共に筋の起始地にして此兩結節の間は溝をなす是を結節間溝と云ひ二頭膊筋長頭の腱を通す

體は上部稍や圓柱なれども下部に至るに従ひ次第に三角形をなす而して上部に大及び小結節棘あり、又外面は中央の上部に著し

第三十七圖
左 上 膊 骨



き粗糞面を呈す是を上膊結節と云ひ後面の中央には螺旋狀に外下方に向つて走る淺き大溝あり螺旋狀溝或は

尺骨神經溝と稱し

橈骨神經の通ずる處なり

下端は稍や扁平にして側方に擴張し内外二個の突起あり即ち外方にありて頭狀をなすを小頭と云ひて橈骨と關節し、内方にありて滑車形をなすを滑車と稱し尺骨と關節す而して滑車の前後に深窩あり前窩を前滑車上窩又は冠狀窩と云ひ、後窩を後滑車上窩又は鶯嘴窩と云ふ、又滑車の兩側に結節あり内方のものを内上髁、外方のものを外上髁と名け、内上髁の後面には尺骨神經を通ずる尺骨神經溝あり

(二) 前 膊 骨

前膊骨は二個の長骨より成り其内側に在るを尺骨と云ひ外側に在るを橈骨と云ふ

尺骨

尺骨は前膊の小指側に位し其形状は管状にして長く而して上膊骨・橈骨及び腕骨と联接す是を區別して一體兩端とす
 上端は肥厚して前面に大なる截痕あり是を大半月狀截痕と名く
 即ち上膊骨の滑車と關節する處にして上下二個の突起を出す其上方のものを鶯嘴突起と名け下方のものを烏喙突起と名く而して其下際に一粗糙部あり尺骨結節と云ふ又烏喙突起の外側に截痕を呈す是を小半月狀截痕と稱し橈骨小頭と關節す

第三十八圖 右尺骨



て其下際に一粗糙部あり尺骨結節と云ふ又烏喙突起の外側に截痕を呈す是を小半月狀截痕と稱し橈骨小頭と關節す

體は三角形にして下端に赴くに從ひ狹少となり僅かに前面に彎曲し前面の上方に營養孔を現はす
 下端は少しく膨大す是を小頭と云ふ其下面は三角軟骨に依りて間接に腕骨と關節し其外側の關節面は環狀關節面と名け橈骨下端と關節す又頭より下方に向つて短小の突起を出せり是を莖狀突起と稱す

2 橈骨

橈骨は前膊の拇指側に位し其形状は管状にして長く少しく弓状を呈し上膊骨・尺骨及び腕骨と联接す是を一體兩端に區別す
 上端は少しく膨大す是を橈骨小頭と名け末端の圓形凹陷なる關節面を以て上膊骨下端の小頭と關節し其周縁にある輪狀の關節

圖九十三第



體は其横断面稍や三角にして其内隅殊に鋭利なり是を骨間櫛と云ふ前面には營養孔あり

下端は強く膨大し末端に陥凹なる三角形の關節面あり是を關節窩と稱し腕骨の舟状骨と半月骨とに關節す其内側の截痕を半月状截痕と云ひ尺骨下端の環状關節面と關節する處にして更に其下方に突出せる突起を莖狀突起と稱す

(三) 手骨

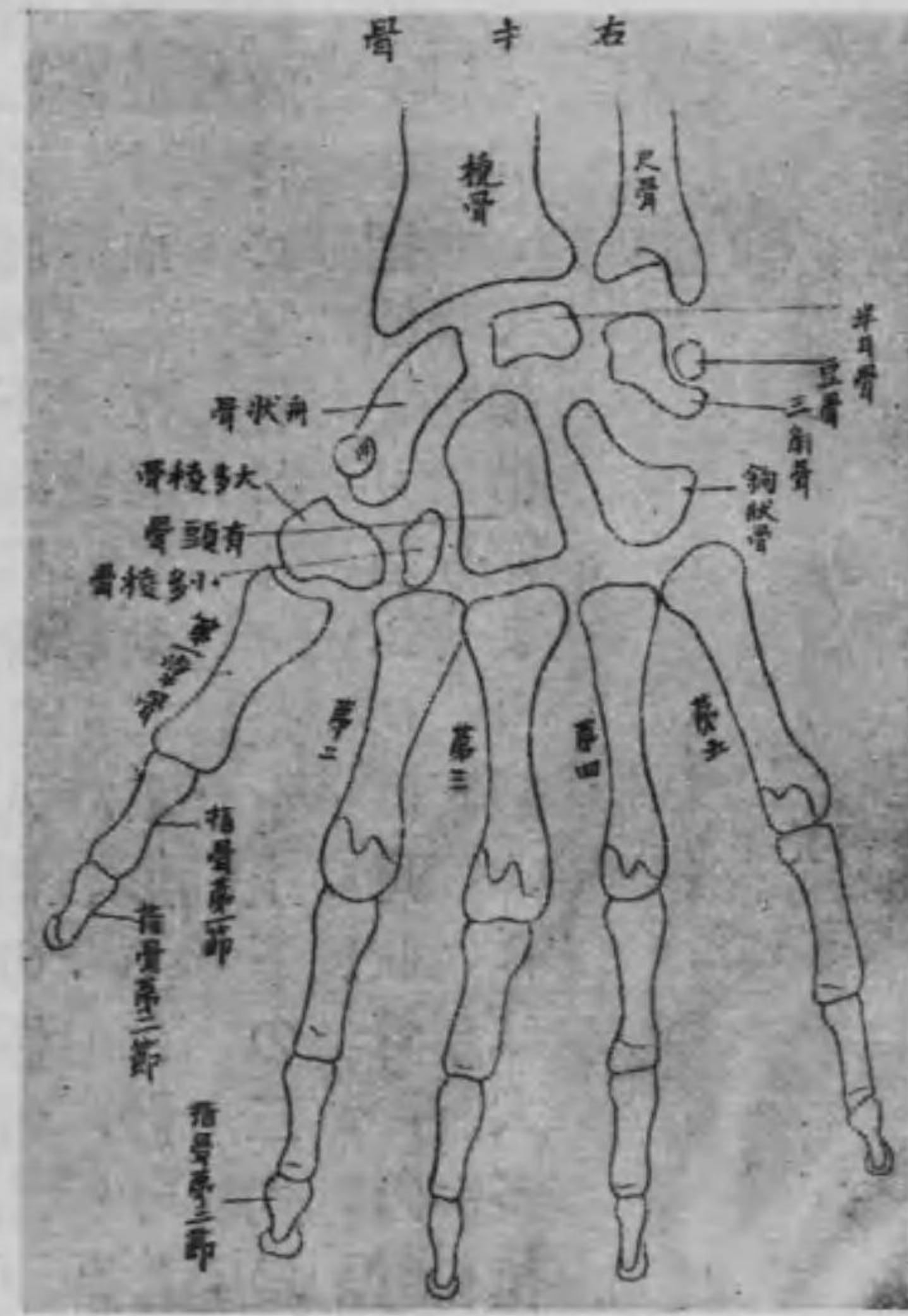
手骨は手根を形成せる八個の腕骨と手掌を成せる五個の掌骨と細長なる十四個の指骨より成る

I 腕骨

腕骨は前膊の下端に位し八個の短骨上下二列に排列し以て手根を形成す而して各骨共に其形ちは散子形を呈し、聯接は八個相互と前膊骨と掌骨となり是を上下の二列に區別す
上列を拇指側より數ふれば舟状骨・半月骨・三角骨及び豆骨にして下列も同じく拇指側より數ふれば大多稜骨・小多稜骨・有頭骨及び鉤状骨なり

2 掌骨

第十四圖



下列之關節し下端は指骨の基底之關節す、又骨幹は細小となり各指側より小指側に向つて次第に第一掌骨、第二掌骨、第三掌骨、第四掌骨、第五掌骨と數ふ

掌骨は手掌を形成せる小なる長骨にして其數五個あり聯接は腕骨の下列之指骨の基底にして是を區別して一體兩端とす。上端及び下端は共に膨大し上端は腕骨の

又第一掌骨下端の兩側には種子骨を有せり

3 指骨

指骨は掌骨の下部にして即ち指節をなすものなり其數十四個あり而して特り拇指は二節なれども他の四指は各三節を有す、各指を名けて拇指(大指)、食指(示指)、中指、無名指(環指)及び小指と稱す

乙 下肢骨

下肢骨は下肢帶及び固有下肢骨を云ふ

1 下肢帶

下肢帶或は骨盤帶は左右の無名骨より成る

(一) 無名骨

無名骨(又は臑骨)は軀幹の下部にありて薦骨の左右に位し骨盤の大部を形成す形状は扁平不齊にして其联接は薦骨・大腿骨及び左右同名骨相互の接合なり是を區別して腸骨・坐骨及び耻骨の三骨とす而して三骨相結合する處外側に深大なる窩をなす是を髌臼と云ふ大腿骨頭を受容するの窩なり

1 腸骨

腸骨は無名骨の大部を占め最も擴張す是を一體一翼とす體は頗る強厚にして髌臼の上部を助成す

翼は體より後上部に出でたる扁平なる部にして二面三縁を有す

内面は前上部凹陷にして滑澤なり是を腸骨窩と云ひ其後部に大なる關節面あり耳状面と名け薦骨の耳状面と關節す外面は稍や凸凹して二個の粗線を現はす即ち前臀線後臀線と稱へ筋の起始部なり

第十四圖



上縁は弓形にして長く且つ肥厚す是を腸骨櫛と云ふ前縁は短且つ不等にして二個の鈍突起を呈す其上を腸骨前上棘下を腸骨前下棘と云ふ後縁も亦二個の鈍突起を呈す其上を腸骨後上棘下を腸骨後下棘と名く

2 坐骨

坐骨は無名骨の後下部にして肥厚せる部を體と稱し二枝を具ふ體は髌白の後下部を成し其後縁は腸骨後縁の一系にして下部は一の棘に終る是を坐骨棘と云ひ坐骨棘の上下に各一個の截痕あり甲を大坐骨截痕乙を小坐骨截痕と名く而して體の後下方に連れるは上枝にして其下端に大なる粗糙部あり是を坐骨結節と云ひ此坐骨結節より前方に向ふを下枝と名け耻骨の下枝と癒合す

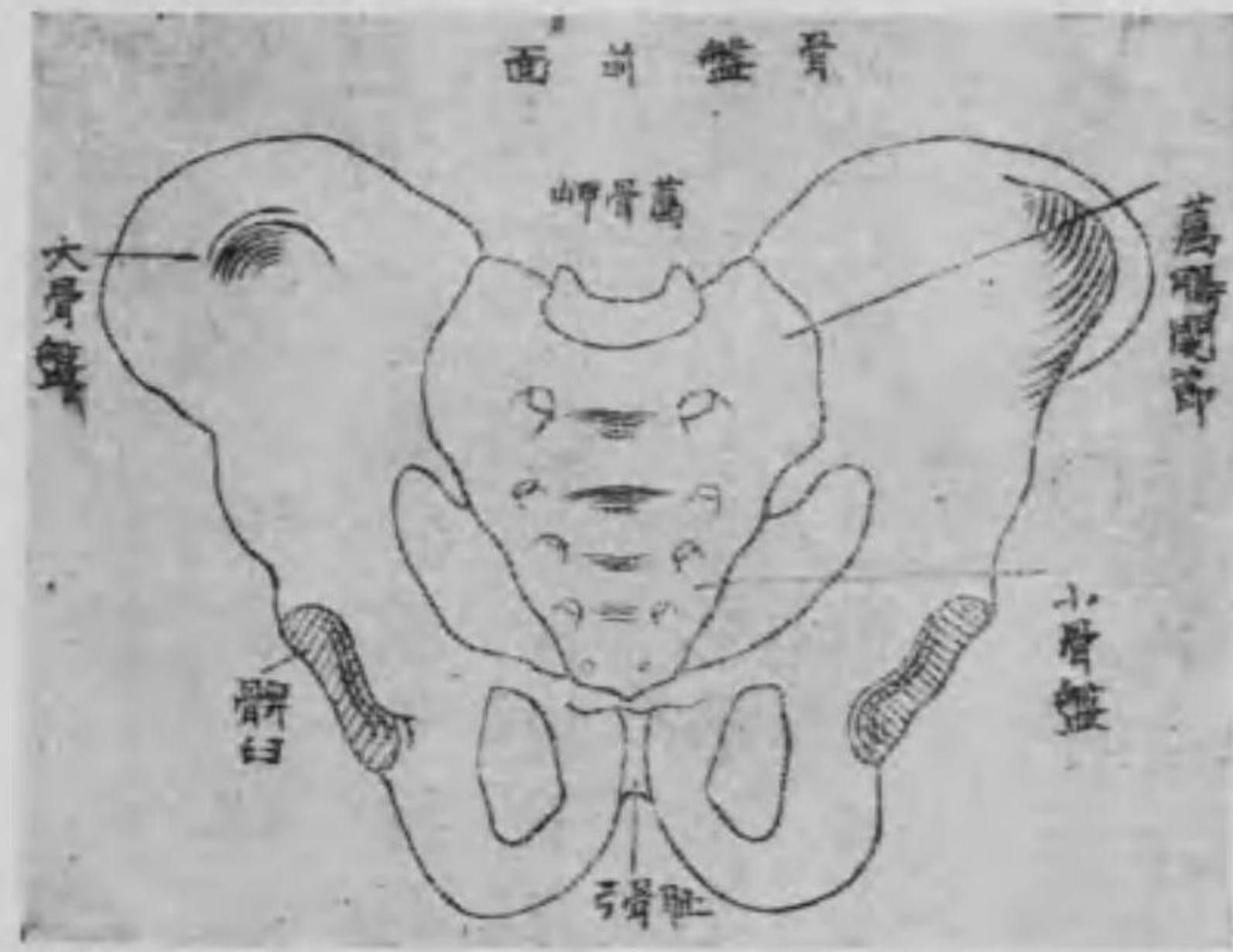
3 耻骨

耻骨は無名骨の前下部を占めて最小部を構成し一體二枝を具ふ體は強厚にして髌白の前下部を成す上枝は體の前方に連れる部にして前端に近く一結節あり耻骨結節と云ひ其前端は對側の耻骨と合して耻骨軟骨接合或は耻骨縫隙を構成する處の接合面を有し下枝は是より後下方に走りて坐骨の下枝と癒合す又無名骨には閉鎖孔と名くる三角形の一大孔あり耻骨坐骨の上下兩枝に由りて構成せられ閉鎖膜を以て閉鎖せらる

○ 髌白

髌白は無名骨の外面に於ける半球形の深窩にして腸骨坐骨及び

圖二十四第



耻骨の癒合に由りて構成せられ其周縁は隆起せり是を髌白縁と云ひ下部は僅かに缺如す是を髌白截痕と云ふ而して髌白の中心は著しく陷凹す是を白窩と名く

○ 骨盤

骨盤は軀幹の最下部にして左右の無名骨第五腰椎薦骨及び尾閏骨の相結合したる骨腔の一装置にして形状は稍や漏斗状なり是を區別して大骨盤及び小骨盤とす
大骨盤は後壁は第五腰椎薦骨翼にして側壁は左右の腸骨窩なり

前壁は開放す小骨盤は其内を骨盤腔と云ひ後壁は薦骨尾閏骨にして側壁は坐骨及び腸骨の一小部なり前壁は耻骨及び耻骨軟骨接合にして頗る短かし而して小骨盤の上口は圓くして大なれども下口は不齊形にして小なり

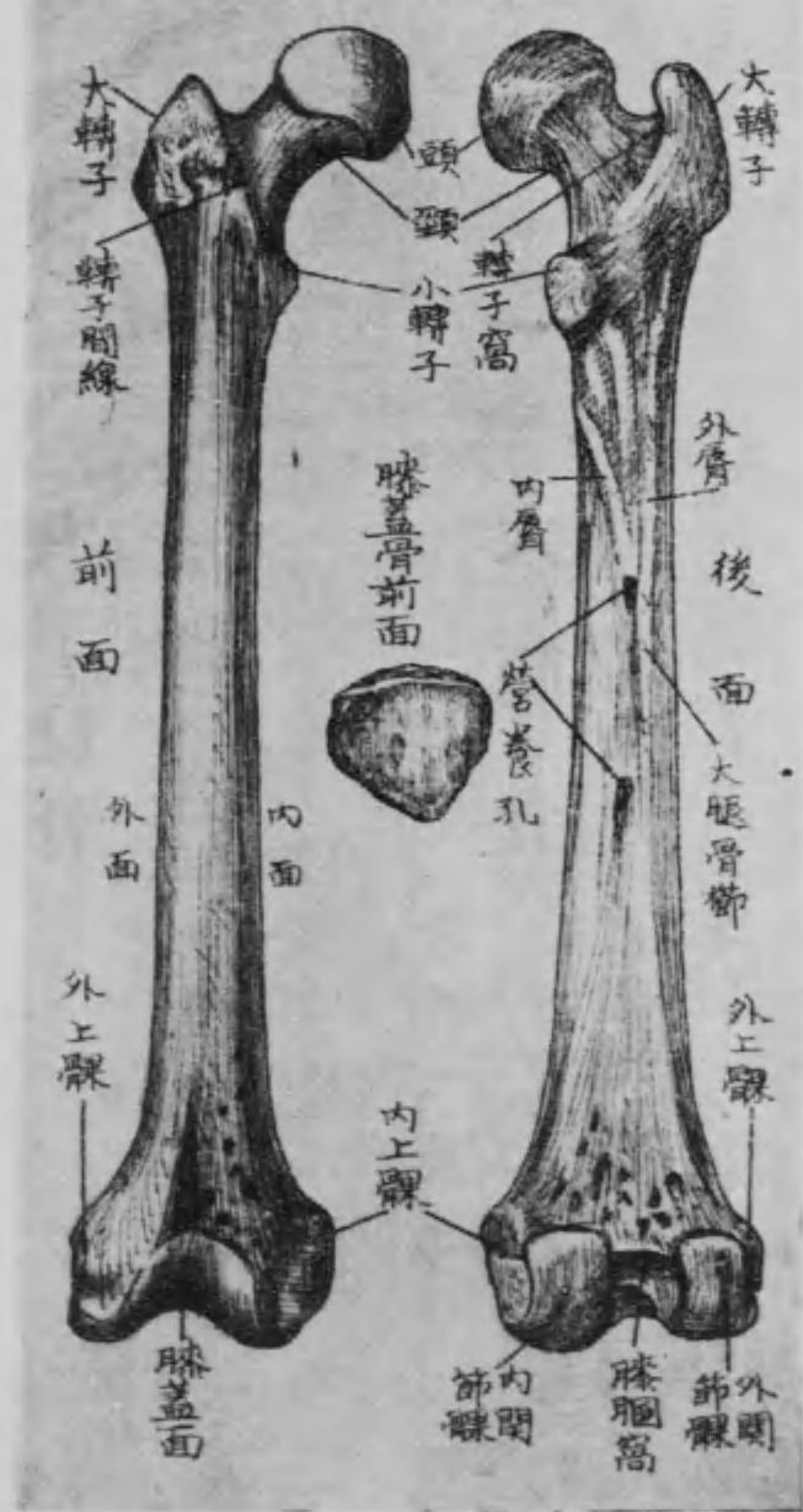
□ 固有下肢骨

固有下肢骨は大腿骨下腿骨脛骨腓骨及び膝蓋骨足骨跗骨蹠骨及び趾骨とす

(一) 大腿骨

大腿骨は大腿部にあり身體中最大なる管状骨にして其联接は無名骨脛骨及び膝蓋骨なり是を區別して一體兩端とす

第十四圖 右大腿骨



其頭の下際に狭き部あり是を頸と云ふ此外側に上方へ向へる大突起あり大轉子と名け同内部の陥凹部を轉子窩と云ふ又頸の下部に鈍突起ありて内後方に向ふ是を小轉子と名く而して大轉子と小轉子の間は前後共に一の隆線に由りて互に結合せらる是

上端は斜めに内上方に向つて突出せる圓形の關節頭あり是を大腿骨頭と云ひ髀臼に挿入す

を前及び後轉子間線と稱す體は前方に向つて少しく弓形を成し後隅は粗糙の櫛を露はす是を大腿骨櫛と稱し是を内外の兩唇に分つ即ち外唇は大轉子の續きにして其下端は外上髁に連り内唇は小轉子の續きにして其下端は内上髁に連る而して體は後面の中央に一の營養孔を有す下端は頗る膨大して扁平四方形を呈し兩側に滑澤なる突起を生ず其内側にあるを内關節髁と云ひ外側にあるを外關節髁と稱す前方は内外關節髁相結合して淺窩を呈す是を膝蓋窩と名け膝蓋骨と關節し又後面にも深大なる窩あり是を膝窩或は髁間窩と名く而して關節髁の兩側に於て各一個の結節を現はす其内側のものを内上髁と云ひ外側のものを外上髁と云ふ共に筋の起始部なり

(二) 下腿骨

下腿骨は大腿骨の下端に連続せる二個の長骨及び一個の扁骨より成る

1 膝蓋骨

膝蓋骨は膝關節の前側に於て四頭股筋の腱中にある扁平栗子状の一の種子骨と看做すべきものにして前面は豊隆粗糙なり後面は滑澤にして内外の小凹關節面を以て大腿骨下端の膝蓋窩と相應容して關節す

2 脛骨

脛骨は下脚の内側にあり腓骨と相並び以て下脚を形成す其形状は稍や三角柱形にして大腿骨の下端と腓骨及び距骨とに联接す是を區別して一體兩端とす
上端は粗糙にして甚だ膨大し殊に側方に擴張し其末端に二個の關節面を現はす是を内及び外關節髌と名け大腿骨の内及び外關節髌と關節す而して内及び外關節髌の間にある小隆起を髌間隆起と云ふ又外關節髌の後下方に小關節面あり腓骨關節面と名け腓骨の上端と關節す
體は内外後の三側に於て三稜形を呈し其内面は平滑にして前隅と共に直に皮下にあり而して外面は稍や凹滑にして後面は凸滑なり但し前隅は是を脛骨櫛と云ひ其上端に鈍結節あり是れ即ち脛骨結節にして膝蓋靱帯の附着部なり

跗骨は下腿の前下部にして七個の短骨を以て足根を形成す其形状は不齊短小にして概ね骰子形なり联接は七個相互に接合し下腿骨及び蹠骨と關節す是を區別して前後の二列となす
 後列は跟骨及び距骨なり
 前列は五個にして是を跗趾側より數ふれば舟狀骨第一楔狀骨第二楔狀骨第三楔狀骨及び骰子骨なり而して其前端は各蹠骨の後端と联接す

2 蹠骨

蹠骨は跗骨と趾骨との間に位せる五個の小管狀骨にして少しく弓形を帯び

第四十五圖 右足骨



手の掌骨よりも堅く接合す是を稱するには跗趾側より第一蹠骨第二蹠骨第三蹠骨第四蹠骨第五蹠骨と云ひ其前端は各趾骨と接合し後端は第一乃至第三楔狀骨及び骰子骨と連接し各骨間腔を現はす

第一蹠骨には其前端の下際に二個の種子骨を有す

3 趾骨

趾骨は蹠骨の前部にありて指骨と同じく第一乃至第五趾骨と稱す其數十四個にして各一小長骨なり且つ指骨の如く關節すれども各節甚だ短かくして跗趾は二節より成り他は皆三節より成る後端は蹠骨と關節し前端は次節と關節す而して其末端は粗糙なる縁を以て終る

第二 靱帶學

靱帶學は主に關節の構成に必要な靱帶に就て論ずるものにして先づ始めに關節の種別を知らざる可からず

甲 不動關節

不動關節は是を分ちて縫合及び接合の二とす

(一)縫合　こは鋸齒狀縫合又は鱗狀縫合等の如く幽微の軟骨質を以て不等の骨縁互に結合し少しも移動すること能はざるものを云ふ例へば頭蓋諸骨に於ける縫合の如し
(二)接合　こは他組織の骨間に介在するに由りて成るものにして

其著しきものを軟骨接合とす彼の耻骨軟骨接合の如き若くば脊柱の如き骨間に厚き軟骨を存し平等の骨面互に接合し少しく移動するを得るもの即ち是なり

乙 可動關節

可動關節は是を造るに與かる骨の數に依り二骨より成るもの即ち單關節及び三骨以上より成るもの即ち複關節に區別し其運動する軸の數に依り又一軸性關節二軸性關節及び三軸性關節に區別す更に又其形狀に依り左の六種に區別す而して關節を造る骨端は通常一方は凸面を呈し他方は凹面を呈するものにして前者を關節頭と云ひ後者を關節窩と云ふ共に關節軟骨に由り被はるるものなり

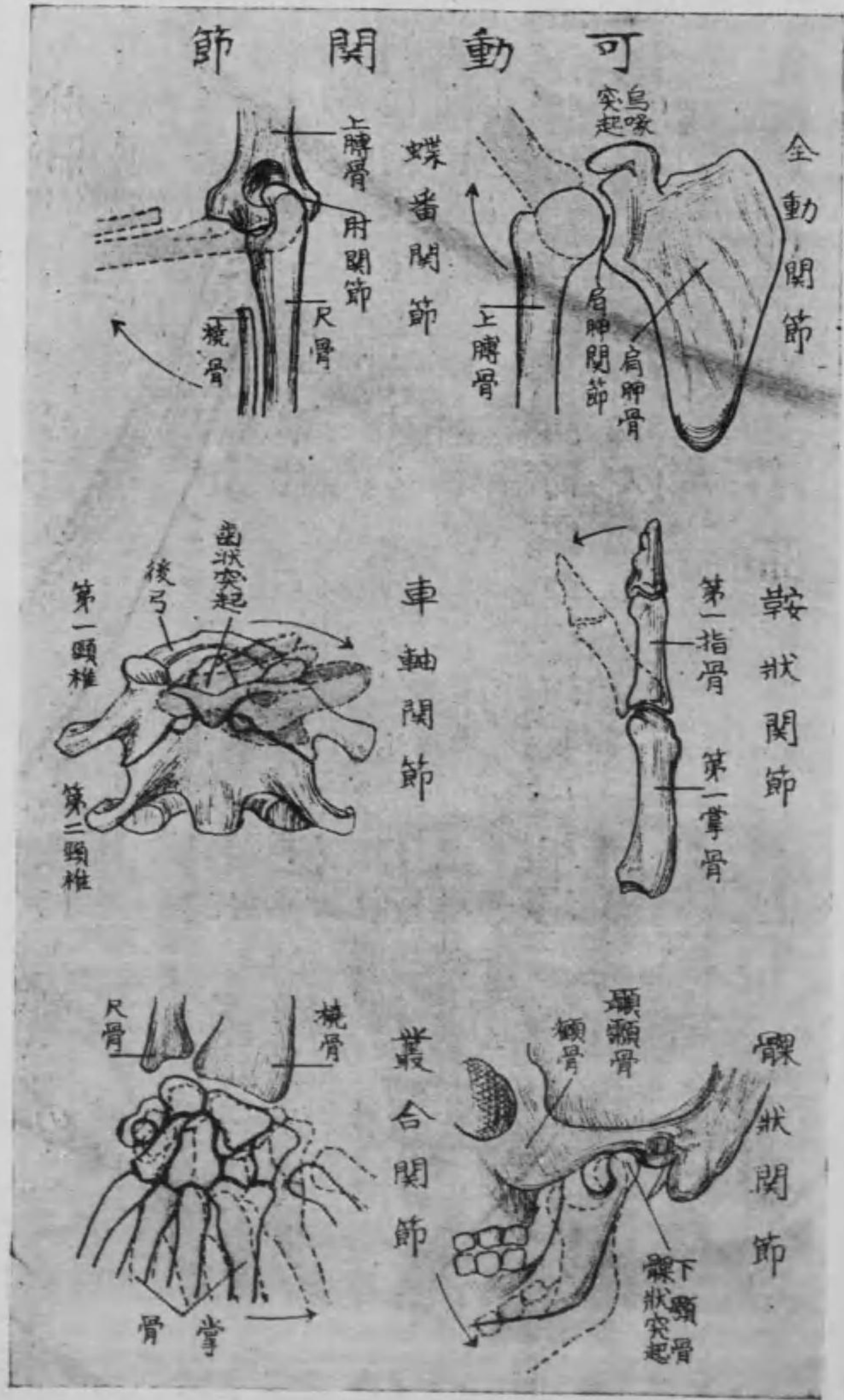
(一) 全動關節 此は關節頭は球狀關節窩は球窩を爲し上下左右廻轉等何れの方角にも自由に運動を営み得べき肩胛關節又は股關節の如きを云ふ故に運動軸の數より云へば三軸性關節に屬す

(二) 鞍狀關節 此は關節を爲せる兩骨端の鞍背狀をなすものにして兩骨端が恰かも鞍背と鞍背とを相接したるが如き狀をなし、拇指骨掌骨關節の如く屈伸及び内外兩轉の作用をなすものを云ふ故に運動軸の數より云へば二軸性關節に屬す

(三) 髁狀關節 此は鞍狀關節の作用と稍や同一なるも關節の形狀大に異り關節頭は橢圓狀を爲し關節窩は是に一致して陷凹せる下顎關節又は後頭載域關節の如きを云ふ故に運動軸の數より云へば同じく二軸性關節に屬す

(四) 蝶番關節 此は關節頭は其骨の縱軸と直角を爲せる圓柱の一

圖六十四第



部をなし關節窩は是に一致して陥凹し、唯だ屈伸のみの用を司ざる處の肘關節又は指關節の如きを云ふ故に運動軸の數より云へば一軸性關節に屬す

(五)車軸關節　こは關節頭及び關節窩の共に圓柱状を爲し第二頸椎の齒状突起と第一頸椎との關節又は橈骨と尺骨との關節の如く一軸に沿ふて廻旋するものを云ふ故に運動軸の數より云へば一軸性關節に屬す

(六)叢合關節　こは其關節面の平坦又は平坦に近き腕骨附骨の如き微弱の運動を營むものを云ふ

○ 靱 帶

靱帶は其質強靱の纖維様結締組織より成る處の膜質にして白色

の光輝を有し最も彈力に富む多くは一骨より起りて他骨に跨り兩骨の連繋を維持し其滑脱を豫防し又は骨間に緊張して血管神經を通ずる孔裂を形成するものなり是を分ちて三種とす

(一)囊狀靱帶　は可動關節に於て一骨の骨膜より直に他骨の骨膜に延展し關節をして一の囊腔(關節腔)となすものにして内面に滑液膜を被ひ此膜より常に黄色を帯びたる僅少の濃厚液を分泌す是を滑液と稱し關節面を滑かならしめ相互の摩擦を防ぎ恰かも

運轉せる機械に油を注ぐが如し、而して滑液膜の内面には絨毛或は皺襞を有するものなり

第四十七圖

可動關節及靱帶



(二)副靱帶 は囊狀靱帶の外面或は内面に在りて一骨より他骨に亘り囊狀靱帶を補助し益々關節を固定するものを云ふ

(三)固有靱帶 は一骨の孔或は截痕に緊張して茲に裂孔を形成し或は數骨に跨りて骨格の維持をなすものを云ふ

總て骨格のある處必ず靱帶ありて骨格の聯結をなし茲に人體の基礎を構成す而して各部位に依り一々其名稱を附すと雖も吾人鍼灸家には多大の必要を認めざるを以て唯だ其總論のみを記載することせり讀者是を諒せよ

第三 筋學

第一章 筋學總論

筋は通俗單に肉と稱へ身體の運動を掌ごる處の要具にして是に隨意筋及び不隨意筋の二種あり

隨意筋即ち横紋筋は赤色微細の肉絲(即ち原纖維)の結束たる筋纖維が更に集合して一束となりたるものにして斯くの如く筋纖維の漸次集合して出來たる横紋筋は更に又膜を以て被包せられて軀幹の周壁及び四肢等渾身の軟部を形成し能く神經の刺戟又は意識の作用に由りて自働性に自由に伸縮し骨をして百般の動作を爲さしむるものなり而して筋の兩端は大抵白色の固き索の如

圖八十四第

胞細及維纖筋



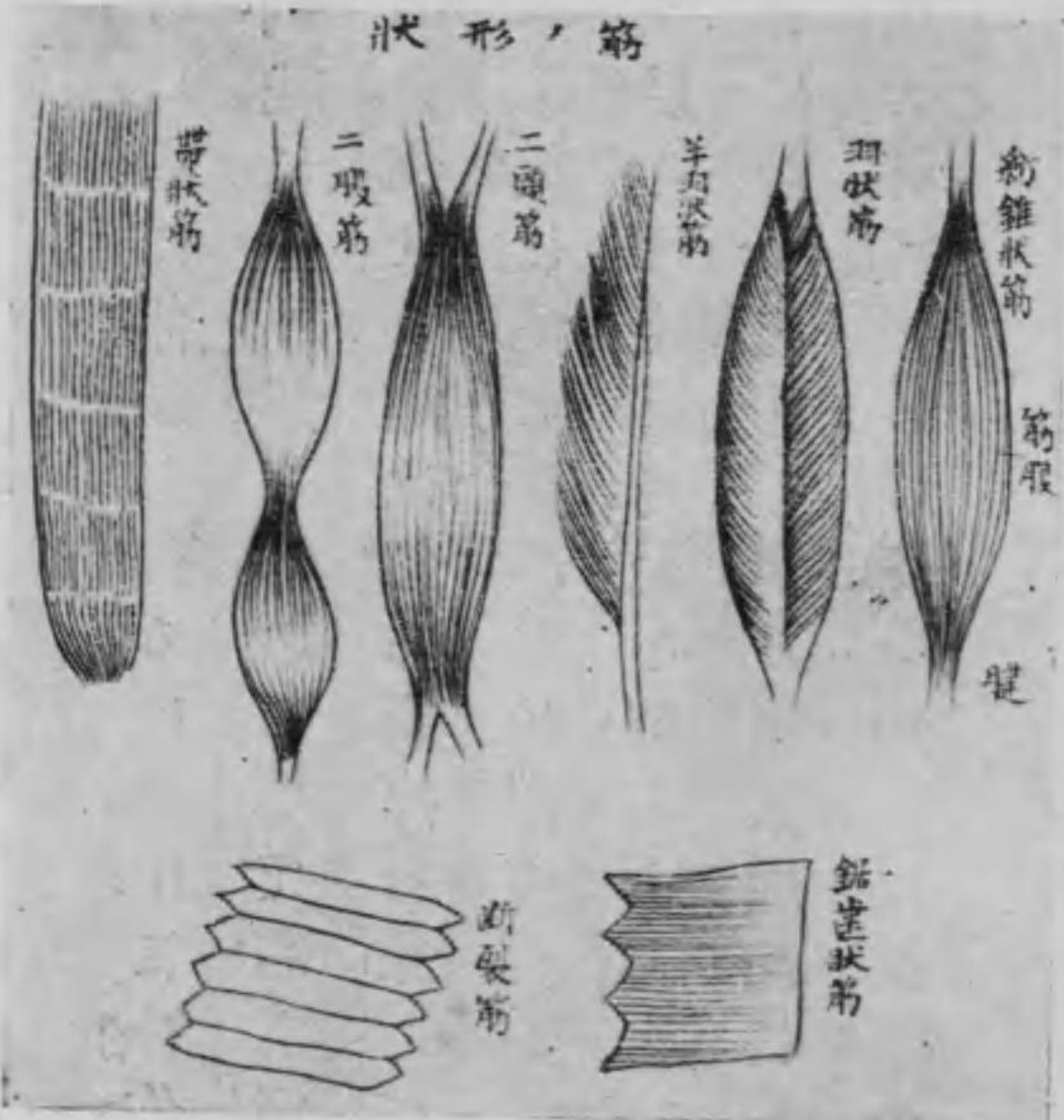
きものより成り主として骨に附着せしむる媒介をなすものあり是を腱と云ひ其廣きものを腱膜と云ふ

其構造横紋筋と全く異なり従つて随意筋に反し意志の作用に由りて自由に伸縮し能はざるものにして自動性諸器官の壁即ち内臓血管等に存在し其壁を構成するものなり但し心臓の筋肉は横紋筋なるも全く意志に隨はざる特殊例外のものなり

○筋の起始停止及び形状

圖九十四第

形状ノ筋



筋も亦骨の如く長短廣の三種ありて其形に従ひ羽状筋半羽状筋鋸齒状筋斷裂筋及び二頭筋或は三頭筋又は二腹或は數腹筋と名け皆必ず一骨より起り一或は數關節に跨るものにして其一端即ち起始を頭と云ひ他端即ち停止を尾と云ふ又頭尾の間を

筋腹と名く

○筋膜

筋膜は筋の外面或は筋層間を被ふところの強き結締組織膜にして是を以て淺深數層に分つものなり

○ 筋と神経との關係

筋の自由に伸縮し得るは其中に分佈せる神経に由りて導かれたる刺戟に由り起るものにして若し神経の破壊せらるゝ時は此神経の分佈せる筋は忽ち麻痺を來して萎縮し遂には消失するに至るべし故に筋と神経とは離るべからざる關係を有するものにして又胎生學上より是を觀るも甚だ密接なる關係を有す即ち先づ始めに神経を生じ然る後其周圍に筋肉を發生するものなり依つて筋と神経との關係を知るは鍼治の應用上最も必要なるものことす

第二章 筋學各論

第一 軀幹筋

全身の筋を大別して軀幹筋及び四肢筋とす而して軀幹筋を更に背筋・腹筋・胸筋・頸筋及び頭蓋筋に分つ

甲 背筋

背筋とは軀幹の後壁に位せる諸筋の總稱にして是を分ちて淺層及び深層の二とす

イ 淺層諸筋

(一) 僧帽筋 (副神經分佈す)

僧帽筋は三角形の大筋にして後頭骨上項線の内部項靱帯及び全胸椎の棘状突起より起始し鎖骨の外端・肩峰突起及び肩胛棘に停止せり其作用は肩胛骨及び鎖骨の外端を後上方に揚げ肩胛骨の

基底を脊柱に向つて接近せしむ

但し項靱帯とは全頸椎の棘状突起間より後頭骨の外後頭楯に三角形をなして緊張せる膜状の靱帯を云ふ

第十五圖



(二) 潤背筋 (肩胛下神経分佈す)

潤背筋は三角形をなし第八以下の胸椎棘状突起・腰背筋膜・腸骨楯の後部及び終末の三肋骨より起始して上膊骨の小結節棘に停止せり其作用は上膊骨を後内方に引き且つ下撃す

(三) 菱形筋 (肩胛背神経分佈す)

菱形筋は斜方形にして項靱帯の下部第七頸椎乃至第四胸椎の棘状突起より起始し外下方に走りて肩胛骨内縁に停止せり其作用は肩胛骨を脊柱に向つて内上方に引く

(四) 後上鋸筋 (背椎神経の後枝及び肩胛背神経分佈す)

後上鋸筋は扁平方形にして菱形筋の下層にあり第七頸椎乃至第三胸椎の棘状突起より起始し四個の肉齒を以て外下方に向ひ第二乃至第五肋骨隅に停止せり其作用は肋骨を上舉し即ち吸氣の補助をなす

(五) 後下鋸筋 (背椎神經の後枝分佈す)

後下鋸筋は同じく方形にして腰背筋膜より起始し外上方に向ひ終末の四個肋骨に停止せり其作用は肋骨を牽下し呼氣の補助をなす

(六) 夾板筋 (大後頭神經分佈す)

夾板筋は素に二個の筋(頭夾板筋、項夾板筋)互に接着したるものにして長方形

第五十一圖 背筋深層



線の外部及び上三個頸椎の横突起に停止せり其作用は兩側同時に收縮するときは頭を頸と共に後方に伸展せしめ偏側の動きなるときは唯だ頭及び頸を廻旋せしむ

をなし項靱帶の下
部第七頸椎乃至第
五胸椎棘状突起よ
り起始し外上方に
上り乳嘴突起上項

口 深層諸筋

長背筋

(一) 薦骨脊柱筋 (背椎神經の後枝分佈す)

薦骨脊柱筋は殆んど鉛直に位し薦骨の後面・腸骨・腰椎の棘状突起及び腰背筋膜の前葉等より起始し脊柱に沿行して上方に進み全肋骨隅全横突起及び顛顛骨乳嘴突起の後縁に停止せり其作用は主として脊柱を伸展す

尚ほ此筋は内外の二部に分ち更に部位に従ひ外部を腰腸筋・背腸筋及び項腸筋とし、内部も又部位に従ひ背長筋・項長筋及び頭長筋に分つ

(二) 棘筋 (頸及び背椎神經の後枝分佈す)

棘筋は背長筋の内部に位し背椎の棘状突起より起始し上方に上

り二三上位の棘状突起に停止せり其作用は脊柱を側方に屈す但し此筋は部位により分ちて頸部にあるを項棘筋、背部にあるを背棘筋とす

(三) 横棘筋 (背及び腰椎神經の後枝分佈す)

横棘筋は連続したる數筋の總稱にして其纖維を以て脊柱の横突起より起始し斜に内上方に走り三四の椎骨を越へて或は直に上位の棘状突起に停止せり其作用は脊柱を伸展し且つ廻旋を營む但し此筋は第一層半棘筋・第二層斷裂筋・第三層旋背筋の三層に分つ

短背筋

短背筋は屈伸椎に屬するもの、後頭骨及び廻旋椎に屬するものこの二に分つ

○ 屈伸椎に屬するもの(三筋あり)

(一) 横突起間筋 (頸及び腰椎神經の後枝分佈す)

横突起間筋は各横突起の間に亘り其作用は脊柱を側方に屈す
但し頸部に於ては横突起の尖端分れたるにより従つて前後の二部に分れ腰部に於ては副突起と乳嘴突起により内外に分る而して胸部に於ては缺損す

(二) 棘間筋 (同上)

棘間筋は小且つ短にして各棘状突起の間にあり其作用は脊柱を伸展す

但し胸部に於ては缺損すべし

(三) 肋骨舉筋 (背椎神經の後枝分佈す)

肋骨舉筋は多數の扁平小筋にして胸椎横突起の尖端より起始し斜めに下方に走り肋骨隅の下縁に停止せり其作用は肋骨を上擧し吸氣の用をなす

○ 後頭骨及び廻旋椎に屬するもの(五筋あり)

(一) 後大直頭筋 (第一頸椎神經の後枝分佈す)

後大直頭筋は長三角形の小筋にして第二頸椎の棘状突起より起始し外上方に走り後頭骨の下項線に停止せり其作用は頭蓋を後方に牽く

(二) 後小直頭筋 (同上)

後上直頭筋は同じく小長三角形にして後大直頭筋の下層にあり第一頸椎後弓の後結節より起始し下項線の下部に停止せり其作用は頭蓋を後方に牽く

(三) 下斜頭筋 (同上)

下斜頭筋は稍や紡錘形に近く第二頸椎の棘状突起より起始し斜めに外方に走り第一頸椎の横突起に停止せり其作用は頭蓋を廻旋す

(四) 上斜頭筋 (同上)

第五十二圖

背筋深層



り起始し内上方に走り下項線の上部に停止せり其作用は頭蓋を廻旋す

(五) 側直頭筋 (同上)

側直頭筋は小方形にして第一頸椎の横突起より起始し上走して

上斜頭筋は長三角形にして第一頸椎の横突起より

後頭骨の頸靜脈突起に停止せり其作用は頭蓋を側方に傾けしむ

○ 腰背筋膜

腰背筋膜は強き筋膜にして前後の二葉より成り後は薦骨及び腰椎の棘状突起に附着し前は腰椎横突起に附着し共に癒合して薦骨脊柱筋の下部即ち起始と固く連合し以て筋の起始地と成る

乙 腹筋

腹筋とは腹腔の前面と側壁とに縦横斜に緊張せる處の肉壁を云ふものにして是を分ちて縦横の二種とす而して縦筋には二筋横筋には三筋あり就中横筋は皆扁平筋にして前腹正中線の近くに至れば腱膜となり其正中線に於て劍状突起より耻骨軟骨接合に

達する縦線を生ず是を白條と云ふ

イ 縦筋

(一) 直腹筋

(第四乃至第十二肋間神経、膈骨、下腹及び膈骨鼠蹊神経分佈す)

直腹筋は長き三角形の數腹筋にして二三の肉尖を以て第五乃至第七肋軟骨の前面に起始し内縁は白條に接し下端は下方に向ひて耻骨の上縁及び耻骨軟骨接合の前面に停止せり其作用は前腹壁を短縮す

(二) 三稜腹筋

(膈骨下腹神経分佈す)

三稜腹筋は長三角形の一小筋なり直腹筋下部の前面にありて耻

骨の上縁より起始し上方に向ひ白條の下部に停止せり其作用は白條を緊張す

口 横 筋

(一) 外斜腹筋

(第四乃至第十二肋間神經、腸骨) 下腹及び腸骨鼠蹊神經分佈す

外斜腹筋は方形にして下七個の肋骨外面より七個の肉尖を以て起始し内下方に向ひ白條耻骨結節及び腸骨前上棘に停止せり其作用は腹腔を壓縮す

(二) 内斜腹筋 (同上)

内斜腹筋は方形にして外斜腹筋の下にありプーバルト氏靱帯の

圖 三 十 五 第



後半部及び腸骨櫛の前部より起始し前上方に向ひ扇状に分散して下三四の肋骨と白條に停止せり其作用は腹腔を壓縮す

(三) 横 腹 筋 (同上)

横腹筋は四方形にして内斜腹筋の下層にあり、腰背筋膜、腸骨櫛下六個の肋軟骨内面より起始し對側に向つて白條に停止せり其作用は腹腔を壓縮す

○ プーバルト氏靱帶

プーバルト氏靱帶は一名鼠蹊靱帶と名け外斜腹筋の下縁より出
來たるものにして腸骨前上棘より耻骨結節の間に緊張せるもの
なり而して此内端耻骨の上縁に附着したる部をギンベルナー
氏靱帶と云ふ

○ 股輪

股輪はプーバルト氏靱帶内端の下際と耻骨との間に在り動靜脈
を通じヘルニヤ症を來すの部なり

○ 鼠蹊管

鼠蹊管は股輪の上内部にあり腹筋の全層を穿通して成る膜管に
して男子に於ては精系女子に於ては子宮圓靱帶を通ず而して其
内孔を内鼠蹊輪外孔を外鼠蹊輪と云ふ是れ鼠蹊ヘルニヤ症を來
すの部なり

○ 横隔膜 (上頸叢の分枝横隔膜神経分佈す)

横隔膜は腹腔と胸腔とを分隔せる膜様の筋にして呼吸筋の主位
を占む形ち圓天井の如く上面は穹隆にして周縁殊に後方は低し
而して胸廓下口の周縁より起始し後部は殊に強厚の腱にして右
は第四左は第三腰椎體より起り第一腰椎の部位に至り左右結合
して一の裂孔を作る是を大動脈裂孔と稱す更に其前部に食管裂
孔を造り周圍より集合して中心の腱質部に停止せり、腱質部正中

圖四十五第



の稍や右側に一孔あり下大
静脈孔と云ふ其作用は胸腔
を擴張して吸氣を營ましめ
同時に腹腔を狭めて其内容
を壓す

丙 胸筋

胸筋とは胸廓の前壁と側壁
とを覆ふ處の肉壁を云ふものにして是を分ちて淺層及び深層の
二とす

イ 淺層 (四筋あり)

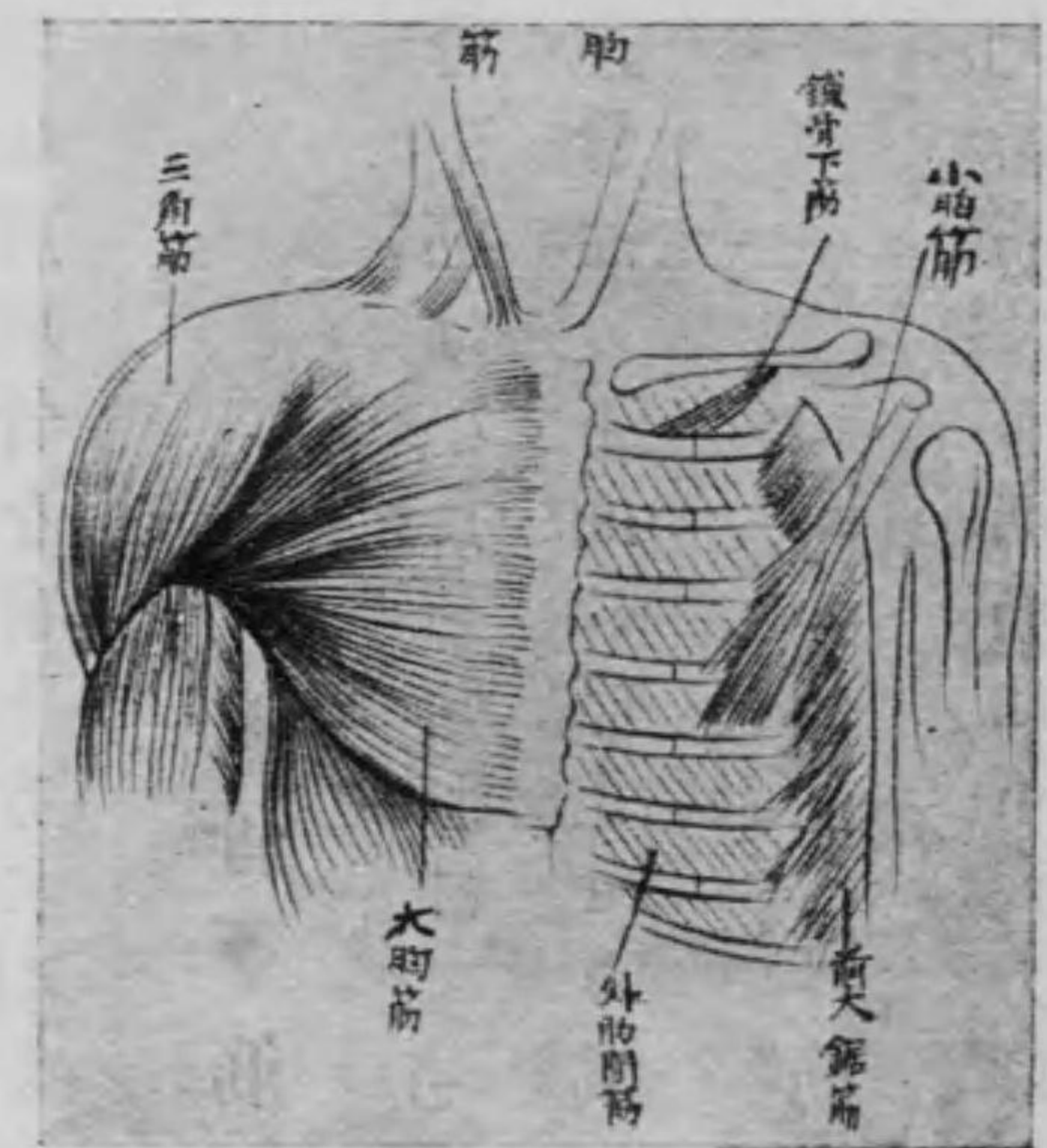
(一) 大胸筋 (前胸廓神経分佈す)

大胸筋は三角形をなし鎖骨の内端胸骨并に上六個肋軟骨の前面
及び外斜腹筋の腱膜より起始し外端集合して狭少し上膊骨の大
結節棘に停止せり其作用は上膊
を前内方に引く

(二) 小胸筋 (同上)

小胸筋は大胸筋の下層にあり長
三角形にして第三乃至第五肋骨
の前端より起始し外上方に上り
肩胛骨の烏喙突起に停止せり其

圖五十五第



作用は肩胛骨を前下方に引く

(三) 鎖骨下筋 (鎖骨下神経分佈す)

鎖骨下筋は小長三角形にして第一肋骨より起始し上方に走りて鎖骨體の下面に停止せり其作用は胸鎖關節を固定せしむ

(四) 前大鋸筋 (後胸廓神経分佈す)

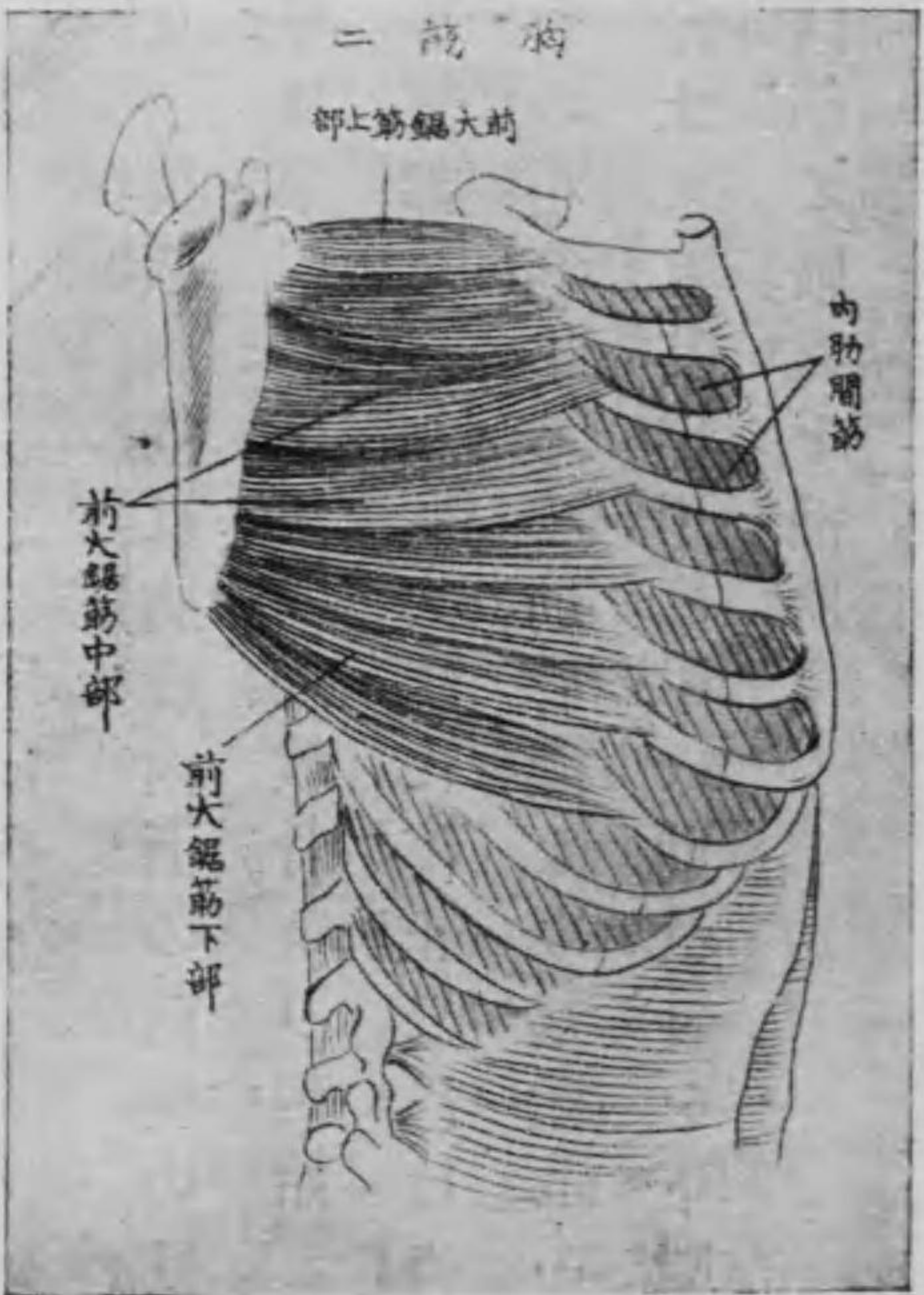
前大鋸筋又前鋸筋は不齊方形にして胸廓の側壁を覆ひ九個の肉齒を以て上九個の肋骨より起始し側壁を後方へ廻りて肩胛骨の基底に停止せり其作用は肩胛骨を前方に引く

口 深層 (四筋あり)

圖六十五第

二筋胸

部上第鋸大前



(一) 内及び外肋間筋 (肋間神経分佈す)

内及び外肋間筋は肋間腔の内、外側に緊張せる二種の筋にして甲

の後縁は肋骨隅に達し前縁は胸骨縁に達す、乙の後縁は肋骨結節に達し前縁は肋骨前端に達す其作用は甲は肋骨を牽下し乙は舉上す故に甲は呼吸の用をなすものは吸氣の用をなすものなり

(二) 前及び後横胸筋 (同上)

前及び後横胸筋は胸廓内面の前後の壁に緊張せる二種の筋にして甲は第二乃至第六肋軟骨より起始し斜に内下方に走り胸骨側縁の下部及び劍狀突起に停止し乙は脊柱兩側の肋軟骨内面にある數對の小筋にして肋骨隅より起始し一或は二肋を斜に上方へ跨り停止せり其作用は甲は肋軟骨を下撃して呼氣を補助し乙は外肋間筋と吸氣を補助す

丁 頸筋

頸筋とは頸の前側側部及び脊柱の前方に位せる諸筋の總稱にして是を分ちて淺層・深層の二こなし更に淺層を長筋・短筋に分ち、深

層を又内列・外列に分つ

イ 淺層 (長筋三筋あり)

(一) 潤頸筋 (上頸皮下神経分佈す)

潤頸筋は薄き方形の皮下筋にして第一肋骨に對し胸筋膜より起始して内上方に昇り下顎骨の下縁及び耳下腺咬筋膜に停止せり其作用は頸の外皮を緊張す

(二) 胸鎖乳嘴筋 (副神經及び頸椎神經の胸鎖乳嘴筋枝分佈す)

胸鎖乳嘴筋は長方形にして潤頸筋の下層にあり二頭を以て胸骨の劍柄及び鎖骨の内端より起始して斜めに外上方に昇り乳嘴突

起の外面に停止せり其作用は頭蓋を前進し且つ一側の働きに於ては顔面を對側に向けしむ

(三) 二腹顎筋 (前腹には顎舌神經後腹には莖狀神經分佈す)

二腹顎筋は圓き紡錘狀の二腹筋にして腹間腱に連り後腹は顚顎骨の乳嘴截痕より起始し内方に走りて舌骨に附着し前腹はそれより上方に昇りて下顎骨の二腹筋窩に停止せり其作用は舌骨を上舉し或は下顎を下撃す

第五十七圖



□ 淺層短筋

頭蓋より舌骨に來るものを舌骨上筋と稱し三筋あり

(一) 莖狀舌骨筋 (莖狀神經分佈す)

莖狀舌骨筋は細長の筋にして顚顎骨の莖狀突起より起始し前方に走りて舌骨に停止せり其作用は舌骨を後上方に引く

(二) 顎舌骨筋 (顎舌神經分佈す)

顎舌骨筋は扁平三角筋にして内縁は中央に於て癒合す此筋は下顎骨の内斜線より起始して舌骨體の前面に停止せり其作用は舌骨及び舌を上舉す

(三) 頤舌骨筋 (舌下神經の分枝分佈す)

頤舌骨筋は紡錘形にして顎舌骨筋の上にあり下顎骨の頤棘より起し後下方に亘りて舌骨體に停止せり而して内縁は相接着す其作用は舌骨を上擧す

ハ 淺層短筋

胸廓の上部より舌骨に來るものを舌骨下筋ニ稱し四筋あり

(一) 胸骨舌骨筋 (舌下神經の下行枝分佈す)

胸骨舌骨筋は扁平長方形にして胸骨の劍柄及び胸鎖關節の内面より起し上方に昇り舌骨體に停止せり其作用は舌骨を下擧す

(二) 胸骨甲状筋 (同上)

胸骨甲状筋は同じく扁平長方形にして胸骨の劍柄及び上一二肋軟骨の内面より起し胸骨舌骨筋の下層を昇り甲状軟骨の斜線に停止せり其作用は甲状軟骨を下擧す

(三) 甲状舌骨筋 (舌下神經の甲状舌骨筋枝分佈す)

甲状舌骨筋は扁平方形にして甲状軟骨の斜線より起し上方に向ひ舌骨に停止せり其作用は舌骨を下擧す

(四) 肩胛舌骨筋 (舌下神經の下行枝分佈す)

肩胛舌骨筋は細長の二腹筋にして腹間腱を有し肩胛骨の上縁及

び上横靱帯より起始し弓形に内上方に進み舌骨體に停止せり其作用は舌骨を下撃す

但し上横靱帯は肩胛骨の肩胛截痕に緊張して孔を造り血管神經を通ずる者なり

二 深層 (七筋あり)

外列 即ち頸椎の前側に四筋を有す

(一) 前斜角筋 (下頸叢の分枝分佈す)

前斜角筋は稍や三角形にして三四の肉齒を以て下三四の頸椎横突起より起始し外下方に走り第一肋骨體上面の斜角結節に停止せり其作用は肋骨を上舉し吸氣の一助となる

(二) 中斜角筋 (同上)

中斜角筋は前筋と均しく全頸椎の横突起より起始して外下方に走り第一肋骨の鎖骨下動脈溝の後部に停止せり其作用は肋骨を上舉し吸氣の一助となる

(三) 後斜角筋 (同上)

後斜角筋は下三四の頸椎横突起より起始し中斜角筋の後側を下り第二肋骨に停止せり其作用は肋骨を上舉し吸氣の一助となる

(四) 肩胛舉筋 (第二乃至第五頸椎神經の分枝分佈す)

肩胛舉筋又肩隅舉筋は带状の筋にして四個の肉齒を以て上四個

の頸椎横突起より起始して肩胛骨の内上隅に停止せり其作用は肩胛骨を上擧す

内列に三筋を有す

(一)長頸筋は三角形の集合したる細き筋にして全頸椎體及び上

三個胸椎の前側にあり

(二)前大直頭筋は長三角形にして第五第六頸椎の横突

起と後頭骨體との間にあり

(三)前小直頭筋は方形の小

筋にして後頭骨體と第一頸

椎前弓との間にあり

第五十八圖
頸筋深層



以上三筋の作用中長頸筋は頭蓋の廻轉及び頸椎の前屈を補助し前大及び前小直頭筋は頭蓋を前屈す (頸椎神經の後枝分佈す)

戊 頭蓋筋

頭蓋筋とは頭蓋頂及び顔面諸骨に緊張せる諸筋にして是を分ちて頭蓋頂筋及び顔面筋の二とす

イ 頭蓋頂筋 (五筋あり)

(一) 前頭筋 (顔面神經の顛額枝分佈す)

前頭筋は方形にして上顎骨の前頭突起眉弓及び眼窠上部の外皮より起始し帽狀腱膜の前縁に停止せり其作用は帽狀腱膜を前に

引き且つ前額の外皮を上舉す

(二) 後頭筋 (耳後神経分佈す)

後頭筋は前頭筋の稍や小なるものにして上項線の側部より起始し帽状腱膜の後縁に停止せり其作用は腱膜を後掣す

(三) 耳前筋 (四) 耳後筋 (五) 耳上筋

耳前筋耳後筋及び耳上筋の三筋は皆顳顎筋膜より起始し各集合して耳軟骨の前後及び上部に停止せり其作用も又各筋の方向に従ひ耳軟骨を前後及び上方に牽く

但し耳後筋のみは顳顎骨の乳様部より起始して耳後神経を分佈すれども他の二筋は顔面神経の顳顎枝を分佈せるものなり

○ 帽状腱膜

帽状腱膜は頭蓋頂の部位にあり扁平にして頭蓋頂を恰かも帽子の如く覆ひ外皮は密着すれども骨膜は緩く結合せるが故に皮膚と共に移動す而して前は前頭筋後は後頭骨の上項線側部は顳顎骨の顳顎線に附着せり

□ 顔面筋

顔面筋は甚だ複雑なる小筋なるを以て是を分ちて眼瞼筋口裂筋鼻筋及び咀嚼筋とす

眼瞼筋 (一筋あり)

(一) 眼輪匠筋 (顔面神経分佈す)

眼輪匠筋又眼輪匠筋は眼裂を圍擁したる輪狀の扁平筋にして外皮の直下にあり前頭骨の鼻部内眥部等より起始して上下眼窠縁を輪狀に圍繞し上顎骨の前頭突起に停止せり其作用は眼瞼を閉鎖し且つ内眥に向つて牽引す

口裂筋 (八筋あり分ちて三層とす)

第一層に四筋を有す

(一) 顴骨筋 (顔面神経分佈す)

顴骨筋又大顴骨筋は顴骨弓の前部より起始して内下方に走り口

角(口輪匠筋)に停止せり其作用は口角を後上方に牽引す

(二) 笑筋 (同上)

笑筋は耳下腺咬筋膜より起始して内方に走り口角に於て三角頤筋と癒合す其作用は口角を後方に引き壓を作

(三) 三角頤筋 (同上)

三角頤筋は三角形を呈して廣く下顎骨の下縁より起始

圖九十五第



して外上方に集合し同じく口角(口輪匠筋)に停止せり其作用は口角を下方に擧す

(四) 方形上唇筋 (同上)

方形上唇筋は方形にして上顎骨の前頭突起下眼窠縁及び顴骨の三部より起始し集合して鼻翼及び上唇の外皮に停止せり其作用は鼻翼及び上唇を上擧す

第二層に二筋を有す

(一) 犬齒筋 (同上)

犬齒筋(又口角舉筋)は長方形にして上顎骨犬齒窩より起始し下りて口角に停止せり其作用は口角を上擧す

(二) 方形頤筋 (同上)

方形頤筋は同じく方形にして下顎骨の頤部より起始し昇りて下唇に停止せり其作用は下唇を下擧す

第三層に二筋を有す

(一) 頰筋 (同上)

頰筋は長方形にして上下顎骨齒槽突起の後部より起始し前走して口角に來り口輪匠筋に停止せり其作用は口裂を閉鎖す

(二) 頤筋

頤筋(又舉頤筋)は口輪匠筋に覆はれ下顎骨門齒の齒槽突起より起

始し頤部の外皮に停止せり其作用は其部の外皮を上撃す

○ 口輪匠筋

口輪匠筋又環口筋は頰筋の一部延長して口裂を輪匠せるものにして二層より成り一は外皮に密着し一は粘膜に連接す而して一部鉛直に延びて鼻中隔に走り同部を下撃す

鼻筋 (二筋あり)

(一) 鼻翼下撃筋 (同上)

鼻翼下撃筋は上顎骨犬齒部の齒槽突起より起始して上走し鼻翼の側部に停止せり其作用は鼻翼を下撃す

(二) 鼻壓縮筋 (同上)

鼻壓縮筋は上顎骨犬齒の上部より起始して鼻翼の側方を昇り鼻背及び鼻尖に至り對側のものと癒合して停止せり其作用は鼻を壓縮す

咀嚼筋 (四筋あり)

(一) 顳顳筋 (三又神經第三枝分佈す)

顳顳筋は團扇状にして顳顳窩の全部及び顳顳筋膜より起始して前下方に集合し顳骨弓の内面を経て下顎骨の烏喙突起に停止せり

(二) 咬筋 (同上)

咬筋は長方形にして下顎枝の外面にあり、顴骨弓より起始して下顎隅の外面に停止せり。

第十六圖



(三) 外翼状筋 (同上)

外翼状筋は三角形の小筋にして、蝶骨翼状突起の外板及び大翼の顴窩部より起始して後方に集合し、下顎骨髁状突起の下部に停止せり。

(四) 内翼状筋 (同上)

内翼状筋は稍や方形にして、上部は外翼状筋に覆はれ、蝴蝶骨翼状突起の後側より起始し、斜に下方に走り、下顎枝の内面に停止せり。以上四筋の作用は、顴筋、咬筋及び内翼状筋は下顎を上舉し、上顎に向はしめ、即ち口を閉鎖せしむ。外翼状筋は髁状突起を前進せしむ。即ち一側収縮せば、同側の關節頭を前進するも、他側は元位に止まる。故に左右交々働くときは、所謂白磨の運動を営ましむ。

○ 顴筋膜

顴筋膜は、顴線より起り、下りて顴骨弓に附着す。其附着部は内、外二葉に分れ、其間に脂肪組織を含有す。

○ 耳下腺咬筋膜

耳下腺咬筋膜は咬筋を覆ひ延長して耳下腺を包含す

第二 四肢筋

四肢筋を上肢筋及び下肢筋に區別す

甲 上肢筋

上肢筋を更に肩胛筋・上膊筋・前膊筋及び手筋に分つ

イ 肩胛筋 (六筋あり)

(一) 三角筋 (腋窩神經分佈す)

三角筋は肩部の膨隆を形成せる三角形筋にして皮下にあり鎖骨の先端肩胛棘及び肩峰突起より起始して下方に集合し上膊結節に停止せり其作用は上膊を上舉す

(二) 棘上筋 (三) 棘下筋 (肩胛上神經分佈す)

棘上筋は肩胛骨の棘上窩棘下筋は棘下窩に三角形に緊張し共に上膊骨の大結節に停止せり其作用は甲は三角筋の働きを助け乙は上膊を外轉す

(四) 小圓筋 (腋窩神經分佈す)

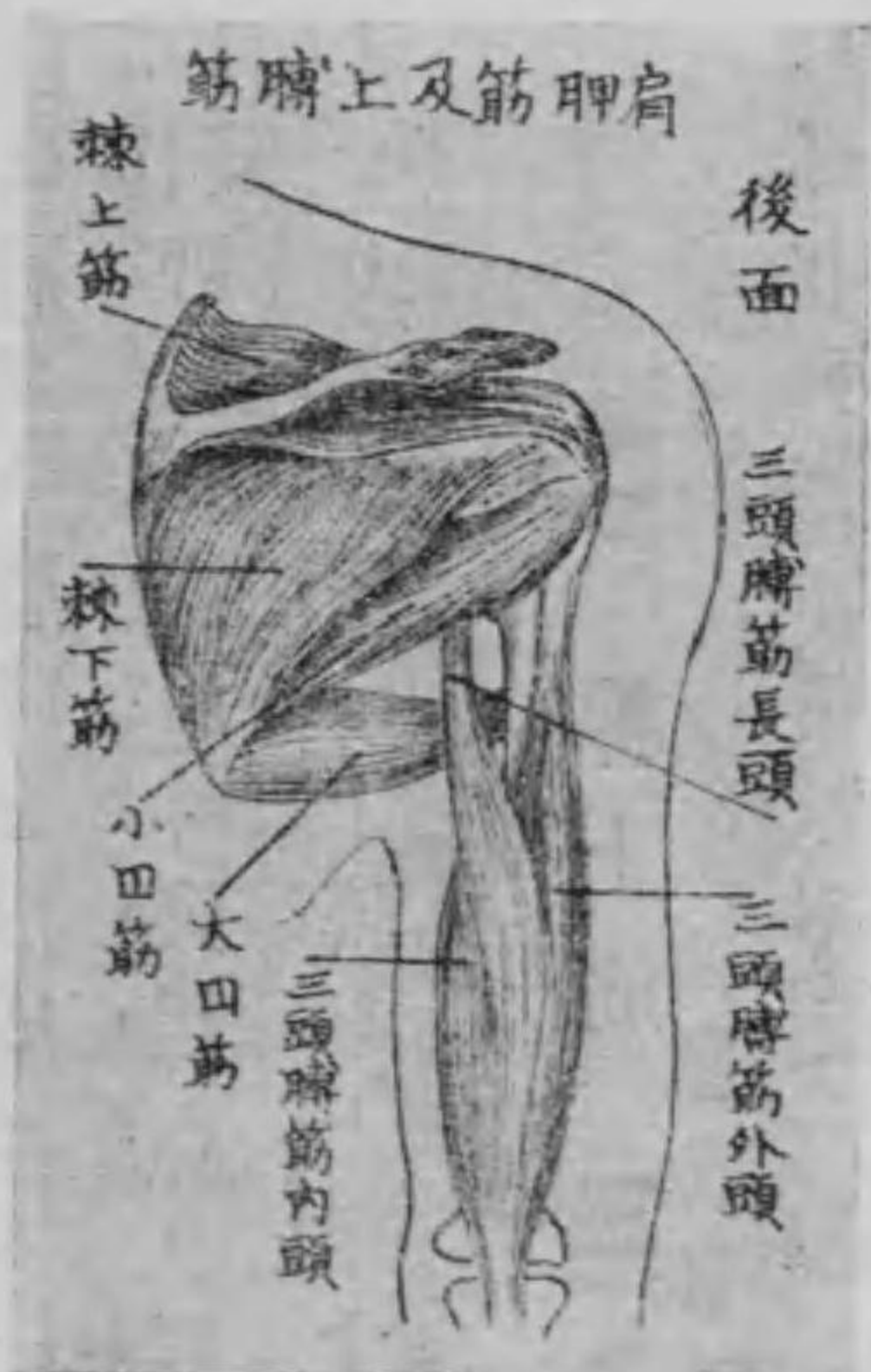
小圓筋は小圓柱形にして肩胛骨外縁より起始して棘下筋の下縁に接し上方に走り上膊骨大結節の下部に停止せり其作用は上

膊を外轉す

(五) 大圓筋 (肩胛下神經分佈す)

大圓筋は稍や方形に近く、肩胛骨下隅の後面より起始して外上方に走り、潤背筋と共に上膊骨の小結節棘に停止せり、其作用は上膊を後下方に引き且つ内旋す

圖一十六第



(六) 肩胛下筋 (同上)

肩胛下筋は三角形にして、肩胛下窩より起始し、外上方に集合して上膊骨の小結節に停止せり、其作用は

上膊を内轉す

口 上膊筋

上膊筋は殆んど長筋にして骨の周圍を擁護せる筋なり

前側 (三筋あり)

(一) 二頭膊筋 (外膊皮下神經分佈す)

二頭膊筋は肩胛骨より前膊骨に跨り、長短の二頭を有して紡錘形をなし、長頭は肩胛骨窩上結節より短頭は烏喙突起より起始し、上膊中央に於て癒合し、下りて前膊に至り、末端腱となり、橈骨結節に停止せり、其作用は前膊を屈す

(二) 烏喙膊筋 (同上)

烏喙膊筋は稍や紡錘形の短筋にして烏喙突起より起始し二頭膊筋短頭の後側を下りて上膊骨内面の中央に停止せり其作用は上膊を上撃す

(三) 内膊筋 (同上)

内膊筋は厚き扁平筋にして上膊骨前面の下部より起始し下りて尺骨の尺骨結節に停止せり其作用は前膊を前屈し且つ關節囊を緊張す

圖二十六第



其作用は前膊を前屈し且つ關節囊を緊張す

後側 (二筋あり)

(一) 三頭膊筋 (橈骨神經の筋枝分佈す)

三頭膊筋は稍や紡錘形にして長内外の三頭を有し長頭は肩胛骨の窩下結節内頭は上膊骨螺旋狀溝の下部及び外頭は螺旋狀溝の上部より起始し下りて末端は總腱となり尺骨の鶯嘴突起に停止せり其作用は前膊を伸ぶ

(二) 小肘筋 (同上)

小肘筋は三角形の小筋にして上膊骨の外上髁より起始し尺骨上端の外面に停止せり其作用は三頭膊筋を補助す

八 前膊筋

前膊筋は總べて前膊を圍繞せる筋尺骨側は缺ぐにして淺深數層をなす是を分ちて前側(筋)後側(筋)及び橈骨側(旋)とす

前側淺層 (五筋あり)

(一) 廻前圓筋 (正中神經分佈す)

廻前圓筋は長方形にして上膊骨の内上髁及び尺骨結節より起始し外下方に斜に走り橈骨外面中央の粗糙部に停止せり其作用は前膊を廻前す

(二) 内橈骨筋 (同上)

圖三十六第

筋側前膊前



内橈骨筋(又橈腕屈筋)は紡錘形にして上膊骨の内上髁より起始して斜めに尺骨の前側を下り長腱を以て第二掌骨の基底に停止せり其作用は手腕を屈す

(三) 内尺骨筋 (尺骨神經の筋枝分佈す)

内尺骨筋(又尺腕屈筋)は同じく紡錘形にして内上髁及び鶯嘴突起の一部より起始し尺骨の前側を下り腱延長して豆骨に停止せり

其作用は手腕を屈し且つ手を内轉すべし

(四) 長掌筋 (正中神經分佈す)

長掌筋は細長の紡錘形にして内橈骨筋と内尺骨筋との間にあり内上髌より起始して前膊の中央を下り細長の腱となり手掌の腱膜に停止せり其作用は手掌腱膜を緊張して手腕を屈す

(五) 淺屈指筋 (同上)

淺屈指筋は長扁平筋にして前筋の下層にあり内上髌及び橈骨の上部より起始して尺骨の前側を下り手掌に至り四條に分れて長腱となり第二乃至第五指の中節に停止せり其作用は中節を屈す

前側深層 (三筋あり)

(一) 深屈指筋 (正中神經の深枝分佈す)

深屈指筋は紡錘形にして尺骨上部の前面及び骨間靱帯より起始し手に向つて下り腕骨に至りて四條の腱に分裂し淺屈指筋腱の下層となり第二乃至第五指の第三節に停止せり其作用は各指を屈す

但し骨間靱帯は尺骨と橈骨との骨間櫛に緊張せるものなり

(二) 長屈指筋 (同上)

長屈指筋は同じく紡錘形にして内側は深屈指筋と相接し橈骨上部の前面及び骨間靱帯より起始して拇指に向ひ長腱となり拇指の末節に停止せり其作用は拇指を屈す

(三) 廻前方筋 (同上)

廻前方筋は方形にして尺骨下端の前面より起始して横に走り橈骨下端の前面に停止せり其作用は前膊を廻前す

橈骨側

(一) 膊橈骨筋 (橈骨神經の深枝分佈す)

膊橈骨筋又長廻後筋は長三角形にして上膊骨外上髁の上側より起始して橈骨の

圖四十六第 筋層深膊前



外側を下り橈骨莖状突起の前面に停止せり其作用は前膊を屈し且つ橈骨を廻後す

(二) 長外橈骨筋 (同上)

長外橈骨筋又長橈腕伸筋は同じく長三角形にして上膊骨外上髁の上側より起始し膊橈骨筋の後を下りて長き腱となり第二掌骨基底の背面に停止せり其作用は手腕を伸し且つ外轉せしむ

(三) 短外橈骨筋 (同上)

短外橈骨筋又短橈腕伸筋は紡錘形にして上膊骨外上髁より起始し長外橈骨筋の後下側を下りて長き腱となり第三掌骨基底の背面に停止せり其作用は手腕を伸し且つ外轉せしむ

後側淺層

(三筋あり)

(一) 總指伸筋 (橈骨神經の深枝分佈す)

總指伸筋(又伸指筋)は扁平紡錘形にして上端は前三筋に覆はれ上膊骨外上髁の後面より起始して背側を下行し四腱に分裂して第二乃至第五指骨の第三節に停止せり其作用は各指を伸ぶ

(二) 固有小指伸筋 (同上)

固有小指伸筋は細き紡錘形にして總指伸筋に接着して外上髁の後面より起始し長き腱となり同筋の第四腱と共に小指の指背腱膜に停止せり其作用は第五指を伸ぶ

(三) 外尺骨筋 (同上)

外尺骨筋(又尺腕伸筋)は紡錘形にして外上髁及び尺骨上部の後面より起始し尺骨の後側を下りて第五掌骨の基底に停止せり其作用は手腕を伸展す

後側深層 (五筋あり)

(一) 廻後筋 (橈骨神經の深枝分佈す)

廻後筋(又短廻後筋)は方形にして尺骨上端の外側より起始し外下方へ斜めに走りて橈骨結節の下部に停止せり其作用は橈骨を廻後せしむ